
幻界創世記

冬泉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻界創世記

【Nコード】

N5674E

【作者名】

冬泉

【あらすじ】

みなせしやう 三奈瀬翔と河邑彰かわむらあきひは、東京近郊にあるUNO学院に通う一年生。映画の結果に対するちょっとした不満からオリジナル結末かみわきあおいの創作を始めたことをきっかけに、同学院二年生の美貌の才媛、神和姫葵と知り合うのだが・・・。

STAGE 00 「あらすじと、人物と、用語と」(前書き)

ここまでのあらすじ、人物と用語の解説を徐々に行っています。
ストーリー中で判らない事がありましたら、こちらをご参照下さい。
また、本内容は多少のネタバレを含みます。誠に恐縮ですが、その
旨をご了解下さい。

STAGE 00 「あらすじと、人物と、用語と」

■あらすじ（STAGE 3 - 10まで）

三奈瀬翔と河邑彰は、東京近郊にあるUNO学院に通う一年生。映画の結果に対するちょっとした不満からオリジナル結末の創作を始めたことをきっかけに、同学院二年生の神和姫葵と知り合う。葵から、“小説よりも自由度が高い、創作に適したツール”があると聞いた翔は、葵からそのツールの使い方を教えて貰うことになった。

ところが、その過程で葵に憧れる彰が参加してきたことで心を乱された翔は、葵に対して不用意な発言をしてしまい、愛想を尽かされそうになる。だが、葵の親友である高国亜里沙と出会い、事情を知った亜里沙に背中を押して貰った結果は、翔は勇気を振り絞って自分の非を素直に葵に告白する。翔の謝罪を受け入れた葵は、翔に引き続きADNDを教えていくことにした。

だが、誰も気が付かない内に、何の変哲もない日常に非日常が忍び寄っていた。調子が優れない葵が、それでも翔との約束を守るべく屋上に向かうと、突然脳裏に少女の声が聞こえてくる。その時、虚空から現れた金色の杯を巡って、翔と葵は摩訶不思議な相手に襲われるが、危機一髪のを金色の戦士に助けられた……。

■登場人物

三奈瀬 翔 「SHO MINASE 173cm/A」

UNO学院高等部1年生で、本編の主人公（？）。SFとファンタシイが好きで、常に努力家であろうと務める苦労人だが、優柔不断で腰が重い性格が災いして、度々自作自演の危機に陥っている。

葵から聞いた「小説より自由度が高い創作媒体」に興味を持ち、その媒体であるADNDを教えて貰う所まで漕ぎ着けるのだが・・・。

河邑 彰 「AKIRA KAWAMURA 180cm/O」
UNO学院高等部1年生で翔の悪友。何時も一緒に行動している。「栄えある主義」(HEある主義"ハッピーエンドの意味)の信奉者で、何でもハッピーエンドにならなければ気が済まない。よく言うて楽天的でおおらか、悪く言えばいい加減でちゃんぼらんな性格をしているが、何処か憎めない良い奴である。葵と少しでもお近づきになるべく、無謀にも葵に、自分もADNDを教わりたいと頼み込むが・・・。

神和姫 葵 「AOI KAMIWAKI 159cm/AB」
UNO学院高等部2年生。品行方正・容姿端麗・頭脳明晰の三拍子が揃った才媛だが、ちょっと変わっている。元文芸部部长だったが、部内で揉め事があり、現在は退部している。ふとした事で翔と彰と知り合う。何処で覚えたのか、意外にもADNDの知識があり、興味を持った翔に教えていく。意外と頑固で、思いこんだらことん追求という一面を持っている。

高国 亜里沙 「ARISA TAKAKUNI 165cm/A」

UNO学院高等部2年生で葵の親友。UNO学院に入った時、葵と席が隣同士だったことから親しくなる。才気活発・スポーツ万能・強挫弱助の三拍子が揃った正義感が強い、姉御肌の人物である。翔の良き相談相手で、彰の喧嘩友達でもある。

御殿山 貴人 「TAKAHITO GOTENYAMA 176cm/B」

UNO学院高等部1年生で翔と彰のクラスメイト。翔がプレイヤ

「ハンドブック（用語説明参照）の翻訳をやっていた時に、翻訳ソフトを使って楽することを勧める。頭でっかち、理論先行、底意地が悪いと三拍子揃ったナイスガイである（笑）。

琉央 「RUOH 183cm/?」

翔がリフトホールで出会った二年生。翔の名前を知っていたが、翔は自身は初対面だった。葵とは文芸部関係で因縁があるようだが、現段階では不明。自分自身を“MASTER”と呼称している。

リュオン
龍王・漠羅爾 バクラニ 「RYUON BAKULUNI 195cm/A」

『金杯』によって異空から呼び出された金髪碧眼の戦士。金色の鎧を纏い、細身の直刀を使う。背が高く、豹の様な痩身だが、その実力は圧倒的で、翔と葵に害を為したDREAD KNIGHT（破滅の騎士）を一撃で彼方へと追いやった。ひょうひょうとして捕らえ所のない性格だが、以外に世話焼きでもある。

リナ
璃奈・恵久美流 エクピル 「RINA EKBIR 157cm/B」

漠羅爾新王朝の一国、恵久美流公国の第一公女。通称“お嬢”と言われるお転婆娘だが、その“夢見”の力はずば抜けている。ラルフ・ロビラー（龍の盾）から“強奪”した龍のペンダントをいつも胸に掛けている。明るく朗らかで、誰とでも友達になれる特技（?）を持っている。

■用語説明

UNO学院 「UNO INTERNATIONAL ACADEMY」

UNO（国連）の教育局が世界各地で運営する学校組織。日本で

は、横浜に中等部＋高等部の複合施設と、富士の裾野に大学部が設置されている。学校法人形態としては他に先駆けて、総合システムを統括する第七世代型メインフレーム（名称は『タルカーン』）を導入し、随所でユーザーによる音声指示が可能となっている。

最後のユニコーン 「THE LAST UNICORN」
P・S・ビーグル著の傑作ファンタシイ。ハ。カワFT文庫から出版されている（FT-11）。過去に日欧合作のアニメーション映画も作られている。

リアル・ストーリー・プレイ手法 「REAL STORY P
LAYING METHOD」
ロールプレイング・ゲームのマスター、即ち“親”を行う際の技法の一つ。『BASE TIME LINE』（BT、基礎時間軸）と『INFLUENCE POINT』（IP、干渉点）という仕組みを軸に、『FLOWER SCENARIO』形式（セッション中のプレイヤーの行動によってシナリオをリアルタイムに修正する形式）にて、プレイヤーの行動によって自由にセッションの方向性、世界情勢、NPCの反応などがリアルで修正されていくというもの。通称RSP。

ADND 「ADVANCED DUNGEON & DRAGONS（R）」

ロールプレイングゲーム（RPG）というジャンルの元祖で、その代名詞たるゲームシステム。そもそも、“ロールプレイングゲーム”と言う名称や、現在コンシューマー用の所謂“ロールプレイングゲーム”に普通に使われている“PC”、“NPC”などの用語は、全てこのADNDを起源とする。ADNDは内容的に非常に多岐に渡り非常に複雑なシステムだが、ユーザーに対して何かを創造する際に無限の可能性を与えてくれる。

プレイヤーハンドブック「PLAYER'S HANDBOOK」

葵が翔に読み込むようにと渡したマニュアル。ADNDをプレイする際に、プレイヤー（ゲーム参加者）が使用するルールを纏めたハードカバーマニュアル。結構難解な英文が320ページも続く。通称PHB。

セントラル・スクエア「CENTRAL SQUARE」

駅前の総合ショッピングモール。翔が彰に引っ張られて良く行く、アミューズメント・ゲームスペースもここにある。

マスター「MASTER」

琉央がリフトの中で漏らした謎の言葉。本人はMASTERらしいが、そもそもMASTERとは何か？

金杯「GOLDEN CUP」

空中に現れ、葵の手に入った金色の小杯。漠羅爾バクラニのリュオンを呼び出す力を発揮した“神遺物”（ARTEFACTE）。

STAGE 00 「あらすじと、人物と、用語と」(後書き)

本編は私の初めての小説で、「リアルストーリーの光と影」というコラムが元になっています。このコラムは、リアルストーリープレイ(RSP)の解説を兼ねていましたので、ネット掲載するに辺り、ゲーム解説的な部分を修正し、「幻界創世記」と題名を変えたものです。

非常な拙文で大変お恥ずかしい限りなのですが、ひととき一時でもお読みになってお楽しみ頂ければ幸いです。

SCENE・01「全ての始まり」（前書き）

翔と彰登場。映画をきっかけに話が展開するが・・・

SCENE・01「全ての始まり」

■UNO学院／本部棟／カフェテリア

緑の丘陵部に、唐突にガラスと金属の構造物が立ち上がっている。中心のひとときわ高い円筒形の高層建築を、高・中・低の三つの円筒形の建築が取り巻く。ここは、UNO学院。UNO（国連）の教育局が世界各地で運営する学校組織の一つであり、横浜郊外にあるこの施設には中等部＋高等部が置かれていた。

昼休みのUNO学院管理棟。中等部と高等部が共用している広いカフェテリアは、大勢の生徒で大分賑わっていた。採光を重視している洒落たデザインは、とても学校施設とは思えないレベルの完成度である。

UNO学院はUNO（国連）の直轄機関が運営する学校法人なので、運営方法や付帯設備に関しても、日本国内の学校とはその様相を大分異にしていた。

三奈瀬翔みなせしょうは、この4月からUNO学院の高等部に入学した新入生だ。“中等部から大学部までの一貫教育による国際感覚を持った人材の育成”をポリシーとするUNO学院にあって、途中入学が許可されることは非常に珍しかった。編入試験は確かに難しいものの、成績だけを編入の条件にしているのではなく、本人の資質・姿勢をより重視している。そうでなければ、英語が今一つ不得意な翔がUNO学院に編入できる訳がなかった。

「おい、翔！」

「やあ、彰」

声を掛けられた方向に視線を振ると、悪友の河邑彰^{かわむらあきひ}がトレイに昼食を載せて歩いてくるところだった。彰は、翔と同じく高等部からの編入組である。良く日焼けした陽気な顔つきで、勉強は限りなく×（ペケ）に近いものの、スポーツでは抜群に優秀だった。

「昨日の晩、見ただろ？」

「ああ、“最後のユニコーン”だね。もちろん見たよ」

トレイを抱えて器用に人混みを抜けてきた彰に、翔は笑って言った。

「ちょっと絵が洋風なのが気になったけど、あとは原作に忠実だね」

「俺は最後が気に入らないな」

「原作読んだ時も、彰はそう言ってたね」

「当たり前だぜ、翔！ くっそー、俺だったらあそこでアマルシア姫を放さないぞ。精神的な愛情なんてくそくらえだ！」

「相変わらず過激だなあ、彰は。・・・でも、確かに僕もあのエンディングには、僕もすつきりしないものを感じたよ」

「そうだろ、そうだろ！」

友人からの同意に我が意を強くしたのか、彰は蕩々と持ち前の自説をまくし立てる。それを辛抱強く翔が聞いている——いつもの光景だ。

その演説が一段落したところで、翔は合いの手を入れた。

「御高説は重々承知しているよ。でも、読者・視聴者としての僕らには、完成した作品を受け入れるか、受け入れないかの二択しかないと思うけど？」

「・・・」

珍しく言葉を途切らせて考え込む彰。やがて何か考えついたらしく、顔を上げた。

「お前・・・」

「？」

「翔、お前書けよ！」

「え？ 書くって何を？」

「続きに決まってるじゃないか！ 最後のユニコーンのだよ。作品本体を変えるのは不味いだろうけどな、“IF”って形の続きならいいじゃないか！」

「無理だよ、そんなの」

「やれるって！ お前、以前小説家になりたいって言ってたじゃないか」

「そう思ったこともあったけど・・・」

翔は、自分があのでファンタシの続きを書く事を想像してみた。だが・・・。

「うん。やっぱり無理だよ。僕には文才が無い」

「試してみたのかよ？」

「え？」

「実際になんか書いて、試してみたのか？ 翔、いつもの悪い癖で、やる前から駄目だと思いこんでるんじゃないか？」

「いや、違うよ。実際に文才はないんだ。短い小説を書くこうとして試したこともあるんだけど、時間ばかり掛かった上、出来上がりは酷いものだったんだ」

「そっか・・・」

彰はちよつと考えると、パンと手を叩いた。

「いいことを思いついたぜ！」

「？」

「二年の神和姫先輩に相談しようぜ」

「え？ あの文芸部の？」

「ああ。先輩なら、いいアドバイスをしてくれると思うぜ」

「いきなりは無理だよ、彰。僕は神和姫先輩の事を全然知らないし、それに文芸部員でも・・・」

「へっへっへ」

彰は、まるで悪巧みを考えた悪代官の様に笑うと、ちゅちゅちゅと首を振った。

「それがね、俺神和姫先輩と話したことあるんだ。たまたま、この間図書館で資料運ぶのを助けたことがあってね。だから、見ず知らずの初見さんって訳じゃないんだぜ」

「そうなのかい・・・」

彰らしい行動力に思わず笑ってしまう。しかし、翔はそれも悪くない考えかなと思いきや直した。自分の物書きとしての実力が本当のところどの程度か、知りたくないと言えば嘘になる。それに、校内でもファンが多い神和姫葵と話す機会が持てるのも、ちよつと魅力的だと思ったからだ。

「・・・わかった。自信は無いけどね。試しに“IF”でラストを書いてみようか！」

「そうだぜ！ そうこなくちゃ！」

バン！ と背中を叩かれて、翔は少し咽せた。

「ったく・・・」

現金な彰に苦笑いしつつも、翔の心の中では、“最後のユニコーン”の構想が膨らんでいく。一度決めたら、目標に向かってがむしやらの邁進するのが翔の性格だ。

「・・・なんか、一気に書けそうだよ。帰って、今晚頑張ってみる」「オッケー！ そんじゃ、明日出来上がってたら、昼休みにでも先輩んところ行ってみようぜ！」

妙に力が入る彰にそこはかたない下心を感じながらも、翔は笑って頷いた。

SCENE・01「全ての始まり」（後書き）

構想から大分時間が経ちましたが、最初に自分のサイトにアップしたものを改変して、「幻界創世記」は漸く発表まで漕ぎ着けました。あれを書こう、これも書こうと欲張っていたら、話が詰まって全く進まなくなってしまうました（涙）。やはり、「過ぎたるは、なお及ばざるが如し」ですね。

SCENE・02「最悪の遭遇」（前書き）

葵と亜里砂登場。葵を怒らせた翔と彰は…

SCENE・02「最悪の遭遇」

■UNO学院／学部棟／高等部二年／2-A教室

UNO学院の昼休みは1時間と長い。この時間は、生徒にとって至福の時。一日の中で、最も活気がある時間だ。午前の授業が終わるやいなや、どの教室も毎度の如く喧騒の場となる。

かみわきあおい
神和姫葵は、黙って頬杖をついたまま窓の外に視線をさ迷わせていた。眼下の白い校庭には空から燦々と陽光が降り注ぎ、抜けるような空が蒼い。

「・・・あおい。ねえ、葵ってば」

はつとして声をしたほうを向くと、親友の高国^{たかくに}亜里沙の心配そうな表情が目に入る。

「え？ どうしたの？」

「え、じゃないわよ。ぼーとしてどうしたの？ 具合でも・・・」

「どこも悪くないわ」

「それならいいけど。ね、もうお昼よ？」

「そう・・・ね」

教室では、思い思いの組み合わせで生徒たちがお昼を食べ始めていた。

「今日は、お弁当？」

「ううん。購買部」

「じゃ、早く行きなさいよ。さいてーのしか残らないわよ、この時間だと」

“どうしても、いいんだけど”

心の中でため息をつく。そんな思いが表情に出たのか、亜里沙が怖い顔をして言った。

「ほらほら、きちんとお昼を取らなきゃ病気になっちゃうわよ！なんでもいいから、あるもの買ってきてきなさいよ！」
「え、ええ・・・」

諦めて席を立つ。食欲なんて全然なかったが、形だけでも食べないと、またこの怖い親友に心配をかけてしまう。

「先に食べていてね、亜里沙」
「待ってるって！ だから、早く買ってきてきなさいよ」

ちょっと苦笑い。どうしても急がなくてはいけなくなった。財布を鞆から出して教室を出ると、突然自分の名前が呼ばれる。

「先輩、神和姫先輩！」

驚いて声がしたほうに振り向くと、日に焼けた男子生徒が廊下を走ってきた。

「ちわつす！ 覚えてますよね、先輩。河邑つす」
「河邑くん・・・？」

胸のネーム・プレートは「青」・・・つまり、1学年下だった。浅黒い顔に浮かぶ、その屈託ない笑顔には見覚えがあった。

「・・・この間、図書館で本を運ぶのを手伝ってくれた？」
「ピンポン、そのとおりっす！」

満面の笑みを浮かべて、おもいつきし頷く彰。

「今日はちよっく先輩にお願いがありまして・・・。あつと、先輩。こいつ、ダチの三奈瀬って奴です」

彰の後ろには、いつのまにか男子生徒がもう一人立っていた。涼しげな、けれども意思の強そうな表情をしたその男子生徒は、丁寧に頭を下げる。

「1年の三奈瀬翔です。すみません先輩、お忙しいところをお邪魔して」

「何か、私に用？」

「はい。創作物に関して、先輩のご意見を伺いたいと思ひまして・・・」

「創作物？」

「そうっす。この間UNOテレビでやってた“最後のユニコーン”のラストが気に食わないって翔と二人で話してたんですが、それならって翔がオリジナルのラストを書いてみたんす。その批評を先輩にお願いできないかなって考えたんですが」

「私に？」

「先輩、文芸部の部長っすよね？ そう言うことはお手のもの、朝飯、あつと今だと昼飯前じゃないかって・・・」

笑顔で言いかけた彰は、思わず言葉を飲み込んだ。話を聞いていた葵の表情が、目に見えて強ばったからだ。見ると、小刻みに体が震えている。

「あ、あの、先輩・・・」

「ごめんなさい。友達を待たせているから・・・」

葵の態度の急変に、二人は戸惑った。抑揚のない声で目線を合わせずに言つと、葵は二人の間を抜けるようにして、足早にリフトのほうに歩み去った。声を掛けようとして、翔は思い止まった。小さく嘆息すると、余りの状況に呆然としている彰に声を掛ける。

「・・・行こうか、彰」

「あ、ああ・・・」

葵が歩いて行った方を未練がましく見やると、彰は大きなため息をついた。

「わりい、翔。どうも、俺、調子に乗りすぎちゃったようだ」

「いいんだ。もともと、こっちが押しかけたんだ。縁がなかったと思えば何でもないよ」

「そ、そうだな」

きびすを返して、立ち去ろうとしたとき。

「ちょっと、あんたたち」

髪を肩の線で切りそろえた、気の強そうな女生徒が睨んでいた。胸章を見ると、「高国」と書いてある。

「はい？」

「あんたたち、葵に今何言つたの？」

「あ、いえ・・・創作物を読んで貰って、批評をお願いしようと思つたのですが・・・」

怒った表情の亜里沙に訳がわからず、怪訝そうな二人。

「あんたたちねえ・・・葵は文芸部やめたのよ」

「えっ？ 本当っすか、それ！」

驚く彰に、亜里沙は冷たい声で言う。

「本当よ。当分、葵は“文芸”には一切関わりたくないって言うわ」

翔は素直に頭を下げた。慌てて彰も後を追う。

「すみません、全く知りませんでした」

「ほんとにすまんこつてす」

ふうつと嘆息すると、亜里沙は恐縮して謝る二人を見て態度を少し和らげた。

「あたしに謝ってもらっても仕方がないけど・・・まあいいわ。葵には、後で言うつといてあげるから」

「すみません」

「すんません」

翔と彰はもう一度亜里沙に頭を下げると、その場を立ち去った。

SCENE・02「最悪の遭遇」（後書き）

二回目です。翔や彰と並んで、物語の核となるキャラクター「葵」が登場しました。今後とも活躍してくれる・・・かなあ？ 最初の出だしで、何か躓いているような感じを受けるのは私だけでしょうか？ やれやれ・・・。

SCENE・03「心を決めて」(前書き)

逡巡する翔。でも、心を決めて葵に謝りに・・・

SCENE・03「心を決めて」

■UNO学院／学部棟／屋上

「ったーっ！ まいったぜ！」

学部棟の屋上。燦燦と日光が降り注ぎ、遠くの山からの涼風が吹いている。

翔と彰は、昼食のパンと三角パックのコーヒー牛乳を持って屋上に来ていた。いつもは教室で昼を食べているのだが、今日は先程のことを騒がしい教室で話すのに気が引けたので、人気のないこんな場所を選んだのだ。

「致命的な大ボカしちまったなあ・・・ああ、もう心証最悪ってとこだぜ。それにしても、神和姫先輩、文芸部辞めてたなんてなあ・・・。知らなかったぜ」

「・・・最近のことじゃないのかな」

「へ？」

「いや・・・さきほど高国先輩が言っていた、神和姫先輩が文芸部を退部したっていう話だよ。彰が図書を運ぶのを手伝ったのだ最近だろ？ その時は、まだ文芸部に在籍していたんじゃないかな」

「そりゃ、そうだよな。確かに、文芸部を辞めてたら、そんなことなんかしないよな」

「そう思う。だから、辞めたのは最近ってことだよ」
「なーる！」

「つまり・・・それが事実ってことなら、僕たちが話し掛けたのは最悪のタイミングだったってことだね。知らなかったとはいえ、そんな言い訳は通りそうもないね」

「はあ、まじったなあ・・・完全に嫌われたぜ、ありゃ」

物言いたげな表情で、翔は大袈裟に嘆く友人を見た。

「・・・ふん。彰は結局、そこが本音なのかい？」

「え？ あ？ い、いや」

恐る恐る、友人の顔を見る彰。にっこり笑顔を浮かべているが、目が笑っていない翔。

顔マジな友人が怒るとどんなに恐ろしいか熟知している彰は、みるみる青くなつた。背中に汗がととと伝わる。

「ま、いいけどね」

蛇に睨まれた蛙状態がしばらく続いた後、ようやく放免された彰は大きく息を吐いた。気を取り直すように、努めて明るく言う。

「しっかしなあ。知らなかったといつても、まじいことをしちゃったから。やっぱどつかで謝らないと。」

「そうだね。でも、この状況じゃ、話しかけることも難しいな」

「そーだな」

「そうだよ」

「なんとか、話しかけるチャンスを見つけないとな」

「どうやって？」

「ほら、こう、ぱぱーとだな・・・」

「ぱぱーと、なんだい？」

「あ~~~~わからんよ、そんなもん！」

頭を使うのが苦手な彰は、ものの十数秒で考えるのを止めてしまふ。いつものことだが、こうなると解決策を考えるのは、翔一人の仕事となる。これみよがせに大きな溜息を付くと、翔は立ち上がった。

た。

「？」

「昼休み、終わるよ」

「もうそんな時間か。かーっ、頭を使うと時間が過ぎるのも早いぜ！」

翔は目一杯脱力した。それを見た彰は、事も在るうに自分の事を棚に上げて放言する。

「おいおい、翔！ お前だけが頼りなんだからな。しっかり解決策を考えてくれよな。あ、力仕事ならいつでもやらからよ、いつでも声を掛けてくれよな！」

明るく無責任に笑って言う彰に、ちょっとこめかみに青筋を立てる翔だった。

SCENE・03「心を決めて」（後書き）

三回目です。状況は膠着状態で、何ら好転していませんね（笑）。彰は全く頼りにならないし、翔も大変です。おい、彰。お前そのまんまだと翔に愛想尽かされるぞ！ って、全然堪えている風じゃないけどね。まあ、タフなこと（笑）。

SCENE・04「予想外な反応」(前書き)

屋上で葵を見つけた翔は、謝ろうとするが・・・

SCENE - 04 「予想外な反応」

■ UNO学院 / 学部棟 / 屋上

「あれ？ 誰がいるんだ」

翌日の昼休み。教室に食後の情眠を貪る彰を残し、考えが纏められそうな静かな場所を求めて屋上に上がってきた翔は、人影を見つけて驚いた。

「え？ あれは・・・」

屋上に佇んでいたのは、神和姫葵だった。葵の姿を見て一瞬躊躇した翔だが、意を決して葵のところに歩いていく。

「あの・・・」

葵は、黙って遠くを眺めている。翔は、言すべき言葉を慎重に探した。

「神和姫先輩、1年の三奈瀬です。この間は、唐突に不躰なお願いをしてしまつて、本当にすみませんでした」

「・・・気にしなくてもいいわ」

「えっ？」

葵は翔に向き直ると、フェンスに背を預けた。

「この間の話。あなたたちに、問題があつたわけではないのだから」
「でも、見ず知らずの人に話すのに、少々強引だったかと・・・」

「都合が悪ければ、その場でそう言っているわ。その人の都合は、当人に聞いて見なければわからないでしょう?」

翔は驚いたように葵を見た。知的で、冷静な表情だった。変わってはいるけれど、合理的な考え方に、翔は共感を覚えた。

「それはそうですが・・・」
「おかしい?」

問い返されて、一瞬言葉に詰まる。

「い、え・・・そうは思いません」
「そう・・・。なら、いいわ」

それっきり、会話が途絶えた。海からの微風が、葵の長い髪を解きほぐす。どれくらいそうしていただろうか。

「・・・わたし、行くから」

聞こえた時には、すでに葵は歩き出していた。とつさに声を掛けられずに、翔は黙ってその後姿を見送る。と、葵が途中で立ち止まると振り返った。

「三奈瀬くん・・・」

「は、はい!」

「最後のユニコーン、どう思った?」

唐突な質問に、翔は驚いた。

「そうですね。良い話ですが、リア王子とアマルシア姫の心の交

流が、離別という形で終わったことが、とても不満でした」

「・・・そう・・・」

「種族を超えても、理を超えても、理解しあえる関係があってもいい・・・そう思えたんです」

「でも、現実には二人の道は分かれた。再び、お互いが会おうこともない・・・」

「はい。だから彰と二人で話して、違う結末を考えてみたんです。リーア王子とアマルシア姫、二人の育んだ心の交流が、何かを生み出せるんじゃないかと思って」

“心の交流・・・何かを生み出す流れ・・・。それを押し留めるのは・・・不自然なの？”

目の前の男子生徒を見ながら、葵は思った。

“真剣な目・・・”

「あの・・・。神和姫先輩は、どのように思われますか？」
「え？」

翔は、自分の前に立つ小柄な上級生をじっと見つめた。昨日の、亜里沙の警句が思い出されたが、葵の意見を聞いてみたいという衝動を、翔は押さえることが出来なかった。

「いえ・・・最後のユニコーンの結末です。神和姫先輩は、あれで良いと思われますか？」

「・・・あの小説は、作者の創作物。だから、その結末も作者の自由。でも・・・」

葵が顔を上げた。その深い、褐色の瞳が翔を射る。動悸が早くな

るのを感じながら、翔は葵の次の言葉を待った。

「・・・定められた結末を受身で辿るだけというのは、好きじゃない」

「しかし、小説ってそういうものですよね？」

「小説は、ね・・・」

「それって・・・？ では、それ以外に表現する方法ってあるって
いうんですか？」

思わず声に熱がこもる。

「ええ。あるわ」

あるかなしかの微笑が、葵の口元に浮かぶ。

「本当ですか？ それは、なんなのですか？」

「知りたい？」

「はい、是非！」

「そう・・・わかったわ。じゃあ、放課後。またここで
「えっ？」

問い返した時、すでに葵は校舎内に消えるところだった。翔は二、
三度あたまを振って意識をはっきりさせた。どうにも、今の話に実
感が沸かなかった。

SCENE #5に続く

SCENE・04「予想外な反応」（後書き）

いや〜どうなるかと思いましたが、翔は葵に何とか謝れましたね。誠意を見せるっていうのは大切ですが、相手に伝わって、相手が受け止めてくれるかどうかは相手次第です。「謝ったのに、なんで許してくれないんだよ!」とか逆ギレするのは、本末転倒な話ですね。まあ、相手のことを考えて、低姿勢で行きましょう（笑）。

SCENE・05「複雑な心境」(前書き)

葵と逢う事になったという翔に彰は・・・

SCENE・05「複雑な心境」

■ UNO学院／学部棟／高等部一年／1-A教室

「あの神和姫先輩と話して、放課後逢うことになったってえっ!!」
「おい、彰。声が大きいよ」

叫び声をあげた彰を、何かとクラスメートが見ている。

「何言ってるんだ! 超ビッグニュースじゃない・・・ムグムグ」

笑顔で友人にヘッドロックを決めると、翔は彰の耳にきっぱりと言った。

「声が大きいって、言ってるんだけど?」

「はい、やあ、いえすっ」

ギブギブと唸りながら必死に頷く彰を離すと、翔は笑ってイスの背に持たれた。

「それにしても凄えな。どうやったらそんな話になるんだ?」

「意図した訳じゃないよ。そうだね、どっちかといえば神和姫先輩のほうに興味を持った感じだね」

「くうーーーーっ」

握り拳を作る彰。

「なんちゅーうらまやしい奴っちゃ。くそお、俺が代わりたぜ!」
「何があつたか、後で話すよ」

「え？ おい、翔。俺、一緒にいつちやまずいのか？」

「彰は来いって言われた訳じゃないだろう？」

「その場にいるのに、どうやって言われるんだよ！」

「だから、そう言うことだって。言われたのが僕だけだから、今回は僕だけが逢う。もし話が続くようなら、彰も来ていいかって神和姫先輩に聞いてみるよ」

腕組みして翔の話聞いていた彰は、肩を竦めた。

「まあ、今回はしゃーないわ。でもいいか、翔。しっかりコネクションを作ってくるんだぞ。オッシャアッ！！」

「まったく、誰のための、何のためのコネクションなんだよ・・・」

盛り上がっている友人を眺めて、結構脱力してしまう翔だった。

SCENE・05「複雑な心境」（後書き）

アホですね、彰って。でも、結構こういうキャラが実地では一番しぶといのです。変に自分の限界を決めていないから、状況に対する対応が臨機応変です。それ故に、その状況に対して意外な力を発揮するでしょう。

SCENE・06「問えば応える」(前書き)

屋上で葵は翔にある提案をする・・・

SCENE・06「問えば応える」

■UNO学院／学部棟／屋上

放課後。多くの生徒は既に下校しており、校内は閑散としていた。クラブ活動の練習に勤しむ運動部の部員たちの喧騒が、グラウンド方面から多少聞こえてくる。

翔は屋上への階段を足早に登った。彰に対しては平静に振舞ってはいたが、内心、動悸が高まるのを感じていた。“いなかったらどうしよう”とか、“何を話せばいいんだろう？”とか、彰に知られたら笑い飛ばされそうなことを密かに考えてしまっていた。

“所詮、小心者なんだよな・・・僕は”

自嘲吟味に思っていると、早くも屋上に着いてしまった。『開放厳禁』と書いてある鉄の扉を、恐る恐る開けてみる。

“いた！”

屋上の一番奥に、探していた小柄な姿が見えた。翔は大きく息を吸って気持ちを落ち着かせると、意を決して葵のところに歩いていた。葵は昼間と同じく、フェンスに背を預けている。

「神和姫先輩。すみません、待たせてしまいましたか？」

「今、来たところ」

「そうですか・・・」

それっきり、会話が途絶えてしまう。葵は黙って足下を見ている

ただだ。翔の頭の中は真っ白で、何の話題も浮かんでこない。いきなりの窮地（笑）に、翔は話をどう進めたものかと考えあぐねた。だが。

「三奈瀬くん」

「は、はい！」

「小説って媒体、どう思う？」

“またいきなりの質問だ”

翔は、これが葵のやり方なのだろうと思った。

「自己表現の一手段です。創作物の優劣を度外視すれば、誰でも活用できる創作媒体だと。」

「それは・・・自己完結ではない？」

「どうしてですか？」

「完結された創作物が、作者以外の誰の役に立つというの？」

「作者の考え方や感じ方に共鳴できる人には、有益だと思いますけど」

「そのまま受け入れるということね・・・作者の世界を」

「ええ、そうですね」

「・・・」

葵は瞳を閉じた。黄昏時は移り変わりが早く、だんだんと日が翳っていく。夕焼け色に染まった雲が、西の地平に沈まんとしている。夕陽をしばし隠している。

「先輩・・・」

「・・・人の感じ方は千差万別。それを個性と呼ぶ。他の個性の追体験で、人は本当に満足するの？」

「え？」

「安心感・・・それが、求められているものなの？」
「・・・」

翔は言葉に詰まった。葵が聞いているようなことを、これまで疑問に思わなかったからだった。

「良くは判りません。これまで、そんな風に考えたことがありませんでしたから」

「今は？」

「正直、そう言う考え方に興味を覚えています」

「そう・・・」

フェンスから軀を離して数歩の距離を詰めると、葵は翔の顔を覗き込んだ。褐色の深い瞳に見つめられて、翔の体温が確実に二三度は上昇する。

「・・・あの・・・」

「・・・」

「・・・せ、先輩。」

「興味があるのなら・・・」
「え？」

「・・・教えてあげるわ」

「・・・お、ね、がいします」

瞳の奥の輝きが、翔を金縛りにしたかのようなだった。漸くそれだけの言葉を搾り出すと、大きく息を付く。そんな翔をみて、葵はちよつと微笑みを浮かべた。

「・・・付いて来てくれる？」

「はい」

SCENE・06「問えば応える」(後書き)

ここまででは、翔も比較的順調にきていますが、次回は急転直下となります。ご期待下さい。

SCENE・07「短慮と後悔」(前書き)

自分の短慮が招いた過ちに翔は・・・

SCENE・07「短慮と後悔」

■UNO学院／学部棟／高等部二年／2-A教室

UNO学院中等部／高等部は、その広い敷地の中央に「本部棟」が有り、そして本部棟を正三角形に取り囲む様に「学部棟」「研究棟」「資料棟」が建っており、それぞれが幾つかの空中回廊で結ばれている。各棟の高さは学部棟が一番高く、次いで研究棟、資料棟、本部棟の順となる。学部棟は14階建てで、2階から13階に各学年の教室があり、最下層は受け付け、最上階は各種会議室となっている。

因みに、どのクラスがどの階の教室を割り当てられるかは、体育祭に文化祭の獲得点に、年間のクラス成績を加えた総合ポイントで決まる仕組みである。葵のクラスは昨年度総合2位で、一番見晴らしの良い13階の教室をこの一年間確保していた。

葵と翔は、学部棟の屋上から階段で二階下り、2-Aの教室に来了。既に下校時間も大分過ぎており、教室内には誰も残っていない。葵は、窓際の自分の席に行くと、鞆から大きな目のハードカバーを取り出した。

「これ」

「これはなんですか？」

「マニュアル」

そのA4変形サイズの分厚いハードカバーは全体が黒色で、表紙の上部には黄色の字で『Players Handbook』、その真下に赤い字で『Advanced Dungeons & ampp; Dragons』と書かれていた。表紙の中央には、戦斧

を持った屈強な戦士、ローブを着た魔導師、弓矢を持った盗賊が描かれたイラストが載っている。

このハードカバー、見方によってはファンタシイの原書と思えなくもない。しかし、葵はこれを“マニュアル”と表現した。ファンタシイの原書・・・のはずがない。

「これって・・・なんの本なんですか？」

「AND」

「えい、でい、あんど、でい??」

「そうよ」

差し出されたハードカバーを手に取る翔。パラパラと中を見てみる。二段組でびっしり細かい文字で英語が書かれており、時折イラストや何かの表が入っている。英語が苦手な翔は、見ているだけで頭がくらくらする思いだった。

「これは・・・」

翔の問いには答えず、葵は静かに言った。

「100ページまで読んで、内容を説明して。期限は来週の今日の放課後。場所は屋上」

「ええ!!」

「冗談かと思って驚いて葵を見るが、至って真剣な表情が見返してくる。

「それって・・・無理です！ 僕の英語力では、こんな文章100ページも読めませんよ!!」

「・・・無理？」

「ええ、無理です！」

「やってみる前から、どうして無理だって分かるの？」
「え……」

真っ直ぐに見つめられて、翔は言い淀んだ。

「し、しかし……」

「……判ったわ」

小さく溜息を付くと、葵は翔の手からハードカバーを取り戻し、鞆にしまった。その一連の動きをまるで白昼夢の様に見ていた翔は、はっと我に返った。

「神和姫先輩っ！ ちょっと待って下さい！」

「……なに？」

「なにつて、教えてくれるんじゃないかなかったですか？」

「マニュアルを見せたでしょう？」

「あれが教えてくれる内容だって言っんですか？」

「いいえ、違うわ」

「じゃあ……何で……」

訳が判らないという表情の翔に、葵は冷たいとも思える口調で言う。
う。

「あなたは、教わる内容をわたしより良く知っているとでも言うの？」

「そんな訳ないじゃないですか！」

「そう。なら、教え方はわたしに任すのね」

「はあ……」

「不満？」

「いえ、そういう訳じゃ・・・」

「無理しなくてもいいわ。無理にやっても、長続きはしないから」

椅子を机の下に押し込むと、葵は鞆をとった。

「さようなら」

葵は静かに立ち去った。黙って見送った翔の心の中には、色々な想いが渦巻いていた。

去り際の葵の瞳に浮かんだのは何の色なのだろうか？ 悲しみの色？ 失望の色？ 軽蔑の色？ 一体、自分のさっきの態度は妥当だったのか？ 本当に、100ページもの英文なんて読めないのか？

「いや・・・違う」

自信なんて、今は微塵も持てる訳がない。けれども、今行動しないと、この先きつと後悔するだろう・・・そんな想いが翔の心に渦巻いた。

「よし」

翔は意を決すると、猛然と葵の後を追って走り出した。

SCENE・07「短慮と後悔」（後書き）

A D n Dの単語が初めて登場しました。『P l a y e r's H a n d b o o k』、プレイヤーを志す人にとって、必須のアイテムです。ここで葵が翔に見せたのは、A D n Dの第二版新装版のP l a y e r's H a n d b o o kです。今後、この“マニュアル”が物語にどう絡んで行くのでしょうか。

加えてもう一点。普遍的な問題の一つですが、「教わる」と「教える」。ニーズが合致して初めて結果が出るのですが、往々にして双方の思惑が食い違うことから、当事者双方にとって満足の行く結果に繋がらないようです。常に双方から歩み寄る姿勢が大切ですね。次回は、いよいよ翔が『P l a y e r's H a n d b o o k』を紐解くくだりになります。英語×（駄目駄目）の翔にとって、その帰趨や如何に？ 乞う御期待！

SCENE・08「与えられた課題」(前書き)

漸く葵からマニュアルを借りた翔だが・・・

SCENE・08「与えられた課題」

■UNO学院／学部棟／リフト↓エントランス・ホール

翔が逡巡していた時間は短かったようだ。気を取り直して全力で13階ホールまで走ると、ちょうど葵がリフトに乗り込むところに間に合った。

「エントランス・ホール」

リフトに乗った葵は、音声で行き先を告げる。その時、葵は後ろから走ってくる足音を耳にする。

「神和姫先輩っ！ ちょっと待って下さい！」
「！」

振り返った葵の瞳に、必死で走ってくる翔の姿が映る。葵はリフトに命ずるコマンドを言い直した。

「リフト、ホールド」

閉じようとしていた扉が途中で止まり、また開いていった。翔は、リフトに飛び込んだ。

「はぁはぁはぁはぁ・・・」

葵の教室はリフト・ホールから一番遠い。全力でダッシュしてきた翔は息が上がってしまい、両膝に手を付いて肩で息をしていた。

「・・・」

無言でいた葵は、やがて言った。

「ホールド解除。エントランス・ホール」
『リヨウカイシマシタ』

全校のシステムを一括して制御下に置くメイン・フレーム『タルカーン』が即座に反応する。僅かな作動音がして扉が閉じると、リフトは静かに下降していった。

何度も深呼吸して、ようやく息が元に戻った翔だが、一体どう切り出せばいいのか皆目見当が付かなかった。葵と言えば、リフトに指示を出した以降は黙り込んでいる。翔は、静寂がじりじりと自分を圧迫しているのを感じた。

『ポーン』

『えんとらんす・ほーるニトウチャクシマシタ』

アナウンスが目的階への到着を告げると、リフトの扉が開いた。迷う翔をそのままにして、何事もなかったかのように葵はリフトから歩き出していた。

「あの・・・先輩」

恐る恐る声を掛けてみた翔だが、正面玄関に向かって行く葵の歩みは止まらない。

「先輩っ！」

慌てて後を追う翔。

「ちょっと待って下さい、先輩！」

三度呼び掛けられたところで、葵の歩みがぴたりと止まると、ゆっくり振り返った。翔は射るような深い双眸に迎えられる。

「なに？」

「あ……いえ……」

あまりにそっけない葵の反応に、思わず口ごもる翔。葵の視線は、とうてい好意的とは思えないような、冷たくて堅いものだった。翔は、先刻の自分の決意が急速に萎んでいくのを感じた。

「あの……先ほどのことですが……」

「……」

黙っている葵。無言の圧力が重い。果たして、自分の説明を聞いてくれているのかどうかも判らない。単に話し掛けられたから、礼儀上立ち止まってくれている……それだけなのかもしれない。優柔不断な翔は、この期に及んでも目一杯迷っていた。だが、しかし。

“でも……きちんと話すって決めたんだ”

先ほどの想いを繰り返したくはない。なけなしの気力を振り絞って、翔は先を続けた。

「僕が、間違っていたと思います」

「……」

「先輩の言われた通り、『やる前から結果を決めて』いました。先輩が怒るのも、無理ありません」

「・・・」

「今更かもしれませんが・・・先輩、僕にマニュアルを読むチャンスを与えませんか？正直なところ、今でも読めるのかどうか心配です。でも、やる前から諦めないって決めたんです。逃げずにがんばってみようと、思っただんです」

いつの間にか、翔は両手の拳を強く握っていた。先ほどの自分の反応を考えると、今の言葉に説得力がないと言われても仕方がなかった。だが、今現在のこの想いは嘘偽りのないものだった。そして、それをどうしても葵に知って欲しかった。

だが、葵は先ほどの姿勢を崩さず、そして余りにそっけない最初の一言以外、全く言葉を発していなかった。

“駄目なのか・・・。やっぱり、僕の言ったことは取り返しのつかないことだったのか”

気分がどんどん沈んでいく。追っかけた事自体が思慮のない行動だったか？そんなことはない・・・翔はそう思ったかった。

葵は無表情で黙ったまま、ただ時間だけが過ぎていく。午後の柔らかな光の中で、二人はまるで永遠に動かぬ彫像のようにそこに立ちつくしていた。

突然、その停滞空間に動きが生まれた。エントランス・ゲートから吹き込んできた一陣の涼風が、さーっと葵と翔の足下を吹き抜けていった。

その風に促されたかのように、葵がすつと地面にしゃがみ込んだ。ぱちんと金具を鳴らして鞆を開くと、あの“マニュアル”を取り出す。

そして、一連の流れるような動作でその“マニュアル”を翔の前に差し出した。

「これ」

「せ・・・先輩」

翔がマニュアルを手に取ると、葵の堅い表情がふっと和らいだ。

「来週の今日までね。それじゃ」

「あっ・・・」

一瞬の微笑みだった。翔が、その予期せぬ反応に驚いている間に、葵はその場から歩き去っていった。

エントランス・ホールを出てゆくその後ろ姿を見ながら、緊張感から解き放たれた翔は、脱力したようにそこに佇んでいた。

SCENE・08「与えられた課題」（後書き）

漸く、翔が葵からマニュアルを受け取りました。ぎゅちり英文100ページは、特に英語の苦手な翔には難関ですね。しかし・・・マニュアルを渡すシーンに手間取ってしまい、実際に翔がPHBを読むのは一回先送りになってしまいました。それでは、次話にご期待下さい。

SCENE・09「誘惑と克己心」（前書き）

葵に与えられた課題に取り組む翔に、思わぬ手助けが？

SCENE・09「誘惑と克己心」

■三奈瀬宅 ↑↓UNO学院

初日

夜――三奈瀬宅。

卓上灯を付けて机に座った翔は、受験勉強をしていた時を懐かしく思い出した。葵から借りたマニュアルを鞆からそと取り出すと、英語の辞書を棚から引っ張り出す。中学に入った時に購入したその辞書は、年数の割には新しかった。持ち主の使用頻度が伺えるかのようだ。

「さてつと・・・」

おもむろに、1ページ目を開く。「ADVANCED DUNGEONS & DRAGONS」とタイトルが書いてある扉絵のページだ。次の2ページ目はどうやら前書きの様に思えた。

「『Foreword』って、前書きだ。一応、読んでおかなくちや駄目だろうな。『It has been a long time getting here』、えーと、長い事ここに居た???」

前書きの時点で、既に失速気味の翔。だが、意を決決して辞書を手にとると、パラパラとめくっていく。それが数回続いた後、ピタリと止む。

「駄目だ。紙にでも書かなきゃ、覚えきれないや」

引き出しからノートを取り出すと、今調べた単語を書いていく。単語に矢印をひっぱたり、線で消したりすること10分。

「これで出来たかな？」

自分の迷訳(?)を見直してみる翔。

『長い事ここに居た。これは月じゃなく、もしかすると数年、貴方はA D N Dの改編され、拡張され、改善されるのを待っていた』

「・・・何となく、意味が分かるような、それでいてやっぱり判らないような・・・」

ちらりと時計を見る。すでに、マニュアルを開いてから30分は経ってしまっている。

「まだ1ページも進んでないのに、もうこんなに時間がたってるよ・・・」

心の片隅に昼間の光景が蘇る。あの時は、熱に浮かされたように、思い切って“やる!”と言い切った。

だが、実際に取り掛かってみると、目の前に横たわる膨大な英文の量に、少しだけ後悔を覚える翔だった・・・。

二日目

朝——UNO学院高等部一年学習室。

「よお、翔。なんか眠そうだな！」

自分の席に座ると、さっそく彰が話し掛けてきた。眠そうに掌で

目頭をこする翔を見ると、唐突にニヤニヤ笑いを浮かべた。

「翔くん。どうしたんだ〜い、そんなに眠そうで。じ・つ・は・深夜にいかかわしい記録ディスクでも見てたんだろ〜。判ってんだぞ、おい。ホントにイヤらしいやつかな〜」

「はぁ・・・お前と一緒にするなよ、彰」

突拍子もない彰の想像に、翔は目一杯脱力した。ただでさえ疲れているのに、ますます精神的疲労が嵩む。

「へっ？ 違うのかよ」

「違う」

きつぱり返した翔を、不思議そうに見る彰。

「じゃ、なんかのゲームをやってて埋り込んだとか？」

「それも違う。」

「彼女と長電話・・・おっと、この線は絶対に無いな」

「大々きなお世話だ！」

いい加減頭に來た翔は、渋面を作って彰を睨んだ。

「彰には判りっこないよ。いいかい、僕は英語の本を読んだのさ」

「へえっ?!」

翔が退学届けでも書いていた、と言った方が彰には想像しやすいかどうかだろう。

「お、おい。翔、とうとう悪いびよーきに脳まで犯されたか？ ついに、行くとこまでいっちゃったのか？」

「いい加減にしろ。寝不足は睡眠時間の不足。睡眠時間の不足は、英語の本を遅くまで読んでた為。だから今は眠い。邪魔すんなよ、彰」

「ええっ、マジかよ！ 英語の本って、いったいどうしちまったんだ？ 英語って、お前学科ん中で一番苦手じゃないか！」

「五月蠅い。寝る」

切り口上で会話を打ち切ると、翔はこれ見よがしに向こうを向いて寝てしまった。彰に向けた背中から、“これ以上一切話さないぞ”と言う堅い決意が伝わってくる。

しばらくブツブツ言っていた彰は、翔が全く反応しなくなったので、諦めて自分の席に戻った。

こうして一日中惰眠を貪った後。放課後、彰が声を掛けるよりも早く、ダッシュで教室から翔は飛び出して行った。

取り残された彰は、ちよつと啞然とした表情でつぶやいた。

「ホントに、どうしたんだ、翔のヤツ？」

三日目

爽やかな朝。だが、翔は半分死んだような、どんよりとした表情での登校だった。マニユアル翻訳は遅々としてはかどらない。

昨晚も、夕食後6時間はマニユアルに向かったが、辛うじて『FOREWORD』2ページと『Welcome to the ADND Game』の最初の部分を訳しただけだった。

『努力と根性だ！』

葵に言い切った時の高揚感を思い出す。自分を鼓舞しようとするものの・・・努力と根性でも太刀打ちできないように思える高い山

に、気力が萎えそうになる。翔は鞆をぐつと握った。

いつもより心持ち重い学生鞆には、葵から借りたマニュアルが入っていた。昼休みの時間も翻訳を続けようと思って持ってきたのだ。進まぬ翻訳作業に多少はげんがりしているものの、翔は決して諦めてはいなかった。少なくとも、今はまだ。

「おー、今日もどんよりか」

「・・・」

教室に入ると、さっそく彰が話し掛けてくる。ここ数日で妙に迫力を増した視線で彰を睨みつけると、無言で席に座った。

「おーこわ」

軽口を叩きながらも、彰は改めて友人を見てみた。赤い目、憔悴している顔、眉間の縦皺。いずれも典型的な夜更かしの症状に思えるが、どうもそれだけではないようだ。

やれやれと肩を竦めると、彰は翔の前の席に後ろ向きに座り、翔の顔を見る。

「・・・なんだよ」

「なあ、翔。俺たちや友ダチだろ？」

「それがどうしたんだよ」

「友ダチなら、抱え込んでるモノを少しは話してくれてもいいんじゃないか？　ここ数日のお前って、心労の種をまき散らしているよな感じだぞ」

「・・・」

「俺に何ができるか判かんないけど・・・話してみるだけでも、多少は荷が軽くなるっていうもんだ。なあ、翔。話してみるよ」

「・・・仕方がないなあ」

根負けした感じで、翔は大きくため息をついた。

「神和姫先輩と話したんだ」

「ああ。会ったって話は聞いた。何があったんだ？」

「これだよ」

翔は、鞆からマニュアルをそつと取り出して見せた。

「これは？」

「ADNDの“マニュアル”、つまりルールブックなんだけど、これを100ページまで読んで、内容を先輩に説明することになるんだ」

「げっ！ これを100ページか！」

「ああ」

「そりゃ、えれー話だな。それで？ コイツをいつまでやつつけなきゃなんないんだ？」

「来週の水曜日まで」

「な、なんだって！！」

椅子の背に頬杖をついていた彰は、思わずずっとこけた。

「100ページを来週水曜までだつて！ できるんかよ、翔！」

「だから、毎日こうして夜遅くまで努力してるんだよ」

「努力ったってなあ・・・お前、出来ることと出来ない事ってあるんだぜ。こんなのを100ページ一週間で読めなんて、あの嫌みな学年主席の樫村でも出来ないぜ！」

「はあ・・・それを言わないでくれよ」

目に見えてがっくりする翔を、彰はあわてて励ました。

もつとも、支離滅裂、滅茶苦茶な励まし方だが。

「いや、でもな、人間やってみないとわかんないぜ！ だいたい、人間には未知のパワーがゴマンと宿っているんだ。努力と根性でぶち当たれば、きっと路は開けるぞ！」

「はぁ・・・」

ますます脱力しかかる翔だが、彰がなけなしの脳みそを絞って励ましてくれているかと思うと、内容はさておき、その心遣いは嬉しかった。

「サンキュ、彰。諦めるつもりなんかないよ。それに、日数はまだ半分あるんだからね」

「そうだ！ 翔、その意気だ！」

「あ、彰！ ちょっとタンマ。そんなに叩くなよ」

ばんばんと肩を叩きながら屈託無く笑う彰を見ると、翔は頑張ってみようと言う勇気が沸いてくる思いがした。

一人より二人。分担して担げば、重荷はそれだけ軽くなる。翔も、いつしか笑みを浮かべていた。

そんな二人を、じっと伺う視線があつた。絡み付くように翔と彰を睨め回すと、二人に気付かれる前に視線を逸らす。

「待つてなよ。今に、僕が助けてあげるからね。クククク・・・」

四日目

眠い。限りなく眠い。夢遊病者のようにふらふらと学校に行くと、ようやく辿り着いた自席でそのまま沈没する。

どうにもならない。これほどまでして、寝る間も惜しんで翻訳しているのに、読むスピードは遅々としていてはかどらない。

「よっ、翔」

彰にしては珍しく、心配しているような表情だ。

「酷い顔色だな」

「言わないでくれよ。殆ど寝てないんだ」

ぐったりしている翔には、それだけ言っのがやっとだった。

「で、どこまで行っただんだ？」

「聞かないでくれよ」

「それだけでだいたい想像がつくぜ。半分も行ってないんだろ？」

しばしの沈黙の後。

「計画進捗度、予定に対してマイナス80%」

「二割かぁ……。今晚入れてもあと三日。そんな状況だと、全ペ
ージ完訳はかなりムズイな」

「まあね……。」

「どうすんだ？」

「続けるさ」

「終わらなくてもか？」

「……。今は、結果のことは考えたくない。目先のことを精一杯や
るまでだよ」

「やれやれ……。エールだけは目一杯送ってやるよ」

「ありがたくて涙が出るね」

「へへへ、礼なら要らないぜ」

「言ってる」

翔は、少し気分が晴れるのを感じた。昔から、自分が落ち込むと彰が気を紛らせてくれる。

翔自身を除けば、翔の性格を一番良く理解しているのが彰だろう。見かけはアホでも（実際にアホだという話もあるが）、こんな時に頼りになる親友だった。

五日目

「三奈瀬君。ちょっといいかな？」

昨晚も夜遅くまでマニュアルと格闘していた翔が、精根尽き果てた感じでぐったり学習室の自席で沈没していると、いきなり耳慣れぬ声が掛かった。

大儀そつに顔を上げると、視界に細面で色白な顔が入ってくる。

“あれ？ 誰だっけ？”

睡魔にぼけた頭でぼんやり考えていると、相手は構わず先を続けた。

「実はね、君と河邑君の話を偶然耳にしましてね。一昨日から、同じクラスメートとして何か手助けできないかと考えていたんだよ」
「はあ・・・そうなんだ」

我ながら、間の抜けた返事だと思ったが、とりあえずそれ以上の返事が思いつかなかったので仕方がない。

「そこでね、これを君に貸してあげようと思って持ってきたんだ」

そう言うと、その相手は手にした薄いプラスチックケースを翔の鼻先でヒラヒラさせた。物言いたげに翔が見上げると、相手はに

っこり笑って言った。

「この記録ディスクには、“翻訳大王墓帝ビル”というソフトが入っている」

「はぁ・・・」

「そう。これを使えば、君の抱えている英文100ページなんてあつと言う間だ。どうだい、使ってみないか？」

「あつという間にだつて？」

「ああ。手順は簡単だ。まずは、学校のスキャナーを使ってその英文を全文取り込む。それを、この翻訳プログラムをインストールした君のパソコンに転送して、プログラムをランさせればOKだよ。翻訳された文章は多少修正が必要だが、それもお愛敬。まず間違はなく、今晚中に仕上がるね」

「・・・」

「じゃ、渡したからね。いや、御礼なんて構わないさ。君の役に立てるようなら、僕もクラスメートとして嬉しいからね」

一方的に話すと、啞然とした翔を残して相手は自分の席に戻った。因みに、その席は教壇の真ん前の、通称“ブリッジヘッド（橋頭堡）”と呼ばれ、誰もが敬遠する素敵な特等席である。

「おい、翔。お前いつから御殿山なんか知り合いになったんだ？」

「知り合いも何も・・・名前すら覚えてなかったよ」

「そつか。しかし、なんでアイツがお前にそんなもん貸してくれるんだ？」

そう言つと、彰は翔が手にしているDVD-ROMのケースを指さした。

「僕にも判らないよ、そんなこと」

「そつか。まあ、不思議なこともあるもんだ。もしかして、アイツ翔にホ・の・字・かもし・・・」
「絶対にあり得ないっ!!」

彰の言葉を途中でへし折って、翔は完膚無きまでに否定した。

「まあ、そんなことはどうでもいいんだけどな。それより、そいつを使えば翻訳完了って訳だろ？」

「そうとは言ってたけど。実際に試してみなければわからない。まあ、本当に旨く作動してくれたら大助かりということろかな」

「期限まであと二日だからな。そうと決まれば、早いトコデータをスキャンしちまおうぜ！」

「そうだね・・・」

彰の言葉に頷きながら、翔はどこかに引っかかりを感じていた。

六日目

翌朝。珍しくすつきりした顔で翔が登校してくる。その変化を目撃く見つけた彰が、翔の席に寄ってくるなりしたり顔でのたまった。

「よお、翔！ よく眠れたみたいだな。その感じだと、うまくいったんだろ？」

「うん。凄いソフトだったよ、これって。僕のパソコンでも、100ページの翻訳に2時間掛からなかった」

「そりゃーいいな。それでよ、完成なのか？」

「いや、まだ翻訳された中味をきちんと確認していない。今晚やるよ」

「やれやれだな。まあ、約束の期限にぴったり間に合ったから結果オーライってところか」

笑いながら話している二人の背後に音もなく忍び寄る黒い影。

「やあ、三奈瀬君に河邑君」

いきなり不意打ちを食らわすのが御殿山の趣味らしい。驚いて振り返る二人の反応を、御殿山は薄ら笑いを浮かべ見た。

「あの翻訳ソフト、簡単だったろう？　今どきね、手で翻訳するなんて流行らないんだよ。世の中には便利なアイテムがたくさんある。旨く活用して、つまらない手間を減らすのが現代人の知恵さ。“努力と根性”みたいな精神論は、とつくに時代遅れだね」

その口調には、そこはかとなない悪意が混じっていた。

優柔不断でやや鈍感な翔も、体育会系で大雑把な彰も、言葉に含まれる“トゲ”を感じていた。

翔の表情も、彰の表情も、険しさを増した。

「そう決めつけるのはよくないよ。」

「なんでかな？　“努力と根性”とやらでやっていたら、君のその翻訳は終わらなかったのだろう？　結果から考えれば、どちらがより優れているか明確だよ」

「それは違う。今回の件は、単に僕が英語を苦手としているからに過ぎない。個人の能力と専門ソフトの能力を比べるのは、コンピューターの演算が人間より速いって比べるのと同じだよ。コンピューターの方が定型作業に向いていて、作業が早いのは当たり前。それだけを対比させて、“努力と根性”を否定するのは短絡的だ。」

「うつ・・・そ、そんなの、ただの屁理屈じゃないか！」

「俺も、翔の言う通りだと思うぜ。確かに、コンピューターの演算は速い。けどな、そのコンピューターも誰かが“努力と根性”で作ったんだろ？　それを否定してどうすんだよ」

二人に言い立てられて、御殿山は思わず後ろに二三歩下がった。顔色が紙のように白くなり、口元がブルブル震えている。

「な、なんだよ！ 偉そうなこと言っても、結局は僕の貸したソフトで翻訳を完成させたじゃないか！ そんなに言っんなら、“努力と根性”だけでやってみなよ！」

「なんだとお！」

「ヒイツ！」

「ちよつと待つて！」

一方的な“白兵戦”が始まる前に、翔は御殿山と彰の間に割って入った。

不満そうに唸る彰を背中を押しとどめると、静かに御殿山を見つめた。疚しい思いを抱いているのか、御殿山はそわそわと目線を動かしている。

「御殿山君。まだお礼を言ってなかったね。翻訳ソフトを貸してくれてありがとう」

「・・・ふ、ふん」

「それから、もうひとつ。僕に大事なことを認識させてくれた」

御殿山の讒言ざんげんを聞いて、翔は今まで漠然としていた想いが、胸の内に沸き上がってくるのを感じたのだ。どうして、自分はこんな翻訳をやると葵に言ったのか。自信なんかある訳がない。出来ると言い切る根拠のなさ。まさに蛮勇だ。それでも・・・自分は“やる”と言い切った。その時、不意に胸に沸き上がってきた想い・・・それは人の心を動かし続けるエナジーだ。

「君が何を意図して、僕に翻訳ソフトを貸してくれたのか判らない。

けれども、僕は自分が探していたものを見つけたと思う。それは、はからずしも、君が勧める“路”とは正反対の方向に伸びているようだけれどね」

「何を言ってるんだ！僕はね、君の苦勞を軽くしてやろうと思っただね・・・」

「ありがとう。でも、僕には必要ないよ」

御殿山は、よろりとあとすざった。

穴の開くほど翔の顔を見つめるが、全く付け入る隙が見つからない。

白い顔が青くなっていくと、その場の圧力に耐えられなくなったのか、突然自分の席に走って戻った。慌ただしく机をかたづけると、鞆を掴み翔と彰を睨みつけた。

「み、見てろ！今日の事を、今にきつと後悔するからな！」

捨てぜりふを残して、御殿山は学習室から走り去った。

「・・・ヤレヤレ、朝っぱらから早退かよ。ま、アホは放つところ
ぜ」

「ああ」

苦笑いして頷く翔。

「ところで、どうすんだ？」

「翻訳を続けるよ。翻訳ソフトで作った和訳は破棄する。楽しんでやつても、自分の為にはならない。それがわからなかったために、一日無駄にしちゃったよ」

「そりゃー違うぜ、翔」

「え？」

「何も無駄になっちゃいないぜ。その一日の経験が、今日の確信につながったんだろ」

「・・・そうだね。うん。その通りだ」

「そうと決まったら、時間を無駄にすんなよ、翔」

「わかってる。データは持ってきてるから、休み時間も翻訳を続けるよ。学校が終わったら、ダッシュで帰る」

「それがいい。授業さぼって翻訳してるのが神和姫先輩に知れたら・・・」

「本末転倒だね」

「ハハハ、違うないぜ」

翔が、昨日から感じていた心の引っかかりは、どこかへ雲散霧消していた。

翔はその日、晴れ晴れとした気持ちで授業にのぞんだ。

七日目

最終日。朝日が東の窓から室内に射し込んでくる。翔はその眩しさに目を細めると、ゆっくりとマニュアルを閉ざした。

やるだけのことはやった・・・そんな自負はあるが、それでも葵の言ったページはまだ遙か彼方だった。自力で翻訳したページ数は33ページ。昨日学校が終わったあと家に直帰して徹夜で翻訳を続けたが、それ以上は進めなかった。

「潔く、自分の負けを認めよう」

葵の期待に応えられなかったのは残念ではあったが、精一杯やったと言う思いに、後悔は感じていなかった。

「さあ、行こう！」

自分を鼓舞するように言つと、翔はそつとマニュアルを鞆に入れ、
駆け足で家を出た。

SCENE・09「誘惑と克己心」（後書き）

いやゝ長かったです、このシーン。書けども書けども、終わりが
ないように思えました。ボリューム的には、これまでのシーン四本
分くらいありますから、長かったのも当たり前ですけどね（＾|＾）
。次のシーンで、STAGE01は終了です。翻訳が未完な翔は、
はたしてどうなるのでしょうか???

SCENE・10「想いを伝えて」(前書き)

翔は、自分の素直な想いを伝える・・・。

SCENE - 10 「想いを伝えて」

■ UNO学院 / 学部棟 / 屋上

屋上への重い鉄扉を開けると、群青色の空が視界一杯に広がった。外の明るさに慣れずに瞬きを繰り返していると、漸く目が慣れてくる。

「あ・・・」

見回すまでもなかった。いつものように、屋上のフェンスに寄りかかって・・・彼女がいた。神和姫葵——どこか不思議な感じを受ける、一つ上の先輩。

葵の姿を見た瞬間、足が鉛の様に重く感じられる。何とも意気地のない自分に、思わず苦笑が漏れた。

“今更だろ？　しっかりしろよ、自分”

自分を鼓舞する様に言うと、意を決して葵に向かって歩いて行く。早鐘の様に鳴り始めた心臓のドキドキが止まらない。外からでも、その音が聞こえそうだった。目的地までの、その短い距離がやけに長く感じていた。それでも、物事には始まりがあれば終わりもあり——翔は、程なく葵の前に立っていた。

「それで？」

彼女らしい、短い一言。余計なことは言わず、いつも本題を真芯で捕らえてくる。

「はい」

覚悟は、階段を上っている間、とうに決まっていたのだ。ただ、それを口に出すには勇気が必要だった。大きく息を吸い込むと。

「先輩。・・・読み切れませんでした。言い訳は言いません。自分の実力の無さを、心底悟りました。でも、出来るところまで全力でやりました。悔いは、ありません」

奢りも気負いも無かった。自分が感じた通りの素直な想い。そこには、芸も工夫も何もなかった。ただ、有りの儘に、自分が思った事を淡々と話した。

「・・・」

葵は、足下を見つめたまま終止無言だった。翔は僅かな失望感を覚えたが、これも課題を果たせなかった事の因果応報、と思えば自ずと納得も出来た。

どれくらい時間が経ったろうか——何時しか空は、何時か見た茜色に染まり始めていた。

「一週間——長いようで短かったです。僕の為にわざわざ貴重な時間を割いて貰ってありがとうございました。お借りしていたマニュアル、確かにお返ししました。それでは・・・僕は、これで失礼します」

深々と一礼すると、翔は踵^{かかと}を返して屋上の扉に向かって歩き出した。

“結局、最初の一言以外は何も話してくれなかったな”

嫌われるよりも、面罵されるよりも、殆ど相手にされなかったことが唯一心残りだった。

“でも、もういいんだ”

失望感と爽快感が混ざった不思議な感じ——そんな想いを胸に、鉄扉に手を掛けた時。長く間をおいた、葵の二言目が聞こえてきた。

「待つて」

驚いて足が止まった。何時の間に歩いてきたのだろうか、すぐ後ろに葵が立っていた。

「どう、感じた？」

葵の言葉を理解するまで、翔には暫し時間が必要だった。数瞬後、混乱した思考に漸く整理がつく。

「・・・充実した時間でした。無心で全力を出した後の爽快感に似ています。旨く、表現出来ませんが」

「・・・」

眉宇を寄せると、葵は黙って手に持ったマニュアルを眺めた。

翔が息を飲んだ様に硬直して立っていると、葵はおもむろに手にしたマニュアルを差し出した。

「こ、これって・・・」

目の前に差し出されたマニュアル。100ページまで読み切れなかった課題のマニュアル。それが、再び自分の前にある。どうすれば良いのだろうか？ 再び、手に取ることが許されるのだろうか？

「諦める？」

またも端的な質問——何を意味しているのか？

“諦める？ 諦められる？ 諦めたいのか？”

ぐるぐると、色々な想いが心の中を駆け回る。

そんな翔を、静かに葵は見守った。これは自分の言葉で、自分の意思で決めなければいけない。誰にも、誰からも、影響を受けてはいけない……

“僕はどうしたいんだ？ もう、こんな無駄な努力をしたくないだけか？ そもそも、これは無駄な努力だったのか？ 何の為に、寝る間も惜しんで時間を掛けたんだ？”

“どうして、こんな苦しいことをやろうと思ったんだ？ 苦しいだけだったか？”

“いや、違う。苦しかったけど——充実感があった。それだけは事実だ。”

徐々に想いが形になっていく。
ゆつくりと顔を上げると、吸い込まれる様な深い双眸が見つめ返してくる。

“そうだ。僕は、この人の事を信頼してみたいんだ。この人が言う、

『新たな創造の世界』を垣間見てみたいんだ”

心は決まった。想いを、決意として口にする。

「いいえ。諦めたくは、ありません」

「・・・わかったわ」

マニュアルを翔の手に預けた葵の表情には、微かな笑みが浮かんでいた。それは、あたかも雲間から太陽が差し込むような、明るさと暖かさに満ちていた。

SCENE - 10 「想いを伝えて」 (後書き)

漸く翔は葵の課題を乗り越えることが出来ました。“インスタント結果” がややもすれば蔓延し、忍耐力と努力が軽視されがちの風潮の中では、翔と葵の行動は如何にも不自然、理解不能と映るかも知れません。しかし、人と人との交流は、『相互理解』の積み重ねです。自分から一歩前に踏み出さねば、相手との距離は縮まりません。自分を覆うガードを降ろさないと、相手を感じる事が出来ません。リスクは、常にどんな行動にも付いて回ります。勇気を持って一歩前に進みましょう。そうして、誰もが何かを経験し、次の一歩を進める新たな力を得るのです。

次章からは、メンバーに彰が加わります。多少とも、話が動いてくると・・・良いなあ（笑）。相変わらずの駄文ですが、刮目してご期待下さい。

STAGE 02 「仲間と呼ばれて」・SCENE #1（前書き）

彰の無謀な企てに、翔は・・・

STAGE 02 「仲間、と呼ばれて」 - SCENE #1

■ UNO学院 / 学部棟 / 高等部一年 / 1 - A教室

「おい、翔。翔ってばよっ！」

何度目にかの呼び掛けに漸く顔を上げてみると、そこにはあまりご機嫌の宜しくなさそうな親友の顔があった。

「ん？ どうしたんだい、彰？」

「どうしたもこうしたもないぜ！ さっきから、セントラル・スクエアに新しくできたアミューズメント・ゲームコーナーに行こうって誘ってるだろ？」

無視しないでくれよなあ、と彰はぶつくさばやいた。

「悪いね。今日はちよつと予定があるんだ」

・・・だから付き合えないよ、と続けようとする翔の言葉を彰は憤然と遮った。

「そのセリフ、昨日も聞いたぜ」

「そうかい？」

「一昨日もだ」

「そうなんだ」

「一昨々日もだ！ 翔、ここんとこ、ものごとっつー付き合い悪いぜ！」

どうしちゃったんだよお、オレのこともう飽きちまったのかあ、

と端から聞くと誤解を招きそうな事を言いながら彰は机に突っ伏した。

「うん・・・」

言うべきか、言わないべきか——翔は逡巡した。

葵との話が持ち直したのも、彰の励ましに寄るところが大きかったりするのだが、有りの儘に事実を話した時、必要以上に騒がれるのも嬉しくない。

「仕方がないなあ・・・」

色々な要素を天秤に掛けて量った後、優柔不断な翔は大きな溜息を付く。

「神和姫先輩との話なんだけどね・・・」

「おお、例の小難しい英語の本だろ？」

「そう。あの話、あのまま続けることになったんだ」

「え？ それって・・・？」

「うん。課題はまだ続いているんだ」

目をぱちくりした彰は、翔の話す状況の理解に多少時間が掛かった。

そして、ぱつと理解の光が茶色の目に宿ると。

「それって——翔、お前まだ神和姫先輩と付き合ってるのかっ！」
「付き合うつて、A D n Dを教えて貰ってるんだよ。彰の邪推して
るような関係じゃないってば」

「ちくしょっ！ オレの知らないところで一人だけ良い思いしや
がってっ！」

がばつと翔の両肩を掴むと、彰はガクガクと揺さぶった。

「ち、ちよつと、彰っ！ や、止めてくれよ」

「何言ってるんだ、この幸せ者め！ その幸せをオレにも分けろっ！」

「だ、だから、誤解だつて、あ、彰・・・」

翔がいい加減揺すぶり尽くされた後、漸く彰の暴走が止まった。
いや、いじけて現実逃避に走っただけかも知れないが。

「・・・彰。聞いてくれよ。彰に励まされてね、精一杯の気持ちで神和姫先輩にぶつかつてみたんだ。課題は果たせなかったけど、精一杯頑張つてみたんだつてね。そうしたら、先輩がまたマニュアルを渡してくれたんだよ」

「ちえ。なんか、余計なことしちまつたつて感じるよ」

「そう言っなよ、彰」

ふて腐れた様な物言いに、翔の口元に苦笑が浮かぶ。

「で？ 新しい課題でも貰ったのかい？」

「それが・・・はつきりしないんだ。“諦めるか、諦めないか”つて先輩に聞かれて、“諦めたくない”つて応えたら、このマニュアルを戻してくれた」

パチンと鞆の留め金を開けると、中からハードカバーの英文マニュアルを取り出す。

「でも、何時までとか、何をどうしろとは言われなかった」
「へえ、そうなんだ」

「自分なりに読み続けてはいるけど・・・」

彰は、パラパラとマニュアルをめくった。ぎつちりと書かれた英文――横文字が苦手な彰には、見ているだけで目眩がしてくる感じがする。好きこのんで、こんなモン読む奴の気が知れなかった。

“でも、待てよ”

彰は思い直してみた。これに関われば、合法的にあの麗しの神和姫先輩との接点になるじゃないか？ それって、掛けた労力に見合う報酬じゃないか？ 彰は、忙しく卓上打算機を叩いてみた。

“へっ、物事はいつもハイリスク・ハイリターンだぜ”

事が事だけに、ハイリスク・ノーリターンになるかもしれない可能性を脳裏からあっさりと追い払って、彰は決心した。

マニュアルをぱたんと閉じると机の上に戻す。

「一人じゃしんどいよな、これって」

「そうだね。読むペースは、慣れのせいかな多少は上がっているけど、まだ読み終わるのは遙か先だよ」

「・・・だったらさ、オレも協力してやろうか？」

「そうだね、それも良いかも・・・って、ええ？」

仰け反る翔。

「彰っ！ これは英文だよ？ 彰とは不倶戴天の天敵、あの神田先生が教える英語なんだよ？ 正気かい？！」

不敵に笑って片手で鼻の下をこすると、彰は大きく頷いた。

「正気も正気、大正気だぜ。異論は無いよな、翔？」

「あ、ああ。異論は特にないけど・・・」

「そうと決まれば、神和姫先輩の所に行こうぜ！ オレも参加する許可を貰わないとな！」

白い歯をキラリンと光らせて笑う彰は、翔を引っ張って教室を出た。

一抹の不安を覚えながらも、状況に押し流されていく翔であった。

SCENE # 2 に続く

STAGE 02 「仲間、と呼ばれて」・SCENE #1（後書き）

さて、邪な野望を胸に（笑）も彰が英文マニュアル読破会（？）に加わりました。はたして、何処まで付いていけるのやら（笑）。

それは、今後の展開で明らかになっていきます。

また、STAGE 02から更新速度が多少遅くなります。余りお待たせしない様に頑張りますので、今後とも宜しくお願い申し上げます。

STAGE 02 「仲間」と呼ばれて」・SCENE # 2（前書き）

またも葵を怒らせた翔。一体、どうなるのだろうか？

STAGE 02 「仲間、と呼ばれて」 - SCENE #2

■ UNO学院 / 学部棟 / 高等部二年 / 2 - A教室

「・・・」

端正な横顔は、全く無表情だった。先程から、葵は一言も発していない。まさに、時間が止まった様な雰囲気屋上を支配していた。だが、そんな状況を全く感じ取っていないのか、脳天気な翔の親友は先程から屈託無い笑みを浮かべている。

“はぁ・・・”

翔は何度目かの溜息を心の中で付いた。正直、流されるままに、ここまで彰に引っ張られてこられたことを、翔は心の底から後悔していた。

“『後悔役立たず』とはよく言ったもんだよね、ホントに。これは先輩、相当怒っている感じだよ——愛想が尽かされるかな”

翔の場合、マイナスループに思考ルーチンが填り込むと際限がない。何度目かの溜息を付くと、翔は先程からの状況を思い返してみた。

事の起こりは、翔の課題が続く事を知った彰が、“自分も翻訳作業に参加する”という、己の語学能力を度外視した提案を行った所から始まった。

翔と違って即断即決の彰は、早速葵に参加の許可を貰いに行こうとした。

彰に引きづられるように葵の教室を訪れた翔を伴って、葵は屋上にやってきた。そこで彰が熱血口調では非自分も参加したいと葵に直訴して・・・現在に至るという訳だった。

“ 神和姫先輩、どう判断されるだろうか？ 課題・・・あるんだろうな。僕もあれだけ難しい課題だったし——でも・・・”

自分と同じレベルの課題だと、飽きっぽい彰にはちょっと無理じゃないかとも思う翔だった。

「・・・わかったわ」

やがて葵が言った。

「明後日から。放課後屋上で」
「えっ？」

驚いて翔は顔を上げた。

「ホントっすかあ！ いやったあ！！ 先輩、ありがごつつあんですっ！」

短く言つと、葵はフェンスから身を離すと歩き始めた。

何語か判らないが、ともかく嬉しくて万歳三唱状態の彰を余所に、翔はあわてて葵の後を追った。

「先輩っ、ちょっと待って下さい！」

階段を駆け下りて一階下で追いつくと、翔は葵を呼び止めた。

「何？」

「参加の条件は？ 章には、課題か何かないんですか？」

「無いわ」

「どうしてかって、聞いても良いですか」

「不満？」

「納得・・・が、行きません」

「友達と一緒に参加することに？」

「いえ、そんな訳じゃないのですが・・・」

澄んだ双眸が翔を見上げてくる。心の奥底まで見透かされる感じがして、翔は思わず視線を逸らした。そんな翔を見て、葵は軽く溜息をついた。

「・・・そう。じゃ、止めましょう」

「えっ?!」

「わたしのやり方に不満なら、止めましようと言ったの。もう、来なくてもいいわ」

「そんな・・・」

息をのんで見た葵の表情には相手を拒絶する様な冷たさが浮かんでいた。

呆然とした翔をその場に残し、葵は立ち去った。

SCENE # 3 に続く

STAGE 02 「仲間、と呼ばれて」 - SCENE # 2 (後書き)

更新に間が空いてしまっており、お待たせしてしまって恐縮です。出来るだけ、定期的(3〜4日に一回)ペースで更新しますので、今後とも宜しくお願い申し上げます。

さて、お莫迦な翔は、また地雷を踏んでしまいました。実は、今回と次回は“心情的に理解が難しい”例を題材にしています。お恥ずかしいながら、私も過去に経験した口です。その時は、葵の様に断固とした態度を貫くことができませんでした(苦笑)。葵の行動を翔と彰が理解出来るか、それは次回のお楽しみ。では！

STAGE 02 「仲間と呼ばれて」・SCENE #3 (前書き)

悩む翔に思わぬ救いの手が・・・

STAGE 02 「仲間、と呼ばれて」 - SCENE #3

■ UNO学院 / 学部棟 / エントランス・ホール

「何が悪かったんだろう?」

思わず独り言を零していた。それが、いかに愚問であることは、翔も重々判っていた。

何が悪かったんじゃないくて、どうしてあんなことをよりにもよって葵に口走ったのか、という方が問題なのだ。

けれども、その時の自分の心境を思い起こそうにも、もやもやしてはつきり覚えていない。おまけに、今は葵に三行半を突きつけられてしまい、そのショックで旨く頭が回っていないかった。

「どうしたらいいんだろう」

これも愚問だろう。さつさと、葵に謝りに行けばいいのだから。

だが、何をどう葵に謝ったら良いのか、混乱してる今の翔には判らなかった。

「あれ?」

いつの間にエントランス・ホールにまで降りてきたのだろう?

翔は、ぼんやりとホールに佇んでいた。

折しも下校する生徒たちがちらほら、そんな翔を訝しそうに見ながら通り過ぎていく。生徒数が少ないところを見ると、下校締め切り時間も近いのだろう。

だが、翔はまだ家に帰る気分ではなかった。

「セントラル・スクエアにでも、行こうかな・・・」

何気なくそう言ってみて、翔は胸に痛みを感じた。

駅前のショッピング・アミューズメントスペースである“セントラル・スクエア”には、一人で行ったことがない。いつも、章とつるんで遊びに行っているところ——それが一人で行こうかと思うだけで、こんなにもやるせない気持ちになるのだろうか。

「でも・・・こんな状態で、章と顔も会わせられないし・・・」

スパイラルを描いて下降する気持ちを持て余して、翔は今日何度目かの溜息をついた。そんな時——朗らかな声が背後から掛かった。

「少年、溜息をついてると幸せが逃げるよ？」

SCENE # 4 に続く

STAGE 02 「仲間、と呼ばれて」 - SCENE # 3 (後書き)

非常に短くて恐縮ですが、この回は中継ぎなのでご容赦を。その代わり、明日には次の更新をアップ致します。

この回は、ショック(自業自得ですが)を受けた翔が、内在的な思考で堂々巡りをしています。知性に感情が追いついていない、典型的な例と言えます。この状態のままで放置すると、自他共に傷が深くなっていくので、手早く、断固として行動する必要があります。なにはともあれ――後悔だけはしないようにね。

STAGE 02 「仲間」と呼ばれて」・SCENE #4 (前書き)

背中を押して貰った翔は行動する・・・

STAGE 02 「仲間、と呼ばれて」 - SCENE #4

■ UNO学院 / 学部棟 / エントランス・ホール ↓ ガルテン

振り返った翔に、意外な人が笑いかけていた。下校の途中なのだろう――鞆を持ってそこに佇んでいたのは葵のクラスメート、高国たかく亜里沙ありさだった。

「三奈瀬翔くんでしょ、キミ？」

「はい、でもどうして僕の名前を・・・」

「この間、葵を尋ねてきたでしょ？ 教室に。」

「ああ・・・あの時の先輩、ですね？」

「あら。忘れてられてたの。そんなに印象薄いんだ、ショックだわ」

「い、いえ、そんなことは有りません！」

「ふふふ、まあいいんだけど」

気にしなくてもいいわよ、とでも言うように、亜里沙は明るく笑って見せた。

「ところで、少年。何を黄昏れてたの？ 良かったら、アタシに話してみる？ それとも・・・」

余計なお節介だったかな、と言う亜里沙の表情に優しさを感じて、翔は思い切って相談してみることにした。

「こんなところで何だから、ガルテンにでも行きましょ」

翔と亜里沙は連れだって、出口とは反対側のゲートを抜けて中庭

にでた。

そこは、幾何学的に生け垣が剪定されて迷路のようになっていて、広い敷地の公園になっていた。所々にベンチがおいてあるその公園を、生徒達は“ガルテン”(Garten)と呼んでいた。

そんな生け垣の迷路の中のベンチに腰掛けると、翔は一つ溜息をついてはなし始めた。

「僕が、神和姫先輩に馬鹿なことを口走って、先輩を凄く怒らせてしまったみたいなのです」

「どういうこと？」

「僕は、この間から神和姫先輩にADNDというRPGのシステムを教えて貰っています。先輩は、その経緯をご存じですか？」

「多少はね」

「判りました。僕は、神和姫先輩に一つの課題を貰いました。ADNDを教えて貰えるのは、その課題を一週間で解くことが条件でした。しかし、僕は課題を期限までに終わることが出来ませんでした。期限の日に、そのことを正直に神和姫先輩に申し上げました。“全力で努力しましたが、及びませんでした”って。」

「それでも、葵はキミに教えることをオッケーしたのでしょうか？」

「・・・そうですね、どうしてそれを？」

「簡単なことだわ。そこに、解決の糸口があるからよ」

翔をして吃驚させたその人は、口元に笑みを浮かべて続けた。

「自分がそう思ってしまったことについて、良い悪いってコメントは出来ないけど、前回は全面的に従った葵の判断に、今回キミは口を挟んだ——それって、葵の判断が自分の利にならなければ受け入れません、全く信用してません、って言ってることに等しいですよ？ それはダメーじ大きいわね。」

「あっ・・・」

翔の表情に理解の色が広がっていく。

「確かに、そう・・・ですね。あの時は、素直に納得したのに、今回は自分のこの感情が旨く抑えられずに、神和姫先輩に未消化のままぶつけてしまった・・・」

「自分の行動を悔やんでる？」

「はい、なんてコトをしたのかとも・・・でも、どう謝れば良いのか、どう謝ったら許して貰えるのか、見当も付かないのです」

「難しく考えすぎじゃない？」

「え？」

「キミのその考え。相手の反応を予想して何を謝るかって考えている。打算とは言わないけど、それじゃ許せることも許せなくなるよ。心から謝罪して、自分が間違っていたと思ったその想いを、きちんと相手に伝えれば良いじゃない？」

「間違ってたと思った、その思い？」

「そう、想い。それを、はっきりと相手に伝えてもらんよ」

諭すように、ゆっくりと優しく亜里沙は言った。何かを掴みかけたのか、翔は亜里沙の言葉に二三度頷いていた。

「それじゃ、頑張ってみなよ。葵はさっきまで教室にいたからね」

「はい。やってみます」

きっぱりと言い切った翔に、亜里沙は優しく笑いかけた。

SCENE #5に続く

STAGE 02 「仲間、と呼ばれて」 - SCENE # 4 (後書き)

何時もお読み頂き、大変有り難うございます。次の更新ですが、公事にて時間が取れない為、7月28日となります。お待ち頂いている方々には申し訳ありませんが、宜しくご了解頂き度お願い申し上げます。

STAGE 02 「仲間」と呼ばれて」・SCENE #5 (前書き)

翔の名を知る人物は一体誰なんだろうか・・・

STAGE 02 「仲間、と呼ばれて」 - SCENE #5

■ UNO学院 / 学部棟 / エントランス・ホール

自分の行動の帰趨に逡巡していた翔は、亜里沙に背中を押されて漸く行動に移った。こんな重大なことなのに、自分ではうじうじ悩んでいるだけで決め切れ無くて——と情けない気持ちの大部分を浸食してはいたが、今は何よりも、葵と逢って心を込めて謝罪することが優先だった。

“ つまらないプライドなんて・・・ ”

・・・捨ててやるさ——と勇ましく思ったものの、捨てられるかなあとすぐに考え直す辺りは、如何にも翔らしかったが。

葵の教室は、学部棟の13階にある。UNO学院では、体育祭と文化祭の総合点で次の年の教室の割り当てが決まる方式だ。葵のクラスは一年目の得点が総合二位だったので、こうして二年目の一年間は見晴らしの良い教室を確保しているのだった。

因みに余談だが、この制度は二・三年だけのもので、まだ何の経験も積んでいない一年の場合、使う教室は抽選で決められる。

『ポーン』

翔がエントランス・ホールに入ってきた時、ちょうどリフトが到着した所だった。急いでリフトに乗ろうとした翔は、リフトから出来た男子学生と、うっかり接触した。

「あ、どうも済みません、ちょっと急いでいるもので！」

「構わないよ、三奈瀬翔君」
「えっ？」

唐突に自分の名前を呼ばれて、翔は驚いた。
思わず胸章を確認しようとする、相手が先に笑みを浮かべて言った。

「二年の琉央るおと言う」

宜しく頼むよ、と言われて差し出された右手を、翔は思わず握っていた。思いの外、冷たい手だった。

「あの??」

「急ぐんだろう? 早く行きたまえ。それではごきげんよう、三奈瀬翔君」

先輩、何で僕のことを知っているのですか、という言葉は未然に相手によって封じられてしまった。啞然とする翔をその場に残し、琉央と名乗った二年生は、静かにエントランスホールから立ち去っていった。

「何だっただんだろう、一体？」

『ゴリヨウカイスウヲオシラセクダサイ』

「あ、13階、お願いします。」

『リヨウカイシマシタ』

閉まるリフトの扉を見ながら、翔は妙に印象に残る先程の薄い笑みを思い浮べていた。

SCENE # 6 に続く

STAGE 02 「仲間、と呼ばれて」 - SCENE # 5 (後書き)

長らくお待たせ致しました。私事より復帰致しましたので、予告致しました通り更新致します。新しい登場人物が出てきた為、翔が葵と話すのが次話にずれ込みます。次話ご期待。

STAGE 02 「仲間と呼ばれて」・SCENE #6 (前書き)

葵を探す翔が見たものは・・・

STAGE 02 「仲間、と呼ばれて」 - SCENE #6

■ UNO学院 / 学部棟 / 高等部二年 / 2 - A 教室 ↓ 屋上

いつもは早く感じるリフトのスピードがもどかしかった。

“ 早く、自分の気持ちを先輩に伝えて、きちんと謝罪したい ”

そう思うと、居ても立ってもいられない気分だった。

翔は、普段嫌になる程優柔不断な癖に、思い立つと待てないと言う、本当に厄介な性格をしていた。まあ、おっとりとした見かけとは裏腹に、短気な性格が災いしているのだが。

リフトが学部棟の13階に到着すると、翔は足早にリフトを降りて葵の教室に向かった。

胸がどきどきする。話の帰趨きすうによっては、謝罪を受け入れて貰えないかもしれない。それだけ、愚かなことをしてしまったという自覚はあった。

“ 今、結果を気にしても仕方がないじゃないか ”

自分を励ますように言い聞かせる。そうこうしている内に、葵の教室に着いていた。丁度、教室から出てきた女生徒に、翔は話しかけてみた。

「失礼します。神和姫先輩いらっしゃいますか？」

「神和姫さん？ さっき、一年生に呼び出にきて、出てったけど？」

「あの・・・、どちらに行かれたか、わかりますか？」

「ごめん、そこまでは判らないわ。でも、ついさっきだったわよ」

「そうですか・・・」

丁寧にお礼を言うと、落胆したような翔を不思議そうに見ながら、女生徒は立ち去っていった。

“拍子抜けしたなあ”

溜息をつきながら、翔は思った。先程の高揚感の反動で、どうしても気持ちが暗くなる。先輩は何処に行ったんだろう——そう考えている内に、一力所頭にひらめいた。

“屋上に行ってみよう”

翔は脱兎とばかりに走り始めると、屋上への階段を駆け上った。はやる心を抑えながら、屋上へ出る重い鉄扉を開ける。

「居た・・・えっ!？」

金網に背を預ける、いつもの葵の姿を見つけてほっとした直後——翔は、葵の隣で同様に金網に凭れている人物を見て吃驚した。だが、その驚きはそれだけに留まらなかった。その人物が葵に話しかけると、葵が笑みを浮かべたのだ。自分には向けられたこともない笑み——驚きのあまり、翔は扉を開けたまま固まっていた。

「彰・・・？　どうして、ここにいるんだよ・・・？」

SCENE #7 に続く

STAGE 02 「仲間、と呼ばれて」・SCENE # 6（後書き）

さて、葵に謝ろうとした翔にまたも障害が現れました。誤解をたっぷりと招きそうな、厄介な状況が待っています。翔が、これまで覚えた事を冷静に、理性的に行動に移せば良し——そうでなければ、新たな難問を背負い込むことになりそうです。ここが踏ん張り時ですが、果たして翔はどうするでしょうか？ それは次回に、また（笑）。

STAGE 02 「仲間」と呼ばれて」・SCENE #7 (前書き)

迷う翔を、彰はありったけの言葉で・・・

STAGE 02 「仲間、と呼ばれて」 - SCENE #7

■ UNO学院 / 学部棟 / 屋上

翔は目の前が真っ暗になりそうな思いだった。

“なんで、何で彰がここにいるんだ?!”

回答の出ない思考が頭の中で堂々巡りする。内心^{じくじ}忸怩たる想いを
持て余しながら戸口で逡巡していると、翔が居ることに気が付いた
彰が笑って手を挙げた。

“笑う? 何を笑うことがあるというんだ?”

益々深みに填り込む思考。不毛で、無意味で、切りが無い。

無反応で、ただ二人を凝視する翔を見て、彰は何かおかしいと思
ったのだろうか。二言三言、葵に話すと翔の方に向かって歩いてき
た。

“!”

翔は自分の忍耐の限界を感じた。今、彰とは話したくない。彰か
ら、聞きたくもない事実を突きつけられたくない。内面の衝動に突
き動かされるまま、翔は踵^{かかひ}を返した。だが。

「翔っ!」

屋上から立ち去ろうとした翔を、あっという間に走ってきた彰が

止めた。流石はスポーツ万能。足が速い。

「おい、どうしたんだよ、翔！ 何処へ行くんだよ？」

「離してくれよ、彰。真面目に悩んで、莫迦^{ばか}みたいだよ」

「へ？ おまえ、何言ってるの？」

コミカルにも頭の回りに？（ハテナ）マークを散らす彰に、冷たく翔は言った。

「もうどうだっていいんだ、って言ったんだよ。良かったな彰、憧れの神和姫先輩と接点が持てて。」

「何だって！」

皮肉たつぷりに言う翔に、彰の声音が変わった。警鐘の音を遠くに感じながらも、最早引き返せない所まで想いを吐露してしまった。翔は、勢いで最後まで言い切った。

「言った通りさ。まあ、もう僕の知ったことではないけどね」

「阿呆っ！！」

バシッつと頬が鳴った。

「勝手に思いこんで、勝手に納得すんなよ！！！」

滅多に聞いたことがない彰の怒声だった。いつも明るく笑って莫迦をやっている彰からは、到底考えられないことだ。

啞然として、翔は打たれた頬に手をやった。彰は、真剣な表情で見返してくる。

「翔。おまえ、本当にそれでいいのか？ はっきり話も聞かないで、

全部ぶん投げちまってるのか？」

「・・・」

「勇気出して、苦勞して、先輩のオツケイをもらったんだろ？ 何で、ここで諦めるんだよ！」

「そんなこと言ってたって・・・」

「言ってたって、何だよっ！」

「河邑くん」

澄んだソプラノの声が割って入った。いつの間にか、葵がすぐ側に立っている。彰は葵と翔の顔を交互に見やった後、一つ溜息をついてから葵に頷いた。

「三奈瀬くん」

「・・・先輩・・・」

「不満？」

「・・・」

「どうして、不満に思うの？」

「・・・」

「人はそれぞれが違うわ。同じ過程が同じ結果に辿り着かなくても、それは個人差ではなくって？」

「でも・・・」

「想うところを、話してご覧なさい」

深い双眸に見つめられて、翔は観念したように息を吐き出した。自分の思ったことを赤裸々に話すのは、非常に勇気が要ることだった。ましてや、自分自身がそんな未整理の感情や考えを格好が悪く思っているので尚更だ。

それでも、翔はここで話さなかったら絶対に後悔すると感じていた。なけなしの勇気を、今が振り絞る時だった。

「“不満”ではなくて、“主観的な見地から不公平感を感じた”、というのが真相です。先程、高国先輩に示唆されて、遅ればせながら漸く気が付くことが出来ました」

葵は黙って頷いている。

「他人に教えて貰えるまで、気が付かなかった自分に対する情けなさ、理性で判っていても、全然感情が着いていかない・・・」
「・・・そんな自分に嫌気が刺したのね」

葵に言葉を取られて、翔は吃驚した。

「・・・先輩・・・」

「わたしにも、あつたから」

葵のその言葉は、翔に衝撃を与えた。

“先輩が？ 完璧な先輩が、僕が感じたような想いを抱いてたって？”

「信じられない？」

「・・・はい。いきなり、だつたので・・・」

そう、と言うと葵は薄く微笑んだ。

「でも、事実。自分の未熟さに負けてしまったのも。後悔しても、後悔しきれない想いを知ったのも――」

事実なの、と葵は言葉を結んだ。

「あなたなら……。どう、する？」

言外に、自分と同じ轍を踏むのか、と聞かれているかのようにだった。

先輩が、間違いを犯した？　そして、そのことを後悔している？　僕は、どうするのか？　いや、どうしたいのか？　ぐるぐると、想いが巡って——最後に辿り着いたのは、休めの姿勢のまま話を聞いている彰の硬い顔だった。先程は、目も向ける勇気もなかった相手——その顔を見ていると、相手が不意に相好を崩した。やれやれ、とでも言う様に。そんな相手に、翔は何か心の奥から込み上げてくるのを感じた。

“何を悩んでいたんだろう……。素直に想いを伝える様につて話してくれた高国先輩の好意を、危うく無駄にするところだった……”

意を決すると、必要な言葉を紡ぐべく、翔はゆつくりと口を開いた。あわや全てを台無しにするところだった恐怖から、言葉尻が震えてしまう。

「彰……」

「ああ」

「あの、さ……」

「ま、いいってことさ」

「え？」

彰は破顔一笑した。ばっかだなあ、翔は相変わらず——そう言いながら。そんな二人を見ていた葵は、ふっと笑った。

「辞退に来たのよ」

「せ、先輩、駄目っすよ、それ言っちゃ！」

「先輩？ 彰？」

何が何だか判らず、翔は狐に包まれたようだった。

「翔がやれなかったら、自分だけやってても仕方がない”・・・ってね？」

先ぱい、お願いですから一言一句再生しないで下さいよ、と情けなく言う彰に、翔は思わず釣られて笑ってしまった。

「そうなんだ」

「ええ」

「あゝ二人ともひでえなっ！ くそ、グレてやるぞ、ホントに」

口元を押さえて微笑む葵に、翔は真剣な表情で深々と頭を下げた。

「先輩、本当にすみませんでした。改めて、A D & a m p ; D 教授の継続を、彰共々お願いします」

「判りました。助けてくれた人に、感謝をしないとね」

「はい。必ず、お礼を言つてきます」

ん、と頷くと葵は静かに屋上を立ち去った。後に残された二人は、明るく笑いながら、青空に互いの親指を立てた。

SCENE # 8 に続く

STAGE 02 「仲間、と呼ばれて」 - SCENE #7 (後書き)

優柔不断で、決断が遅い翔ではありますが、少しずつ成長しているみたいです——多分（笑）。また、今回は彰が色々と活躍してくれました。彼の、これからの（脳天気な）活躍に期待です。葵も漸く多少はまともに話してくれるようになったし、これでもっと書き易く——なればいいですね、ほんとに（苦笑い）。

さて、STAGE 2 もあと三回。無事に仲間が全員揃うのでしょうか？ その顛末は、次回にご期待を。

STAGE 02 「仲間」と呼ばれて」・SCENE # 8（前書き）

わだかまりの解けた二人の絆は更に強固になる・・・

STAGE 02 「仲間、と呼ばれて」 - SCENE #8

■ UNO学院 / 学部棟 / 屋上 ↓ リフトホール

屋上を後にすると、翔と彰はリフトホールへの階段をゆつくりと下った。途中、折り返しの踊り場を抜けたところで、翔が徐に口を開いた。おもむろ

「彰。ちよつと聞いてくれるかい？」

翔の声は真剣だった。彰は、いいぜ、話してみろよと気軽に応じる。

「自分の自己満足だって事は判っている。それでも、これからの君とのことを考えると、どうしてもはつきりさせておきたい」

「何をだよ？」

「僕は、君のことを羨んでいたんだと思う」

大きく息を吸うと、翔はゆつくりと先を続けた。

「僕と違って明るくて、決断が早くて何でもできて・・・正直、君に嫉妬していたと思う」

黙って、聞いている彰。

「漸く自分で出した結果も、君に取られるかも知れないと思った。神和姫先輩にも指摘されたけど、本当に自分でも嫌気がさすよ。それでも、僕は君と友人でいたい。こんな僕でも友人でいさせてくれるなら・・・」

「ざーけてんじゃねえよ、翔」

彰は、翔に仕舞いまで言わせなかった。顰めっ面をしながら、彰は強く言った。

「俺のセリフを取らないでくれよ、翔。だいたいな、俺の方こそ、お前に謝んなきゃならないことがある」

「彰が？」

「そうさ。俺こそ、お前のが羨ましくなっちまったのさ」

「ええ?!」

心底驚いた表情の翔に、彰は、何だよ気が付いてなかったのか？と、呆れた様な笑みを浮かべた。

「ああ。お前は俺には無い才能を持つててよ、俺よりも真面目で物事とことん追求する。そんな殊勝なこと、俺には出来ない。正直、先輩とサシで話しているお前が羨ましかった。俺も参加したかったが、自分の實力じゃどうにもなんないってことも判ってた。だから、ちよつと卑怯な手を使っちまったよ」

はあ、と彰は肩を僅かに落として溜息を付いた。

「でもな、先輩の言葉を聞いて——これじゃアカンと思ったんだ。このまま、翔と袂を分かってしまっていていいのかってな」

「それは——ぼくもそう思った。最後の最後で・・・ここで踏み留まらなきゃ駄目だって思ったら、自然に言葉が出ていたんだ」

翔は自分の言葉に苦笑いしながら言った。

「それもこれも、その事を気づかせてくれた人のおかげだけだね」
「そっか。そいつはホントによかったな」

そうだね、と頷く翔。

「お互い、動機は似た様なもんだったってことか・・・」

「そういうことだな」

「そうか」

「そうだぜ」

何時しか、二人の表情には笑みが浮かんでいた。あははは、と笑い始めると、それが止まらなくなる。二人で腹を抱えて涙が出るまで笑った。

「なあ、翔」

「なんだい？」

「もっと気兼ねなく、お互いに色んな話を話そうぜ。こんなこたあ、もうこれっきりで御免だぜ」

「そうだね。僕もそう思う。彰とはずっと友達でいたい。だから――隠し事何かしたくない」

「なら、友情の再確認と行くか！」

「ははは、全く彰らしいね」

がっちりと握手する二人。二人の絆が、今まで以上に固く組み合わさった瞬間だった。彰は、翔の手を握りながらもやりと笑って宣言した。

「でもな、翔。神和姫先輩のことは簡単には譲らないからな！」

「はあ、まだそれかよ、彰」

「それ以外に、何かあるって言うんだよ翔！」

ここがポイントなんだぜ、翔はホントに判ってないな、などと一人で盛り上がっている彰の傍らで、賞は大きく溜息を付いた。はたして彰と友人を続けるのは本当に賢い判断だったのか、今一自信が持てない翔だった。

SCENE # 9 に続く

STAGE 02 「仲間、と呼ばれて」 - SCENE # 8 (後書き)

言葉にしないと、旨く伝わらないことがあります。自分の価値観を相手に押しつけると、無用な軋轢を生みます。相手の価値観を認め、自分の価値観を話してみる。お互いの、相互理解への第一歩です。翔も彰もまだまだ未熟ではありますが、それでもお互いの事を理解しようと勇気を振り絞りました。この一歩は、きっと今後の二人にとって大きな力となることでしょう。

STAGE 02 「仲間」と呼ばれて」・SCENE #9（前書き）

亜里沙と話す葵は、心が軽くなるのを感じていた・・・

STAGE 02 「仲間、と呼ばれて」 - SCENE #9

■ UNO学院 / 学部棟 / 高等部二年 / 2 - A 教室 ↓ ガルテン

「どしたの、葵。何かいいことあった？」

珍しく笑みを浮かべている親友に、亜里沙は尋ねてみた。

文芸部の一件があつて以来、葵が笑みを浮かべることなどめつきり減った。だいたい葵が笑ってる事自体、亜里沙が無理して笑わせているようなものだった。

それが、今日は朝から優しげな笑みが時折零れる。

「ん・・・、そうね・・・」

語尾を濁らせて言葉を返してきた葵に、亜里沙は眉根を寄せて腕を組んだ。

「気になる？」

「そりゃあね。だって、葵ってばこのところやたら暗かったもの」

亜里沙以外からこんなことを言われたのなら、傷ついてしまう言葉だったが、葵は特に気にしなかった。全てを知った上で、普通に接してくれる、腫れ物を触るようなことをしない亜里沙を、葵にはとても楽に感じられたからだ。

「あててみようか？」

「何を？」

「葵が、そんなに嬉しそうにしてる理由」

「わかるの？」

へへへへ、と笑うと亜里沙はビシッと葵を指さして言った。

「一年の三奈瀬翔くん！ 彼が葵の凍った心を溶かしたのね！」
「え？」

思わず息をのむ葵。畳みかける様に続ける亜里沙に目を白黒する。

「み・・・奈瀬くん、がどうかしたの？」

「何かあったでしょや。いや、何かあったわね？」

断定口調。このルーチンに入った亜里沙は怖い。本人が満足するまで、その追求の手を決して緩めることがない。

「さあ、吐きなさい。早く吐いた方が、早く楽になれるわよ」

にやりと笑った表情に、いつもながら寒気を感じた葵は、早々に観念して白旗を揚げた。

「謹^{つつし}んで、話させて頂きます」
「宜しい」

鷹揚に頷く相手に、それでも葵は最後の抵抗を試みた。

「でも、こんなに大勢の人がいるところだと・・・」
「じゃ、“ガルテン”にでも行きましょ。あそこなら、人がいないスペースなんて幾らでもあるでしょうから」

一瞬で、その儚い抵抗も完膚無きまでに粉碎されたのであった。

UNO学院の欧州式庭園、通称『Garten』（ガルテン）はメイン・エントランスの反対側からでた所にある。学院の各棟を南から半円形に取り囲む様に設置されたこの庭は、幾何学模様で剪定された植木の壁が迷路を成した広大な庭園だ。

葵と亜里沙は、リフトでエントランス・ホールまで降りると、ホールの脇のベンディング・スペースでパツクのジュースを買った。どうやら、長期戦になりそうね、と苦笑しながら葵は思った。

綺麗に剪定された植木の間を、二人はゆっくりと歩いていく。暫く前から人の声がしないな、と葵が思っていると、不意に亜里沙が立ち止まった。

「大分奥まで来たわね。ここなら、誰にも聞かれないと思うわ。座りましょ」

ハンカチで手際よくベンチを拭くと、自分の隣をポンポンと叩いてみせた。

大雑把に見えて、その実細かいところまで気が回るのが亜里沙だった。一つ頷いて、葵は静かにベンチに腰掛けた。

周囲は鳥の声で満ちていた。青空の下で黙って座っていると、話そうと思っていたことが自然に整理されていく様な、そんな爽快感を感じた。

「あの、ね・・・」

「うん」

「あの子たち・・・とても純粋で、邪気がない・・・だから、心が洗われる様・・・そのように、感じたの」

「彼らが？」

「ええ。取り繕うことも、偽ることも、隠すこともない。想ったこ

とを、思った通りに表現出来る。それが、とても楽に思えるの」
「それは良かったね、葵」

ホントに良かったね、と我が事のように喜びながら、亜里沙は葵の両手を取った。ぎゅっと握りしめてくるその両手の暖かさに、葵は思わず瞳が潤む思いだった。亜里沙がいてくれて良かった——亜里沙がいなかったら、葵はあの辛い体験を乗り越えられなかっただろう。

「ありがとう、亜里沙・・・」

「これで一安心だわ」

「？」

「葵に、また心を開ける相手が見つかったことよ」

「そう・・・ね」

真面目な翔の顔と、悪戯っぽく笑う彰の顔を思い出して、葵は微笑んだ。

「ごめんね、今まで心配を掛けてしまつて」

「いいの、謝らなくても！ 信じていた相手に裏切られる辛さは、あたしも、よく知っているから。」

「亜里沙・・・」

「あたしもね、あなたがいてとても心強く感じてるのよ。だからね、葵。お互い様よ」

「ん」

葵は亜里沙の言葉に頷きながらも、亜里沙は自分よりも遙に心が強いと思っていた。

自分は、人間関係が辛くて文芸部から逃げてしまったけれども、亜里沙は相変わらず弓道部で頑張っている。一年にして抜擢されて、

それが為に虐めを受けたものの、亜里沙はへこたれずに部活を貫いているのだから。葵には、到底真似出来ないことだった。

そんな亜里沙が、自分の存在が彼女の為になっていると言っている——その心使いが葵の心を暖かく包み込む様だった。

「今度は、何時彼らと会うの？」

「次の約束は、明日の放課後よ」

「ふうん。また、屋上でやるの？」

「ええ。人が、いないほうがいいから・・・」

「そうか。じゃ、ビシビシ鍛えてあげなよ！」

軟弱者と軟派者っぽいからね〜と、断定口調の亜里沙に、葵はちよつぴり苦笑いを浮かべるのだった。

SCENE # 10 に続く

STAGE 02 「仲間、と呼ばれて」・SCENE #9（後書き）

葵は、亜里沙と言う親友に色々と支えて貰っています。葵自身は、決して弱い人間では無いのですが、件の『文芸部事件』^{くだん}（何時か番外編で書きたいのですが、内容にちよつと辛いモノがあるので、書くことから逃げてしまっています）のお陰で、すっかり人間関係に弱くなってしまうています。亜里沙がいなければ、学院に来ること自体も無くなっていたかもしれません。心から信頼出来る友人がいること——これに勝る“宝”はなかなかありませんね。

次回は、いよいよSTAGE 2の最終回。どのように決着がつくのか、乞うご期待です。

STAGE 02 「仲間」と呼ばれて」・SCENE #10 (前書き)

- ・ 彰も参加し、いよいよ翔は葵にA D & a m p・Dを教わり始めるが・
- ・

STAGE 02 「仲間、と呼ばれて」 - SCENE #10

■ UNO学院 / 学部棟 / 屋上

「先輩っ！ こっちっす！！」

屋上に出ると、見事な夕焼けが空を染めていた。

亜里沙との話が、予想以上に時間を取ってしまったことを申し訳なく思いながらも、待っている翔と彰のところに、葵は小走りに駆け寄った。

「ごめんなさい。来るのが少し、遅くなってしまって」

「構わないっすよ、全然！」

脳天気言い放つ彰に、翔は一瞬“お前が言うなよ”とでも言うように顰めっ面を向ける。

だが、結局はこれが彰の本質だろうと思ひ直し、諦めるかの様に軽く溜息を付いた。

「気にしないで下さい、神和姫先輩。時間をとって頂いているのはこちらの方です。来て貰えるだけで、・・・嬉しいです」

最後の一言は、言うのにちょっと勇気が要った。

お互いに話す機会が増えてきたとはいえ、翔にとって葵はまだ“未知の人”だったからだ。

真面目で物事に真剣に取り組み、合理的な考え方をする——そんな印象を、翔はこれまで受けてはいたが、それが葵の全てであるはずがないと思っていた。

相手を知るといふ点では、最初の出会いの時から、翔はまだ一歩

も先に踏み込めていない。

「今日はどんなことをするんっすか？」

色々考えている翔の傍らで、何も考えていない彰は至ってお気楽だった。彰に言わせると、“色々考えても、結果が変わらないんなら、考えるだけ無駄だろ”と言うことになるらしい。

見方によっては、これは考える努力を放棄していると言えるかも知れない。

だが、悩み事が多い翔と違い、彰は至ってストレスが溜まらない得な性格をしていた。

「三奈瀬くん。どこまで、進んだ？」

「はい。職種（CHARACTER CLASS）の所は全て読み切りました。もう少しすれば、呪文の項目に入れます」

「そう・・・」

翔は、努力の甲斐もあって、マニュアルを読むペースが大分早くなってきた。

葵は一つ頷くと、職種に関して幾つか質問を投げかけてみる。

その何れをも、翔は正確に答えてみせた。確実に、理解のスピードは上がっているようだった。

「職種は、その人格（CHARACTER）の方向性を決める重要な要素の一つよ。戦士（FIGHTER）、巡察者（RANGER）、聖騎士（PALADIN）、僧侶（CLERIC）、ドルイド（DRUID）、魔導士（MAGICUSER）、盗賊（THIEF）、吟遊詩人（BARD）。戦士系は直接相手に立ち向かい、僧侶系は支援と回復を、魔導士は支援と解析を、盗賊は情報収集と罠や鍵の解錠を行う・・・」

「先輩、俺らって、その職種で言うとなにになるんですかね？」

唐突に彰が口を挟んだ。翔と違って、マニュアルを読んでいないので、中身の話をされても全く付いていけない。それ故に、発言の機会を狙っていたのだった。

「あなた方の、職種？」

「そうっす！」

満面の笑みを浮かべる彰。やれやれと、空を仰ぐ翔。

「・・・そう、ね・・・。河邑くんは、戦士系（Warrior）だと思うわ。三奈瀬くんは・・・。」
「僕は？」

葵の双眸が翔のそれと交錯する。

「・・・僧侶系（Priest）、だと思うわ」
「僧侶系、ですか？」

「ええ・・・。あくまで、わたしが感じたことだけれども」

彰の“戦士系”は理解できる。スポーツ以外はまるで駄目の彰に、他に期待できることは無いだろう。しかし、と翔は思った。

“僕が、僧侶？”

葵の表情からは、何も伺えない。どうして自分が僧侶なのか、良く判らない翔だった。

そうこうしている内に、以外に時間が経った様だ。紅い夕陽は地平に没しかけ、濃紺色の夜空には星が瞬き始めていた。

「今日は、ここまでにしましょう」

「はい、ありがとうございます。次回は、何時にしますか？」

「三日後の今日、場所はまたここで」

「わかり・・・」

翔の言葉を彰が遮った。先輩、先輩、せんぱいと小学生みたいに手を挙げて発言する。

「今度、どっか部屋借りてやりましょうよ！ 屋上よりもかんふたぶーでっせ！」

「彰！」

葵の表情がみるみる曇っていくのを見て、翔は慌てて彰の放言を止めた。

「先輩、僕は屋上でも全然構いません。先輩がやり易いように、やって頂ければと思っていますから」

「・・・」

唇を噛みしめて、葵は俯いてしまった。

ここに至り、超鈍感な彰も漸く不味いと思い至ったようだ。あちやーしまった、という表情を浮かべ、助けを求めるように翔に視線を振る。

彰に即されるまでもなく、翔はどうにかしないと思った。葵との間に垣根として存在するものが、どうやらこの辺にあるようだが、自分も多少神経質な翔は、扱いに慎重さを要する部分であることも感じていた。

「先輩……僕は……」

「少し……考えさせてくれる？」

掠れるような声で、葵は漸くそれだけ言った。そして小さく一礼すると、身を翻すように屋上から立ち去った。

呆然と、その後ろ姿が扉の向こうに消えるのを見ていた彰が、頭を掻きむしった。

「し、しまった~~~~~！ また！ また、やっちゃまったよ~~~~~」

その場で人格崩壊を起こしていく彰には構わず、翔は黙って思案に暮れていた。どうしたら、葵の抱えている想いを理解できるだろうかと。

STAGE 2・5に続く

STAGE 02 「仲間、と呼ばれて」・SCENE #10（後書き）

何時もお読み頂き、有り難うございます。さて、このSTAGE 2ですが、中途半端な所で区切ることになってしまいました。元々はもつと長かったこのSCENE 10ですが、このSTAGEのタイトルにそぐわない内容となってきたので、その部分をすっぱり削ってしまった為です。あ、削った部分はSTAGE 2・5に掲載します。STAGE 3に入る前に、読んでやって頂けるとウレシイです。

件の『文芸部事件』^{くだん}ですが、ちよつとずつその姿が現れ始めています。葵にとって、この事件はまだ相当な心の傷となって残ってしまっておりま。元々が非常に大切にしていたその場を無惨にも壊され、追放されてしまったのですから。まだ、葵はその事柄と向き合うだけの力がないのです。今後、それがどうなるか。それは、この先お楽しみに。

S T A G E 2 ・ 5 「悪意の、影」(前書き)

葵がリフトホールで出会ったのは・・・

STAGE 2・5 「悪意の、影」

■ UNO学院 / 学部棟 / 屋上 ↓ リフトホール

堅い靴音を響かせて、葵は階段を駆け下った。

“ また・・・逃げてしまった・・・ ”

心に後悔の念が渦を巻く。弱くて臆病な自分が、まだ何も克服できていない自分が――悲しいほど不甲斐なかった。

零れ落ちてきた涙を拭うと、少し落ち着こうと足取りを緩める。リフトホールに付く頃には、大分冷静になっていた。

“ もっと冷静にならないと。周りにも心配を掛けてしまう ”

思考に深く埋没していたのだろう――リフト・ホールで唐突に声を掛けられて、葵は吃驚した。

「これは、これは――」

心に突き刺さるその冷徹な声を聞いて、葵は思わず軀を強ばらせた。

今、何を於いても一番会いたくない相手。一遍の躊躇もなく、冷静に自分を弾劾したその相手が、葵に冷笑を向けていた。

「奇遇だな、神和姫葵さん」

「・・・」

“ 相手には、ならない。なつては、いけない ”

葵は努めて押し黙り、無反応でいた。

「黙るか。相変わらずだな。自分が不利な時は、黙秘を使って話さない」

「・・・」

湧き上がる激情に、葵は自分の自制の枷が千切れそうになるのを覚えた。

——自信がない？ 言っに事欠いて、何を根拠にそんなことを言うのだろうか！

言い返せたら、どんなに気持ち晴れるだろうか。だが、そんなことをしても相手を喜ばせるだけ。俯いて、床を見つめるしかないことがとても辛く、悲しかった。

「あっ・・・」

顎に手をやられ、強制的に顔を上げさせられる。

その手のぞつとする程の冷たさに、悲鳴を上げそうになるのを必死に噛み殺す。

「泣きもしないか。ふふ、気丈なものだな。もう少し、可愛げがあれば、別の手立てを考えるに吝かでもないのだが・・・」

「琉央っ！」

蒼白な表情で今にも崩れ落ちそうな葵を、疾風の様に走ってきた人物が間髪抱き留めた。

冷笑する琉央に鋭い視線を投げかけながら、亜里沙は葵を庇うよ

うに二人の間に身を置く。

「あんた、葵に何不埒なことやってんの！」

「これはこれは。正義の使者サマの登場か」

「やるに事欠いてまだ葵を嬲る気なの！ 言われの無い中傷を散々まき散らしといて！」

「心外な言い方だな。私は事実を話したまで。全ての責は、その神和姫さんにあると思うが？」

「それはあんたが勝手に言ってるだけでしょー！！」

「亜里沙、もう、いいから・・・」

「だって、葵っ！」

「ありがとう、でも、もういいの・・・」

縋り付く葵を支えながら、亜里沙は琉央を親の敵が如く睨み付けるのを止めなかった。

「ふっ、好きにすればいい。何れせよ、事実が揺ぐことはない。事実が揺らがなければ、神和姫さんの復権もならないだろう」

「あんた、ねえ・・・」

ぎりぎり、と奥歯を噛み締める亜里沙に嘲笑を投げかけながらも、琉央は丁度来たりフトに乗り込んだ。

「エントランス・ホール」

『リヨウカイシマシタ』

リフトの扉が閉まる寸前、琉央は駄目押しの打撃を葵に放った。

「確信犯の高国さんは兎も角、下級生を君の運命に巻き込むのは止めるべきだ。自分の始末ぐらい、自分だけでつけたらどうだ？」

「下種野郎っ！ とつとと消えろっ！」

亜里沙が力任せに投げつけた鞆は、すんでの所で閉まったリフトの扉に当たって跳ね返った。

「くくく・・・」

リフトは、僅かな機械音と共に下降していく。磨き抜かれたリフトの壁面に映る琉央の表情には、酷薄な笑みが浮かんでいた。

「神和姫葵さん。キミが、その程度の自己認識と知識で、MASTERとなることなど有り得ない。MASTERたるこの僕が、それを謹んで保証してあげよう・・・」

STAGE 03 / SCENE # 1 に続く

STAGE 2・5 「悪意の、影」(後書き)

本編で、漸く「導入部分」が完了です。これから、物語も佳境に入っていく・・・といいなあ(笑)。相も変わらず読み難い拙文ですが、今後とも宜しくお願い申し上げます。

STAGE 03 「開かれた、扉」 - SCENE #1 (前書き)

その幻想的な光景は、一体何を意味しているのだろうか・・・

STAGE 03 「開かれた、扉」 - SCENE #1

■何処かの場所 / “聖域”

『シャン、シャン』

鈴の音が鳴った。薄衣を纏い、ベールで顔を覆った踊り子が六人いつの間にか柱の影に現れると広間の中央に進み出る。どこからともなく流れてくるもの悲しいハープの調べに合わせて、軽やかに踊り出す。

『シャン、シャン』

『タン、タタン』

手足に付けた鈴の音と、軽い靴音が交錯する。その間を縫って、高い澄んだソプラノの詩が聞こえてくる。

「・・・踊れ、踊れ 時を忘れて

黄泉の踊りを、さあ踊れ

まこと現世うつせの柵しがらみを

想い その身に解き放ち

黒き流れに 溺るるならば・・・」

声のする方に、華奢な“黒の女王”の姿があった。滑る様に進み出ると・・・。

「皆様、“アルカナの舞”にようこそ。古の理いにしえことわりに従い、定めさだめの席へと御案内致しましょう」

そう言うと、“黒の女王”は一人一人を石の椅子に導いていった。

「魔導卿、北天座へどうぞ」

「姫君、北天座へどうぞ」

「龍の盾様、北天座へどうぞ」

「大戦士様、北天座へどうぞ」

「吟遊詩人様、東天座へどうぞ」

「近衛騎士様、東天座へどうぞ」

「騎士総帥様、南天座へどうぞ」

「守護者様、遊星座へどうぞ」

「魔剣士様、西天座へどうぞ」

最後に、“黒の女王”は“黒の王”の手を引いて西天座に導いた。

「さあ、相方を御紹介致しましょう。歓迎して下さいませ」

ふつと全体が暗くなった。そして、唐突に紅い光が広間の周囲に生じた。その光は次々と広間に滑り込んでくると、それぞれの石の椅子に停まった。激しく光ると、黒い姿の人影を生んだ。

「方々、紹介を。」

黒の女王の言葉に、一人一人立ち上がると名乗りを上げる。

「黒の巫女。宜しくお見知りおきを」

「黒の剣聖・・・」

「黒の導師。よろしゅう」

「黒の使者です。またお逢いしましたね」

「黒の魔王・・・」

「黒のお、恐騎い！」

「黒の聖女。お初にお目に掛かります」

「黒の衛士と申す」

「黒の楽人です」

「そして、わたくし。黒の女王はご存じですわね」

一つ、空席が残った。

「まことに残念ですが、我らが主は所用でこの“舞”に来ることが出来ません。何れ、直々に皆様方に御挨拶に参ることでしょう。さあ、まずは宴をお楽しみ下さい。」

女王が手を振ると、黒い姿のサーバントが宙から生まれた。手に捧げた金の杯を一つ一つ、恭しく配って行く。

「詩を、踊りを」

陽気な曲が流れ、舞姫達が優雅な踊りを披露する。

吟遊詩人が星天球に投げた杯は、手を離れた瞬間に金の盾へと変化していた。近衛騎士の杯もまた、宙でその姿を変貌する。今や二十枚の金の盾が浮かぶ広間は、金色の輝きで淡く照らされていた。そんな中、黒の女王の澄んだ声が広間に響き渡る。上古の詩なのか、言葉を理解は出来ないものの、意味するところは不思議と全員に理解される。

「・・・そこに輝くは“大地の精髓”、“大地の証”

運命の理、我は畏敬を持ちて尊ばんとす

光、尚も眩しく輝けれど彼方に遠く離れ

近き隣人として、その背に影の有するを知る

時至れり、望みの扉よ開かれん

総てこれ初見にあれど、人よ努々（ゆめゆめ）忘るるなかれ
そは生まれし時に失われし記憶也・・・」

金色に輝く盾は、一斉にその者の頭上へと浮かび上がった。

星天球の中心に燃える緑の旭光が一段と輝くと、二十二本の光の
剣となつてその切っ先を四方に伸ばした。

「汝の行い、ここに現れよ！」

緑炎の剣が、金色の盾に突き刺さった。そして、女王の呪言と共に、盾は剣の刺さった箇所から変化を始める。黒の陣営の盾が調和の中にて一様に変わる中、白の陣営の盾は己が矜持故か、各人各様に変わって行く。

「魔導卿には“魔術師”を」
「姫君には“女祭司”を」
「黒の女王には“女帝”を」
「大帝には“皇帝”を」
「龍の盾には“大祭司”を」
「黒の巫女には“恋人”を」
「大戦士には“戦車”を」
「吟遊詩人には“均衡”を」
「黒の導師には“隠者”を」
「黒の剣聖には“運命”を」
「近衛騎士には“意欲”を」
「黒の使者には“犠牲”を」
「黒の魔王には“死”を」
「騎士総帥には“芸術”を」
「黒の恐騎には“悪鬼”を」
「黒の聖女には“塔”を」

「守護者には“星”を」
「黒の衛士には“月”を」
「魔剣士には“永遠”を」
「黒の楽人には“道化”を」
「・・・かくて“舞”は始まらん
在りしが如く、今も何時も現世に伝わらん
子らよ、汝恐るるを知れ
軀に記し、始源の定めを」

詩が止んだ。今やその身に“影絵”を映し出した金色の盾が宙に輝いていた。

“・・・然り・・・然り・・・然り・・・”

無言の声か。心に肯定が伝わると、盾と盾が緑光で結ばれる。

“魔術師”と“塔”が。
“女祭司”と“悪鬼”が。
“女帝”と“芸術”が。
“皇帝”と“死”が。
“大祭司”と“犠牲”が。
“戦車”と“道化”が。
“均衡”は空位を。
“隠者”は“永遠”を。
“運命”は空位を。
“意欲”は“月”を。

総ての闇を“星”が照らし、総ての光を“恋人”が導く。

「・・・独星には一位を

連星には二位を
星座には整合を
遊星には自由を
ことわり
理には定めを
運命には言葉を
流るる時には 終焉の刻を・・・」

盾の輝きが薄れてくる。それと共に、周囲の状況が朧気になって行く。

「・・・踊れ、宴に・・・さあ踊れ・・・」

女王の声が遠くなっていく。それと同時に、その光景が遠くなり、ぼやけていく・・・

SCENE #2に続く

STAGE 03 「開かれた、扉」 - SCENE #1 (後書き)

いきなりのシーンで始まりましたSTAGE 3。何が何だか、判りませんよね。それもその筈——訳は、SCENE #2をお読みになれば判……。ればいいなあ(笑)。

STAGE 03 「開かれた、扉」 - SCENE #2 (前書き)

葵の観たものは、はたして何だったのか・・・

STAGE 03 「開かれた、扉」 - SCENE #2

■ 葵自宅 / 自室 ↓ UNO 学院 / 学部棟 / 高等部二年 / 2 - A 教室

“夢・・・?”

ずきずきする頭を抱えながら、葵は目覚めた。体が酷く重く感じる。

どうしたのだろうか？ 何があったのだろうか？

霧が掛かった様に、記憶が薄ぼんやりとしている。

見回してみると、見慣れた自分の部屋だった。03:31——デジタル時計が、蒼く冷たい光を放っている。

「誰かに、呼ばれた・・・?’」

そんなはずはない。一体、誰に呼ばれたというのだろうか。

深く思い出そうとすると、頭痛が一層酷くなる。

もう少し眠れば、この酷い頭痛も多少は良くなるかも知れない。そう思っ、葵は再び横になった。

「葵、酷い顔ね。どうしたの？ 風邪・・・じゃないんだけど」

痛む頭を抱えて漸く学院に辿り着くと、葵の顔を見た亜里沙に開口一番心配そうに言われた。鞆を自分の机の脇に提げると、葵はこめかみを指で少し押してみる。朝起きてみても、頭痛は収まっていなかった。

「そんなに、酷い顔色？」

「うん。今朝、鏡見た？」

「ええ。酷いとは思っていたけれど……。今朝から頭痛が取れないの」

「薬飲んだ？」

「ん……。」

肯定するのに、首を振るのも痛そうだった。

「家で休んでいれよかったのに」

「……。今日、二人との約束があるから……」

「あなたねえ……」

義理堅いのも程があるわ、と呆れた口調で言つと、亜里沙は親友の顔をのぞき込んだ。
頭痛で真っ青な顔色をしているのに、なんて無茶なことを言うてるのだろう。

「約束は、何時？」

「……。放課後」

「まだ一日、目一杯あるわね。ねえ、葵。辛い様だったら、保健室で休んだら？」

「……。大丈夫……」

大丈夫な訳も無いのだろうが、葵には無理強いしても駄目なことを、亜里沙はよくわかっていた。

「じゃ、どうしても辛くなったら言つのよ」

「……。その時は、きちんと言っわ」

丁度その時予鈴が鳴った。自分の席に戻った亜里沙は、このまま葵一人を放課後行かせる訳にはいかないと思った。

SCENE # 3 に続く

STAGE 03 「開かれた、扉」 - SCENE #2 (後書き)

前回 (STAGE #1) チラリと出た“異世界”ですが、まだ不明な点は多いですが、今後もし少しずつその片鱗が見えて来ようかと。ご期待下さい。

STAGE 03 「開かれた、扉」 - SCENE #3 (前書き)

葵に聞こえてくる、その彼方からの声は・・・

STAGE 03 「開かれた、扉」 - SCENE #3

■ UNO学院 / 学部棟 / 高等部二年 / 2 - A ↓ 屋上

放課後になつても、葵の頭痛は一向に収まらなかった。

調子が悪ければ、家に帰って休むのが分別のある行動なのだろうが、生憎葵は度を超える生真面目さで、立てた予定を頑なに守る、些か厄介な性格をしていた。

「あたしが言つといてあげるからさ・・・」

葵は帰りなよ、という親友の有り難い忠告も、葵はスルーする。

無論、亜里沙が自分の事を心配して言ってくれていることは、葵も重々理解はしている。

だが、それでも自分から振った約束を反故にするのはどうしても嫌だった。

「ごめんなさい、亜里沙。わたし・・・」

「ああ、判った！ みなまで言わないで。こういうパターンに填った葵は全く人の意見を聞かなくなるから。はいはい、説得しようと思つたあたしが莫迦だつたわ」

少しくらい憎まれ口を言つてもいいでしょと戯けた顔をしたあと、一転亜里沙は真剣な表情で続けた。

「あたしも付き合つわ。今にも倒れそうな親友を放っておけないでしょ？」

「・・・わかつたわ・・・」

亜里沙の言葉に頷くだけでも目眩がするくらいだった。

葵は、自分でも莫迦なことをしているという自覚はあったが、何か心の奥で突き動かされる衝動をも感じて、どうしても引けなかった。

屋上へ出る鉄扉を開けると、強い風に髪を掻き乱される。熱を持った頭が少し冷やされ、多少頭痛が和らぐ感じがする。“頭痛が和らいだ”などという、甚だ楽観的観測を足掛かりに、自制心を最大限に発揮して努めて冷静な表情を作る。

「先ばーいつ!!」

元氣一杯に叫ぶ彰の声が頭に響いた。

ありったけの力を振り絞って、眉間に皺が寄るのを耐え凌ぐ。

そつと背中に置かれた亜里沙の暖かい手に励まされる様に、葵は先に来ていた翔と彰の所までゆっくりと歩いた。

「ちわつす、先パイ！ あれ？ 今日は高国先輩もいつしよっすか？」

「そうよお。キミ達が葵の貴重な時間を浪費していないか、チエツクしにきたのよ」

「ええ!!」

「なぐんにも疚しいことが無ければ、どうと胸張ってればいいでしょ。違うの？」

「ギクギクギクっ!!」

不気味に笑う亜里沙に、判り易過ぎる反応を返す彰。

そんな二人が漫才を繰り広げている傍らで、翔はじつと葵の顔を

見つめていた。

「神和姫先輩・・・？」

訝しげな表情を浮かべる翔。普段通りの葵だが、翔にはどうにも葵の調子が悪そうに見えていた。確信は無いものの、悪戯に心配をするよりは、と思って翔は聞いた。

「先輩、具合が悪いのですか？」

今までの翔ならば、自分の判断に自信が持てない故に相手に自分の憶測を聞く様なことも無かった。しかし、マニュアルを読む過程で、葵にありのままの自分を肯定して貰った事実が、翔を少しずつ強くしているのだろう。

「いいえ、何も心配することはありません。始めましょう」

淡々と言った葵の表情には、特に何の兆しも浮かんでいない。

本人が明確に言う以上、そうなのだろうと自分を納得させた翔は、課題に集中する事にした。

「判りました。それでは、種族の所です。種族には、人間、エルフ（妖精）、ハーフエルフ（半妖精）、ドワーフ、ノームなどがいます。人間以外の種族には成長限界がありますが、人間には成長限界がありません。しかし、その反面なれる職業（CLASS）は一つだけで、複数の職業（CLASS）を取ることが出来ない。しかしながら・・・」

翔がマニュアルを開いて、淀みなく葵に説明していく。この所の真剣さ故か、心持ち読むスピードも早くなっていた。

無論のことながら、努力も何もしない彰は翔の隣で呪文のよ
うな言葉の羅列を聞いて惚けていたが。

「・・・先輩？」

その声に含まれる懸念の色に、慌てて顔を上げる。

一瞬、自制心が途切れて素の表情が顔を見せるところだった。

そつと傍らに立つ亜里沙を心強く感じながらも、葵は翔に言葉を
返そうとした。だが。

『！』

ガン、と鈍器が力一杯叩き付けられた程の衝撃を感じて、葵は目
を見開いて空を見上げた。

亜里沙が何か言っている。

翔が心配そうな顔をしている。

彰が医療室が、と叫んでいる。

何かが聞こえる。

何が？ 何処から？ 誰から？ 何故？

『！――』

また衝撃が全身を襲う。

ぐんにやりと世の中の構図が歪んでいく。

空が青から紅へ変わっていく。

悪寒がする様な寒さと、吐き気がする様な熱さが軀を苛む。

どうしたのだろう？

『・・・える・・・』

え？ 何なの？

『・・・こえる・・・』

き、こえる。聞こえるけれども。

『・・・わ・・・しの・・・えが・・・こえる・・・』

何かが、迫ってくる。何かが、近づいてくる。何かが・・・。

世界が白く染まっていく。単色に溢れるその中で、唯一“色”を感じるもの。

頭は割れそうに痛く、軀は全神経が暴走するかの様な出鱈目な情報
報を脳に送ってくる。

『・・・わたし・・・の・・・こえが・・・きこ・・・える・・・』

聞こえる。聞こえた。で、どうしたいの？ どうすればいいの？

『・・・てを・・・のばして・・・』

何に？

『・・・杯（CUP）・・・に・・・』

伸ばすだけで、いいのね？

『・・・杯に・・・てを・・・のばして・・・』

流石に、もう限界だった。震える手を、ゆっくりと“伸ばして”いく。届こう、届かせようと思って。得も言われぬ想いに従って。

そして・・・。。。。。

「・・・はあはあはあ・・・」

額には玉の様な汗が浮き出ていた。小柄な軀を折り曲げて、苦しそくに肩で息を継ぐ。

「お嬢っ！　まだか！！」

「・・・お、くったわ・・・」

“お嬢”と呼ばれた少女は、漸くそれだけを言葉にする。

「そうか！　なら、撤収だ！」

エクトル　よんしんぶかん
恵久美流公国四審武官の一人である透眞は、漠羅爾の宝刀“流星”を振るいながら背後に呼ばわった。

少女の周囲を固めていた残りの四審武官である真砂貴、華衣、簾の三人が頷く。

「・・・ま、つてね。今・・・“門（TOR）”を開ける・・・から・・・」

息も絶え絶えなのだが、通常の理全てが歪んでいるこの場所――
“影の回廊”では、頼りになるのは“夢見”の力を有する“お嬢”だけだった。

「In Himmel der Wind（天空に風），auf
Erden das Wasser（大地に水），und in
Menschchen Herzen brend das ewi
ge Feuer・・・（人心に焰・・・）」

古代西方の“力の言葉”が紡がれていく。
拳が白くなるほど、手の中の“龍王の宝錫”（SCEPTRE

OF DRAGONLORD)を握りしめると、軀の中の氣の流れを整え、力を集約していく。

お嬢の四方を固める四審武官達が必死に剣を振るって時間を稼ぐ中、詠唱の音が静かに、だが確固として響いていく。

「・・・招門っ(TOR)!!」

瞳を見開いて、力一杯“力の言葉”を口にすると、宝錫で眼前の空中に“扉”をなぞった。

途端、蒼い輝きを発して、扉の輪郭が燃え上がる。

「今よっ!」

宝錫で“門”を叩くと、一気に向こう側へと扉が開いた。

左右を守っていた華衣と簾が中に駆け込み、背後を固めていた透眞が二人の後を追う。

「姫君、お早く」

最後に残った真砂貴が声を掛けると、頷いたお嬢は集中を解き、扉が閉まる最後の瞬間に真砂貴と一緒に中に飛び込んだ。

一瞬後、蒼い輝きを放っていた扉は消え失せた。目標を失った歪んだ力の影は、空しく辺りを吹き荒れるだけだった・・・。

SCENE # 4 に続く

STAGE 03 「開かれた、扉」 - SCENE #3 (後書き)

何時もお読み頂き、有り難うございます。物語中にて、今後非常に重要となる「杯」(CUP)が出て参りました。その詳細は、徐々に明らかになって行きます。また、後半部分に「？」と思われた方。STAGE 3.5「希望を、翔ばして」にて“お嬢”の話が登場します。ですので、それまで暫しのご辛抱を！

STAGE 03 「開かれた、扉」 - SCENE #4 (前書き)

突如現れたその“もの”は、一体何を意味するのか？

STAGE 03 「開かれた、扉」 - SCENE # 4

■ UNO学院 / 学部棟 / 屋上

「三奈瀬くん！ とりあえず、葵を寝かせて！」

「判りました。悪いけど、彰も上着を頼む」

「あ、ああ」

上着を脱いで地面に敷く翔に習って、彰も慌てて制服の上着を脱いだ。

翔はぐったりした葵を、そのそつとその上に横たえる。

「神和姫先輩、どうしちゃったんすかね・・・」

「判らないわ。あたしだって、こんなこと初めてなもの」

物事には動じない性格の亜里沙も、流石に困惑した様に彰に答えた。

「神和姫先輩、なにかご病気でも？」

「あたしの知る限り、何も無いはずよ」

「病氣じゃない・・・か。やっぱり、この金杯に関係がある、と思っただ方が良さそうだな」

先程、不意に空中に現れた金杯。今も、葵の両手にしっかりと収まるそれは、ウィンググラスほどの大きさで、鈍く輝いている。

「この金杯っていったい・・・」

何なんだろう、と呟く様に言う亜里沙。

何もないところから現れるなんて、到底普通でないことが今こ
で起きている。

理解出来ないという表情を浮かべているのは、翔も彰も同じだっ
た。三人は惚けた様に、互いの顔と眠る葵を暫し見比べるだけだっ
た。

「うつ・・・」

「神和姫先輩？」

「葵？ 葵、大丈夫？」

「大丈夫っすか、先輩！」

低いうめき声とその停滞を破った。まだぼんやりとした表情で、
葵はその瞳をうつすらと開いた。

「あ、りさ・・・？」

「葵、話せる？ どこも痛くない？」

「・・・大丈夫・・・躰に、力が・・・入らないだけ・・・」

ゆっくりとだが、言葉を返してくる葵に、亜里沙は緊張を解く様
に大きく息を吐いた。

よかった、と翔も彰も安堵の表情を浮かべる。

「心配したわよ、ほんとに」

「・・・」、めんなさい・・・」

「高国先輩。まずは、神和姫先輩を保健室に連れて行きましょう。
こんな所に寝かせておけませんから。」

「そうね。葵、保健室に連れて行くから。ちょっと辛いかも知れな
いけど、暫く我慢してね。」

「・・・ん・・・」

小さく頷くと、葵は眠る様に瞳を閉じる。そつと葵の髪を撫でつけてから、亜里沙は翔に言った。

「三奈瀬くん、頼める？」

「えゝっ！ 何で翔なんすか！ オレの方が適任ですよゝ！」

「アンタは黙ってなさい！」

邪な考えを持つているヤツには頼めないわ！ と亜里沙に一刀両断されて、彰は横暴だゝと叫びながらさめざめと噓泣きをしていた。もっとも、翔とてそんな光景をみる余裕が有る訳でもなかった。どうやって葵を運ぼうかと言う思考が、頭の中でぐるぐると巡っている。

どうしようか、どうしようか、どうしようか・・・と悩んだところで、選択肢がある訳でもない。

はあ、と一つ溜息をついて、翔は意を決した。

「彰、上着を頼むね」

「わかってるよ」

しゃゝないなあ、と言う彰に頷くと、翔はそつと葵の背と膝裏に手を差し伸べた。

「先輩、持ち上げますよ」

声を掛けると、翔は葵をそつと抱き上げる。思ったより軽い躰だった。

先輩、きちんと食事してるのかななどと、場違いな思いに捕らわれる。

「以外に力があるのね、三奈瀬くん」

「これくらいなら大丈夫です。神和姫先輩、軽いですし」

「ま、“重量級”の高国先輩だと、翔じゃ無理っすけどね」

「なんですってえ！」

ちゃちゃを入れる彰に、拳を振り上げる亜里沙。

そんな二人に笑みを浮かべていると、屋上の扉が不意に開くと、背の高い男子生徒が扉から現れた。酷薄な笑みと、影が差す様な雰囲気。翔はその名を知らずに口端に乗せていた。

「琉央・・・」

「やあ、高国亜里沙さん。奇遇だね、こんなところで」

努めて明るく振る舞う態度に、思い切りズレを感じる。

見る間に機嫌を悪くした亜里沙がぶつきらぼうの極地、といった感じで対応する。

「アンタこそ、何しに來たのよ」

「ご挨拶だね。ここは共有の場だよ。誰に断る必要も無いと思うが？」

「じゃあ好きなだけいなさいよ。あたしたちは急いでいるんだから」

「ふふふ。君に言われるまでもない」

敵意むき出しで相手に応じている亜里沙をみて、彰は驚いた様に翔に聞いた。

「誰だよ、あれ？」

「二年の琉央って先輩だ。どうやら、神和姫先輩と何かあったらしいけど、僕も詳しいことは知らないんだ」

「そっか。でも、見るからにいけないヤロウだぜ」

「その点は、僕も同感だよ」

小声で話していると、憤然と亜里沙が振り返った。

「三奈瀬くん、河邑くん！ 行くわよ！」

怒り心頭の亜里沙は、靴音高く歩いていく。屋上の扉を開けると、翔を手招きした。

「三奈瀬くん！」

「は、はい。今、行きます！」

翔は慌てて頷くと、抱き上げている葵の位置をそつと直して歩き始めた。

得体の知れない笑みを浮かべる琉央とは、慎重に距離を取る。彰も、翔と琉央の間に入って相手を牽制することを忘れない。こう言うところは頼りになるな、と翔は思った。

「三奈瀬くん。一つ忠告しておこう」

屋上の扉まで辿り着いて、ほつとして翔が緊張を解いた時。背後から声が追いかけてきた。

「彼女は災いを呼ぶよ。このまま関わっていると、君も“女神が織りなす運命のタペストリーに編み込まれてしまう”よ。そうなつてからではもう遅い。慎重に考えるのだね」

「勝手に言つてなさい！ 二人とも、行くわよ！―！」

怒声と共に、叩き付ける様に扉を締める亜里沙。翔が最後に見たのは、亜里沙の剣幕にも全く動ぜず、いつもの冷笑を浮かべる琉央だった。

SCENE #5に続く

STAGE 03 「開かれた、扉」 - SCENE #4 (後書き)

さて、“金杯”なるアイテムができました。アイテム（ITEM）とは、ANDで使われる魔法の道具を示すことです。魔法的なもの（MAGIC ITEM）であることが多々あり、場合によっては、鍵となるもの（KEY ITEM）であることもあります。アイテムは、『鑑定』（IDENTIFICATION）をしなければ、その用途も能力も判らないことが殆どです。普通は、魔法使いに呪文（SPELL）を掛けて貰って、その用途と能力を特定してます。コンシューマーゲームに有る様に、手には入ったら即使えらと言っ訳ではありません。また、用途と能力が判っても、アイテムにその力を発揮させるには、『発動の言葉』（COMMAND WORD）を唱える必要がある場合が多いです。これも、前述の『鑑定』で調べることが出来ます。以上、ゲーム的な解説まで（笑）。

ストーリーの方ですが、だんだんと混迷を深めている様な気がします（笑）。特に複雑にしようと意図しているではありませんが・・。

STAGE 03 「開かれた、扉」 - SCENE #5 (前書き)

遠くから聞こえてくるその声は・・・

STAGE 03 「開かれた、扉」 - SCENE #5

■ UNO学院 / 本部棟 / 医療室

『・・・える?』

不意に声がした。周囲は真っ暗だから、夢の中だろうかと思はばんやりと思った。

『・・・聞こえる?』

まだだ。夢の中かもしれないけれど、はつきりと聞こえてくる。答えるべきかちよつと逡巡したが、結局はその明るく朗らかな声に応えることにした。

“ええ・・・聞こえるけれど・・・”

『・・・良かった。今は一度しか言えないから、良く聞いてね』

“・・・はい・・・”

『あなたに送った杯（CUP）・・・あれを、絶対に手放しちゃ駄目よ』

“杯・・・金色の杯のこと?”

『そう、それよ。大事なものだから、誰にも渡さないでね』

“・・・どうして?”

『今は理由を言えないわ。でも、あなたにとってとても大事なものだから、誰にも託さずに、必ずあなたが持っていてね』

“・・・判ったわ・・・”

なんで了解したのか、自分でもはっきりとその理由がわからなかった。

でも、その朗らかで明るい声には、全く邪気を感じなかったから――それが理由と言えば理由なのかも知れない。

『ありがと。あ、そろそろ時間だから。お姉さん、また逢いましょうね』

声が遠くなっていく。葵は、はっとなって問いを發した。

“・・・ちょっと待って・・・あなた、お名前は？”

『・・・な・・・り・・・な、よ・・・』

遠くから、途切れ途切れに聞こえてくる声。その声が遠離るにつれ、葵の意識もだんだんと闇に沈んで行った・・・。

まぶしさを感じて、葵はゆっくりと瞳を開いた。

折からの夕陽が、保健室の窓から差し込んできていた。

気怠さが残る躰には力がまだ入らない。そのまま、ベッドに横になっっていることにした。

「杯……」

手の中には、冷たい違和感があった。
そつと上掛けから出してみると、それは確かに金色の小さな杯だった。

「夢……じゃなかったの……?」

夢ではない。厳然と、その金杯は葵の手の中で鈍い輝きを放っている。

「あ、先輩。気がつかれましたか?」

不意に保健室の扉が開いて、見知った顔が入ってきた。手には葵の学生鞆を二つ下げている。

「失礼します、先輩。ご気分は如何ですか?」

「……大丈夫。まだ、力が入らないけれど……」

失礼にならないように慎重にベッドから距離を取って、翔は窓際に寄りかかった。

そんな気配りを少し嬉しく思いながら、葵は一つ下の後輩の顔を見つめた。

「……運んでくれた?」

「はい。先輩、屋上で突然倒れてしまいましたので」

「……そう……」

わたし、倒れたんだ——はつきり覚えていないのだが、ここにくうして寝ているのだから、倒れたというのは本当なのだろう。

「・・・ありがとう・・・」

「え？」

「・・・あなたに、お礼を。運んで、くれたのでしょうか？」

「そ、そうですが、特別なことをしたとは・・・」

思っています、と慌てる相手をほほえましく感じて、葵は自然な笑みを向けた。これが、相手をますます混乱に追いやるとは知らずに。

「先輩、お願いですからかわないで下さいよ」

「・・・特に意図してはいないのだけど、そう感じたのなら、謝るわ・・・」

叶わないなあ、と情けない声を出す少年——その笑顔は、葵の胸に暖かく浸みていった。

「声が聞こえたのですか？」

「ええ」

少し落ち着いた後。葵は翔に椅子を勧めると、先程夢の中で聞いた声の話を話してみることにした。

「空中から、摩訶不思議に金杯が現れたのですから、夢で声を聞いてもおかしくないかもしれませんね」

「・・・信じる？」

「明確な事実が、目の前にありますから」

翔は、葵の手の中に収まっている金杯を見ながら言った。

「・・・それでも、事実を突きつけられていても、信じ難いと言う
思いは残りますが」

「・・・無理もない、ことでしょうか？」

「そう、ですね」

暫しの沈黙。

「あの・・・三奈瀬くん。亜里沙と河邑くんは？」

「高国先輩は、先輩の鞆を取って来て僕に渡した後、彰を引っ張っ
て先に帰ってしまいました」

「先に、帰った・・・？」

「はい。あ、あと・・・先輩にしっかりと頑張れって伝えてくれて・

・

「・・・そう？」

亜里沙が何を意図したのかは判らないが——葵は何故か少し目眩
がする思いだった。一日の分量としては、十分以上の量だ。

はあ、と溜息をついて起きあがってベッドから降りる。手早く靴
を履くと、脇に置かれた鞆を手にとって一瞬思案した後——金杯を
中に仕舞うと。パチンと留め金を鳴らして鞆を閉じた。

「先輩。ご迷惑で無ければ、送らせて下さい」

「え？」

驚いた様に、相手の顔を見る。

その相手は、真剣な表情を浮かべていた。その顔を見ていると、
何故かひとこと、突っ込んでみたくなった

「・・・どうしても？」

がくつと擬音が聞こえる様な感じで、まるで肩すかしを食った様に翔がずっこけた。吸って吐いてを数回繰り返して心を落ち着かせた後。気を取り直して思わぬ反撃を行ってきた相手に答えた。

「・・・どうしても、です。先輩をお一人で帰らせる訳にはいきません」

その、妙に力んだ物言いが心の琴線に触れたのか。葵は自然に笑みを浮かべると丁寧に頭を下げた。

「・・・お願い、致します・・・」

SCENE # 6 に続く

STAGE 03 「開かれた、扉」 - SCENE #5 (後書き)

なんだか、訳が判らない展開が訳の判らない所で止まりました。どうなる事やら、ははは(乾笑)。まあ、表面的にも内面的にも、変化が起きていると言った所なのでしょうか。何でもない、何ともないシーンでしたが、結構な難産でした。葵も翔も、あまり自分から積極的にしゃべらないキャラです。話が一向に進んでくれなくて困った状態でした。次回は、金杯の謎が少しは・・・解けるといいなあ。

STAGE 03 「開かれた、扉」 - SCENE #6 (前書き)

翔の危機に葵が叫ぶ。一体何が起きたのか・・・

STAGE 03 「開かれた、扉」 - SCENE #6

■ UNO学院↓葵自宅

“夢・・・じゃないよね”

何度目だろうか——どうしても信じてくれない疑り深い自分に納得させる為、翔はそつと隣を盗み見た。

間違いない。今、自分は神和姫先輩と一緒に並んで歩いている・・・！ 無論、それも道理だった。何せ、自分が先輩を自宅まで送ると言ったのだから。

空中から金色の小杯が現れるという、如何にも眉唾物のような非日常的イヴェントに遭遇後、葵は一時的に人事不省で倒れてしまった。暫く保健室に厄介になった後で意識を取り戻した葵に、“どうしても送る”と翔が言い張って——現状に至るという訳だった。

自分がイニシアティブをとって起こした結果ではあったものの、それでも事態をすんなり受け入れるほど自分の精神は柔軟では無いらしい——何度も、隣を歩く相手を確認しては、翔は信じ難い事実を少しずつ自分に信じさせる努力を繰り返していた。

「・・・どうしたの？」

不意にその“信じ難い事実”から声が掛かった。

これが、鈴が鳴るようになって声なんだな、と莫迦なことをぼんやりと考えていたら、いきなり顔を覗き込まれた。

「三奈瀬くん、大丈夫？」

顔が紅い↓熱があるのでは？↓こんなこと（自分を送る）をしていてもいいの？ という三段論法が、某番組の様なジェット・ストリーム・アタックを掛けてきた。

おいおい自分、惚けている場合じゃないぞ・・・と心の中で突っ込んでおく。

「あ、いえ。人混みが雑踏だなあって・・・」
「？」

意味不明な発言を悔やもうにも、翔の頭は旨く働いていない。

大体、今日だって、この間だって葵と話していたのに、どうして今になって自律神経失調症みたいになるんだ？ 先程からの自分は、どうにも腑に落ちない。

きょんとして見返してくるその無防備な表情に一層の目眩を感じ、翔は気を取り直すようにぶんぶん頭を振った。所詮自分には旨い言い逃れなど出来ないのだから、正直に言っしか無いのかも――溜息を付きながら、翔は思った。

「・・・ちよっと、緊張しているみたいです」
「どうして？」

瞬間反射で言葉が返ってくる。

考えていられる時間の余裕なんて全く与えられない。

「え、あ、う・・・ええとですね、先輩とお話しているのに緊張を感じるというか・・・」

「いつものことでしょう？」

ああ、どんどん逃げ場が無くなっていく。

確かに、いつもの事だった。だが、そのいつもの事に自分は凄く緊張しているのだ。

「・・・具合が悪いの？」

「それは、無いです。」

きつぱりと返した。具合なんて悪くない。

「信じがたい事実ですが・・・どうやら、先輩と一緒にいることで緊張しているようです」

「・・・そう、なの・・・」

葵のトーンが急激に下がる。

はっと思った時には手遅れに成り掛かっていた。心の中で警鐘が鳴る。

「あ！先輩と一緒にいることを迷惑に、だとか感じている訳じゃありません！誤解無きように言わせてください。僕は今の現状を不快にも、不満にも、不本意にも思っていないから！！」

強調に強調を重ね、打算無しに自分が感じていることを吐露する。捨て身の行動が功を奏したのか、葵の表情が少し明るくなる。

「・・・無理、していない？」

「全く！微塵も！一片たりとも！！」

「・・・良かった・・・」

その笑みは、翔の心を一振りでなぎ倒した。“痛恨の一撃”って

ヤツである。相手が、そのことを意識していないから不意打ち効果も抜群である。翔の目眩は一層強くなるようだった。

「・・・言い難いことなんですけど・・・ちょっと免疫が無くなってしまったと言うか、何というか・・・」

「免疫？」

「・・・はい、免疫です。先輩と話していて、いつもの平常心がどうにも保てない、といったところです。」

三度目の突っ込みに、“もう自棄だ！”と翔が思ったかどうかは定かではないが、気が付いてみれば、翔は自分が感じていることを素直に白状してしまっていた。念のためにいうが、全ては自発的である。

「そう、なの？」

「はい。でも、けっしてそれが嫌だ、ということではないんです。どちらかと言えば、その逆だと・・・」

顔は真っ赤に染まって、見られたものではないだろう——みっともないなあ、との想いは、次の瞬間綺麗さっぱり吹き飛んだ。

「・・・嬉しい・・・」

う、嬉しい？

嬉しいですか？

神様、一体全体何がどうなっているんですか？

翔の混乱と困惑を余所よそに、状況は余談を許さないものに急転直下していた。

翔の貧弱な対人対応限界など、とうに越えている。

それでも、言わなければいけないことがあった。心には心で答える——これだけは、どんなことがあっても忘れないと肝に銘じたことだ。

「そう思っただけで頂ければ、僕も嬉しいです」

明快に、明確に。そして、きちんと自分の思いを込める。

葵が何を不安に思っているか翔には判らないが、そんな不安を吹き飛ばすように、自ら率先して自分の心を開いてみせる。二度と、過去の過ちは繰り返さない。

「ありがとう、三奈瀬……翔くん……」

想いが心に架け橋を創る時——その意思の力は大きな変革を促すのかも知れない。それが内的なものであれ、外的なものであれ——己が世界に没頭し、時間と状況が見えなくなるのは世の常だろうか。

互いの話に深く入り込んでしまっている間に、翔と葵は大きな公園まで歩いてきていた。ここを抜ければ、葵の家がある高台に辿り着く。

周囲の状況には人一倍注意深い、何時も通りの二人であれば気が付かない訳がないのだが——公園に入った時から、ぴたりと人通りが無くなったことに全く気が付かなかった。その注意の大部分をお互いに向けている状況では、気がつけと言うこと自体が無理なことだったのだが……

葵の歩みが不意に止まった。どうしたのだろうと翔が思う間もなく、鋭い声が耳朶を打つ。

「翔くん!!」

どん、と押されてバランスを崩し、翔は地面に転がった。

“一体何が起こったんだ?”

訳も判らず混乱する中、顔を上げて見ると、本日二回目の非日常が目飛びこんできた。

信じがたい状況に、思わず躰が硬直する。

「・・・せん、ぱい?」

身を屈めるようにして、葵が立っていた。その肩口から、ぼたぼたと零れ落ちる深紅の流れ。葵に正対する黒い影の様な姿。その相手が手にした剣が、葵の肩を刺し貫いていた。

「先輩つ!!」

己の叫び声が、その硬直を解いた。己が見たモノを否定するかのよう、心が悲鳴を上げている。そんな状態なんて受け入れられない——翔はただ我武者らに、何の妙味も工夫もなく、相手に飛びかかった・・・。

SCENE #7 に続く

STAGE 03 「開かれた、扉」 - SCENE #6 (後書き)

お待たせしました。前回のほえほえシーンから一転、急転直下になります。“黒い影の様な姿”ですが、剣以外は薄ぼんやりとして輪郭がはつきりしない、と思って下さい。ゲーム的にならば、UNDEAD（死人）であるWREITHやSPECTRE（LORTRのRingwraithに似ていますが、そのものズバリではありません。かれらの正体がなんなのか——それは、次回をお楽しみに。

STAGE 03 「開かれた、扉」 - SCENE #7 (前書き)

翔と葵の危機に際して、彼方の光の中から現れたのは・・・

STAGE 03 「開かれた、扉」 - SCENE #7

■ UNO学院↓葵自宅

はあはあはあ——息が切れる

ずきずきずき——軀が痛い

どくどくどく——心臓が悲鳴を上げている

・・・僕は、死んだのだろうか？

そうじゃない。

まだ・・・まだ、生きている。

軀は、まだ盛んに痛みを訴えてきている。良かった、痛覚はまだあるんだ・・・

・・・先輩はどうしただろうか？ あんなに血を流していて——大丈夫の筈がない。

翔は霞む目を凝らして、目の前の相手を睨み付けた。

黒い、影のような相手は、翔を嬲るように切り刻んだ。

単に遊ばれているのだらう——どの一撃も倒れる程の致命傷ではなかった。

だが、その程度でも、翔の軀のそこかしこから出血し、目にも入ったのか視界も真っ赤だった。

・・・せ、んぱい——頼むから、逃げてください・・・

そう願わずにはられない。

何もできない自分は無力だ。

視界も、意識も霞んでいく。もう、とつくに限界は越えている・・・

その時——自分の意識を揺さぶる微かな声が聞こえた。

「・・・翔・・・くん・・・」

その声を聞いた時、自分の中でまだ死んでいない何かが、もう一度自分を突き動かした。

正直言っただけ。正直言っただけ。今他の誰かのことを構っている余裕なんて無い。

それでも、どんなことがあっても、譲れないことがある。そし

て、その決意を表す時は、今この時だ。

言葉にしなれば。少しでも、不安を取り除いてあげなければ。歯を食いしばって、その言葉を口にする。

「・・・せん、はい・・・大丈夫、ですか・・・」

だが、そこまでだった。

無理して声を出したせい、急激に軀から残った力が抜けていく。

・・・情けない・・・僕は、このまま倒れてしまうのか・・・

意識が遠のくとともに、翔は地面にゆっくりと崩れ落ちた。

肩の激痛が止まない。

翔が相手にぶつかった反動で突き刺さった剣は抜けたが、傷口からの出血が止まらないからだ。

まるで、軀から生きる力が流れ出していくようだ——がつくりと膝を付いて、葵は浅い呼吸を繰り返した。

ぼんやりとした視界には、手から滑り落ちた鞆を中心に、地面に広がる紅い模様が映っている。

近くで、叫び声がする。

誰だろう？ 誰って・・・ああ！ 翔くんがいるんだ。わたしを庇ってくれているの・・・？ そんな。そんな、無理をしないで・・・。

歯を食いしばって、顔を上げる。そして、心が凍るような光景が目に見え込んだ。

そこに、全身から血を流して、翔が立っていた。物も言わず、動きもせず——もはや、意識があるかどうかも定かではない。

ただ、相手に対して拳を構えることだけは止めていなかった。

「・・・翔・・・くん・・・」

掠れたような声が、それでも漸くでた。

あんなになつてまで——どうして、立っていられるのだろうか？
どうして、逃げないで自分を庇っているのだろうか？

どうして・・・

出口のない思考がぐるぐると巡って——次の驚きに辿り着く。

「・・・せん、ぱい・・・大丈夫、ですか・・・」

信じられない。そんな状態でどうして、相手の心配をするのか。翔も瀕死の重傷だろくに、どうして相手を思いやる力が残っているのか。そんなになってまで……。

そして——翔がゆっくりと倒れていくのがスローモーションのように目に入った。絶望に似た諦めの想いが、心を冷たく浸食していく。

「ごめんなさい、翔くん……もう……動けない……」

涙が流れ落ちていた。諦めて仕舞いつつある弱い自分なんかを庇ってくれて——謝罪の言葉を呟きながら、葵もゆっくりと地面に倒れ込んだ。

身動きしなくなった翔にそれ以上構うことなく、黒い影は滑るように葵に近づいた。

そして、影のように霞むような手を葵の上に翳すと、低い呪文がそのフードの奥から零れ出す。

『……Verrate mir, wo es sich be
findet. Verrate mir, wo es ist.
……（それが何処にあるか、我に知らしめよ）』

何かを捜すかのように、その手は彷徨った挙げ句、深紅に染まった葵の鞆の上でぴたりと止まった。

影は地面に膝を付くと、鞆を閉じる留め金に暫し手こずった後、ぱちんと解錠した。歓喜の波動が沸き起こる。

・・・見つけた・・・ついに見つけた・・・

だが、その邪悪は笑みは、驚愕に取って代わられる。無造作に開けた鞆から、目映い金光があふれ出したのだ！

『G U・・・A a・・・』

呻き声と共に手で顔を庇い、二三歩後ずざる黒い影。

ますます輝きを増す金色の光——金縛りにあったように、身動きしない影。

そして、その光の彼方から、誰かが目映く輝く“白い路”を歩んでくる。

そして——金色の鎧を纏った“戦士”が光の中から歩み出た。

「これはこれは、こんなところでD R E A D K N I G H T（破滅の騎士）とは奇遇だな。何を血迷って、現世に脚を踏み入れてるんだ？」

その言葉が引き金となったのか。それまでの金縛りから一転。剣を振りかざし、問答無用でその金色の人物に襲いかかった。

「ふん」

鋭い金属音が響いた。必殺のその一撃を、難なく金色の籠手で受け止めると、にやりと笑う。

「お返した。しっかりと受け止めるよ」

ドンっ！　と言う音と共に、逆の手が影にめり込んだ。そのまま、突き上げるように空中に放り投げる。

為す術もなく、影は吹き飛ばされた。

「これで、仕舞いだ」

先程まで剣を受けて止めていた手に、いつの間にか優美な細工の細い両刃の直刀が収まっていた。

僅かに目を細めると、目映いばかりに直刀が輝きはじめる。

「In Namen der erwedigen Koenig
(崇め奉る王の名にかけて) , lei mir die Kraft
der Legende (我に伝説の力を与えたまえ) . .
• DRACHEN SCHLAG (龍撃衝) ! !」

無造作に振るった直刀から、凄まじい魔導エネルギー——EVOCATION POWERが影を直撃する。

『Ghaaaaaa!!』

その影を“虚空の向こう”に吹き飛ばして、その圧倒的な魔導の流れは止まった。

「全く、準備運動にもならん——おっと、こうしてはおれんな」

倒れ伏した葵と翔をみやると、男はまず葵の傍らに屈みこんだ。
いまだに出血の止まらない肩口の傷——その上に手をそつと当てた。

「Allmaechtiger Herr（偉大なる王よ）、
gib mir deine Kraft um diese Wunden zu heilen（この傷を癒す力を与えたまえ）。
HEILUNG（完癒）！！」

呪文を紡ぐと、たちまちの内にその手が蒼く光り出す。

葵の傷口を撫でるように、そつとその手を動かすと、すぐに出血が止まり、みるみるうちに傷口が塞がり始める。

先程までは苦しげだった呼吸も安定し、蒼白だった顔色も目に見えて良くなっていく。

「ようし、こつちのお嬢ちゃんは大丈夫だ。あとは、あつちの坊主だな」

立ち上がって翔の元に歩いていく。事切れたように地面に倒れ伏す翔は、全身から出血して酷い有様だ。

「全く、無茶をする。DREAD KNIGHTと相対して、命が合っただけでも僥倖うまいまいというものだ」

先程同様に、翔の軀の上を蒼く輝く手が忙しく動き、再び同じ呪文が紡がれる。

「ふう・・・流石に、一日“完癒”（HEAL）二回はしんどいか」
言ってる内容とは裏腹に、余裕の笑みを浮かべている金色の戦士。さて、と周囲を眺めると。

「まあ、坊主は良いとしても、お嬢ちゃんはなあ・・・」

肩を竦めると、そつと葵を抱き上げる。

ん？ と落ちていた鞆も拾い上げると、一緒に近くのベンチに運んだ。

翔は、そのまま放置である。いや、オトコノコは辛いものがある（笑）。

「さて。ここの“排他結界”はまだ保ちそうだし——すぐに気が付くだろうから、暫し待つとするか。」

葵が横たわるベンチの隣に座ると、金色の戦士はのんびりと構えて翔と葵の目覚めを待った。

「うつ・・・」

体中に痛みが走った。完全に強ばっている。

強ばる？ 強ばるって、それだけなのか？ あれだけ、傷を受けたのに？

「よう。気が付いたか坊主」

ちよつとおもしろがっているような声が、唐突に聞こえてきた。咄嗟に身構えようとするが、満足に軀が動かない。

「だ、誰だっ！」

「そうだな——お前達にとっては、救い主ってヤツかな」

齒を食いしばって、ままならない軀を起こしてみる。

金色の鎧を身に纏った男が近くの本チに座っていた。その傍らには……

「先輩っ！」

「心配するな。傷は癒してやった。じきに目が覚める」

「傷を……癒した？」

「聞いた通りだ。あのままだと、このお嬢ちゃんはもうあと僅かしが持たなかっただろうよ。因みに、お前さんはお嬢ちゃん以上に酷い状態だったがね」

——二人とも癒してやったんだ、少しは感謝して欲しいものだぞ、と金色の男はどこか不満そうに言う。

「そうか……それは、ありがとう……ございます……」

「いいってことよ。お、お嬢ちゃんが目を醒ますぞ」

力を振り絞って立ち上がると、翔は葵が寝ている本チに歩み寄った。まだ満足に軀に力が入らず、本チの前に座り込んでしまう。

「……あ……」

低く呻いて、葵はゆっくりと瞳を開けた。

「先輩、大丈夫ですか？　ご気分は？」

「……翔……くん……無事……」

「はい、僕は大丈夫です。何でも、先輩も僕も、この人が助けてく

れたって・・・」

その時漸く、葵は自分の隣に座っている金色の男に気が付いた。

「やあ、お嬢ちゃん。初めましてだな」

「・・・あなたは・・・」

「名乗る前に、質問がある」

「・・・なんで・・・しょう・・・」

「お嬢ちゃんは“魔導師”にも“夢見”にも見えないが・・・アンタが召喚主（Summoner）か？」

「しょう・・・かんしゅ・・・？」

「ああ。魔導の力を持っているようにも感じないので、些か疑問だが・・・」

隣で聞いていた翔が、その言葉にぴんときた。

だが、不用意に口にして良いものかどうか判らない。

何せ、この金色の男は敵か味方かも判らない。相手に判らないように言ってみる。

「先輩。もしかすると、アレかも・・・」

「・・・アレ・・・あっ・・・」

身動きした葵の手が、鞆に当たった。金具が止められていなかった為に鞆が開いてしまい、中のものが地面に零れ落ちる。教科書に混じって、カランと乾いた金属音が鳴った。

「ほう・・・。なるほどな」

金色の男は、目を細めて転がり出たものをみた。

金色の小杯は、先に葵の流した血潮が紅くこびり付いている。ふ

む、と唸ると、金色の男は立ち上がった。

「何を！」

「坊主、ちょっと黙ってる。何もせんから心配するな」

立ち上がりかけた翔は、金色の男に頭を押さえられて、再び座らされてしまう。

打って変わって、荘厳な雰囲気を纏った金色の男は、葵の前に片膝を付くと仰々しく一礼して、本日三回目の非日常的な状況に翔と葵を巻き込んだ。

「いにしえことわり古の理に従い、我、リュオン龍王・バクラニ漠羅爾——召喚の声に応じ、参上つかまつった」

SCENE # 8 に続く

STAGE 03 「開かれた、扉」 - SCENE #7 (後書き)

今回出てきた『金色の小杯』はArtifact（神遺物）です。普通の魔法アイテムとは力も能力も桁違い——超魔法アイテムとも言えるでしょうか。無論、量産品ではなく一点物で、大概ユニークな能力と、能力を使った時に生じる、厄介なバックファイアを併せ持っています。どうやら、葵がこの金杯の力を呼び起こしてしまったようですが、どんなバックファイアが生じるのか。それは、また次回の更新で。

S T A G E 0 3 「開かれた、扉」 - S C E N E # 8 (前書き)

翔と葵が直面する問題に、どんな選択肢があるのだろうか・・・

STAGE 03 「開かれた、扉」 - SCENE # 8

■公園↓葵自宅

剣をすらりと腰の鞘に収めると、リュオンと名乗った金色の戦士は片膝を付いて、葵に対して優雅に一礼した。

「それで？ 俺が呼び出される栄誉に浴したお嬢ちゃんの名は何という？」

「・・・」

「おいおい、黙りはないだろ？」

呼び出したのは間違いでした、っていうオチは無しだぜ、と皮肉っぽい笑みを浮かべて言う。

「・・・ああい。かみわきあおい 神和姫葵」

「そうか、お嬢ちゃんはアオイっていうのか。」

少し逡巡した後、葵は自分の名前を口にした。そんな葵の内面の葛藤を余所に、ふむそうか、などのたまわったリュオンはアオイ、アオイと口の中で何度か唱える言ってみた。

「そっちの坊主は？」

「三奈瀬 みなせしやう 翔つていいいます」

無駄な抵抗をせずに、あっさり名乗る翔。葵の視線を、ちょっと怖く感じたのは秘密だ。

「ミナセ・シヨウか。アオイ、シヨウ・・・。よし、覚えたぞ」

爽やかな笑みを浮かべる相手に、翔は今日何度目かの目眩を感じた。

「あなたは一体……」

「おっと。そろそろ排他結界が切れるぞ。このまま、ここには不味かるう?」

どういう事ですか、と聞きかけた翔をリュオンは遮った。

「ここから余人を遠ざけていた魔法的な結界の効力が切れる。誰彼構わず、この状況を見られては不味いんじゃないか?」

「……わたしの家が近くです」

「先輩!」

「選択肢は無いわ、翔くん、行きましょう」

「ふ……アオイは理解が早いな」

安全面を考えると、この得体の知れない人物を葵の家上げるなど、翔には大いに異論があるところだったが、他に妙案も思い浮かばない。

翔は慌てて、先に歩き始めた葵とリュオンの後を追った。

葵の家は、街の北にある少し小高くなった高台の上にあった。

人目を避けて大回りした三人は、たっぷり一時間歩くことになった。

その代わり、誰にも会わずに葵の家まで辿り着くことが出来た。

「……ここが、先輩の家ですか?」

「ええ、そうよ」

大きな敷地だなあ、と門の左右に続く生け垣を眺めながら翔は思った。

葵はツタが絡まった古い門に手を掛けた。ぎい、と言う軋んだ音をたてて門が開く。

翔とリュオンが入ると、葵は門を開ざすと二人を先導して歩いていく。

そこは、まるで深い森の中に居るような感じを受ける場所だった。玄関までの狭い車道は、周りを濃く生い茂った木々で囲まれている。

緑のトンネルと言えば多少ロマンティックにも聞こえるが、翔は多少重苦しいものを感じていた。

緩い右曲がりの坂を上がると、古びた洋館が見えてきた。

こんな街に、こんな建物が・・・翔が驚きを隠せずにいると、葵が静かな声で説明した。

「ドイツ人が戦前に建てた家——百年は経っているわ」

「そうなんですか・・・」

「珍しい？」

「・・・はい、少し」

そう、と呟くと、葵は大きな玄関の扉を開けた。そしてゆっくりと振り返ると静かな声で翔とリュオンに言った。

「神和姫の家に、ようこそ」

通された居間は、天井が非常に高かった。

日が差し込んでくる大きな窓からは庭が見えるが、それは玄関のとは反対側に位置しているようだった。

「洋式の家だけど・・・日本式の、所謂“洋式”とはぜんぜん違うな・・・」

「座らんのか？」

初めての場所で緊張気味の翔とは異なり、リュオンは暖炉の前に置かれたどっしりとした椅子の一つに無造作に腰掛けていた。

「・・・落ち着いてますね」

「ん？　そうか？」

「はい。ご自分がおかれた状況に順応しているように見えますが」

「そんなもんは経験の差だろうよ。今は絶体絶命の危機に陥っている訳でもないしな。懸念すべき点はとりあえず何もない」

「そんなものなんですか？」

「そんなもんさ」

事無げにリュオンは言った。

翔には、その態度が特に強がっているようにも見えなかった。

色々な経験に、この自信は裏打ちされているのだろうか――そんな風に翔が思っていると、葵が戻ってきた。手には、三人分の茶器を載せた銀盆を持っている。

「どうぞ」

翔とリュオンの前にカップを置くと、白磁のティーポットから薄い色のお茶を注ぐ。

「菓湯か？」

「カモミール茶。心が安まるわ」

そうか、といいながらリュオンはカップに口を付けた。一口飲んだ後、一気にカップを干す。

「なかなか旨いな。もう一杯入れてくれ」

葵はリュオンのカップにお代わりを注ぐと、自分のカップにもカモミール茶を注ぐと椅子に座った。暫く、暖かいお茶を堪能した後。

「なあ。差し支えなかったら、何がどうなっているか話してくれないか？」

「・・・いいでしょう」

葵はちらりと翔を見た後、これまでの経緯を話し始めた。屋上で突如“声”が聞こえ、そして空中から金色の杯が現れたこと。そのまま意識が無くなり、気が付いたら保健室で寝ていたこと。自分が気が付くまで待っていてくれた翔と二人で下校中に、あの黒い影に襲われたこと・・・。

「その金色の杯を見せて貰えるか？ 先程ちらりと見たが、どうも俺の知っているモノかも知れないからな。いや、心配するな。何も何もしないさ」

じつと見つめてくる葵に、命まで助けてやったのに信用しないのか、と苦笑しながらリュオンが言った。

葵はどうするだろうか、杯を見せるしかないのかな、と翔が考えていると、判りましたと小さく言っただけで葵が鞆から金色の杯を出してテーブルに置いた。

「ふむ……。やはり、な」

「これがなんだか知ってるんですか？」

「ああ。こいつは、俺の世界の“神遺物”（ARTIFAKTE）に間違いない」

「“神遺物”？」

耳慣れぬ言葉を聞いた翔は、思わず葵と顔を見合わせた。

「そうだ。魔法のアイテム——所謂、魔法的な道具ってやつだが、それよりも遙に強力なものと思えばいい」

「……魔法の、道具……」

「そんなものがどうして、ここに現れたんですか？ それに、先輩が聞いたって言う声——あれは、なんなのですか？」

「一つ一つ説明するから、慌てるな」

翔をやんわり制すると、リュオンは説明を続けた。

「アオイだけにその“声”が聞こえたんだな？」

「ええ、女性の声だった。少女と言った方が、良いかも知れないけれども……」

翔くんには聞こえなかったわね、と確認する葵に、翔は首を縦に振った。

「そうか。するつてと、アオイ。お前さんは“龍の姫君”の加護を受けたったことになるな」

「……龍の、姫君？」

「ああ。そうでなければ、その金杯がアオイのところに顕れる訳がない」

「それって・・・」

聞くべきか迷ったあげく、結局翔はその疑問を口にした。葵に対する配慮が足りないかなとは思ったが。

「それって、良い悪いでいうと、どちらに当たるんですか？」

「今のところは、良い兆候と思ってもいいだろ」

「そうなんですか？」

「あの影にやられそうになったところを助かっただろ。十分に良い兆候じゃないか」

「・・・どちらでもない、と言うのがこの場合正解のようね」

冷静に突っ込む葵に、リュオンは厳しいねえ、と言いながらも全く動ぜずに笑って言った。

「まあ、一つだけは確実だろう。金杯とあの影——D R E A D K N I G H T（破滅の騎士）って俺らは呼んでるんだが——の出現には、何らかの関係があるってことだ。どんな関係か、まずはそれを調べないとな」

「調べるって・・・リュオン、それは僕たちに協力してくれるってことですか？」

「何言ってるんだ。お前たちだけで、この事態をどうやって解決しようっていうんだ？ それにな、召喚されたからには、その“目的”が達成されないと俺も帰れないのさ」

呆れた表情でリュオンが言う。

「アオイもシヨウも、剣も魔法も全く駄目なんだろ？ 次にアレに襲われたら、それこそ瞬殺されるぞ」

「そんな・・・」

「身をもつて体験しただろ？ 微塵も躊躇する相手じゃないさ。さあ、はつきりしろよ。お前たちには、俺が必要なんだ」
「・・・判ったわ。お願いします」

黙って聞いていた葵が、ゆっくりと頷いた。

「理解が早くて助かるよ」

「翔くんも、いいわね？」

「止むを得ませんね。他に選択肢もなさそうですし」

「よし。それじゃ、盟約を結んだ記念に握手するか」

笑顔で差し出された右手を、葵と翔は交互に握った。それは、非日常的な激動の渦中に巻き込まれるサインでもあった・・・。

SCENE # 9 に続く

STAGE 03 「開かれた、扉」 - SCENE # 8 (後書き)

お待たせ致しました、SCENE # 8をお送りします。なにやら説明が多くなってしまうましたが、これでも長すぎないように削った積もりです。まあ、へっぽこ文章なので、過剰な期待をせずをお願い致します（笑）。

次のSCENE 9では、もっと動きが出てくるかと思っています。刮目してお待ち頂けるとウレシイです。

STAGE 03 「開かれた、扉」 - SCENE #9 (前書き)

葵の家でゆっくりとくつろぐ三人の最初の行動は・・・

STAGE 03 「開かれた、扉」 - SCENE # 9

■ 葵自宅

「腹が減ったな」

このリュオンの一言が、翔達三人の最初の作戦行動（？）となった。

言われてみると、翔も葵も空腹を覚えたからだ。

腹が減っては調査は出来ぬ、と真顔でのたまわるリュオンに苦笑しながらも、翔は部屋を出て行くこととする葵に声を掛けた。

「先輩、お手伝いしますよ」

「・・・経験は？」

「実家は小料理屋です。多少は出来ますよ」

葵は、少し驚いた表情を浮かべて翔を見た。

「そう・・・心強いわ」

実は、余りお料理は・・・と口籠もる葵に、翔は柔らかに笑いかけた。

「おっ？ 出来たか！」

翔と葵が料理をお盆に載せて居間に戻ってくると、それまでだらしなくソファにめり込んでいたリュオンが、待ってましたとばかり

に立ち上がった。

「あちらで、食べましょう」

居間の半分はダイニングとなっていた。どっしりとした深いマホガニー色のテーブルに、椅子が六脚置かれている。

葵が手早くテーブルを整えると、翔がその上に運んできた料理を置いた。

買い置きが余り無かったせいか、献立は和洋折衷の有り合わせのものとなった。余り得意ではないと言った割には、葵の料理の腕はそれほど悪くもなかった。

「旨そうじゃないか！」

「リュオンさんが普段食べてるものと違うと思いますが・・・」

「何でも大丈夫さ。胃腸の丈夫さは自慢なんだ」

「食べるだけにしては随分な褒め言葉ですね、それって」

「気にすんなよ、シヨウ」

にやりと笑って言うリュオンに、ちよつとむくれたように翔が返した。

「大半を、翔くんが作ってくれたわ」

「へえ」。シヨウは料理が得意なのか？」

「全部って・・・先輩、それは大袈裟ですよ」

慌てて訂正する翔に、葵は笑みを浮かべて頷いた。

「いいえ。本当に手際が良くて・・・わたしも見習わなくてはね」

「いや・・・先輩にそう言われると、恐縮しちゃいますよ・・・」

「ま、特技があるってのはいいじゃないか。さあ、冷めない内に食

べようぜ」

「全く・・・」

マイペースなりユオンに、翔と葵は顔を見合わせて笑ってしまった。

そして、先に食べ始めたリユオンに倣って箸を取った。

「さあて。腹が膨れたら・・・」

「たら？」

「ゆっくりと睡眠を取る。こいつが大事さ」

「・・・状況の検討はしないんですか？」

「あ？ そういえばそうだったな」

緊張感が微塵もないリユオンの言葉に脱力しながら、翔は助けを求める様に葵に視線を振った。

「・・・暫く、こちらに泊まると言うことね」

その葵も、なんだか惚けたような反応を返してくる。
だが、表情を見ると、二人とも至極真面目だった。

「頼むぜ。まあ、人目にはなるべく触れない様にするからよ。家主に迷惑は掛けられないからな」

「そうして貰えると、助かるわ」

「先輩っ！」

「他に、選択肢は無いと思うの」

驚いた様に言う翔に対して、葵は冷静だった。

「幸い、部屋は余っているわ」

「でも、先輩！ おうちの人は何て言うか！」

「誰もいないから・・・」

「え？」

聞いてはいけないことだったのだろうか？

翔の言葉が途中で途切れる中、以外に淡々と葵は先を続けた。

「両親は忙しい人たちだから——ここには、滅多に帰ってこないわ」

「・・・そう、なんですか・・・」

「だから、問題なし」

話を打ち切る様に、葵は幾分強い口調で言い切った。

「悪いな、アオイ。暫く厄介になるぜ。・・・そうだ、シヨウ。心配だったら、お前も泊めて貰えばいいじゃないか？」

「な、なんてことを・・・」

にやりと笑って、リュオンが必殺の一撃を放った。

思わず絶句する翔に、葵が追い打ちを掛ける。

「何が心配なの、翔くん？」

「何がって・・・」

「オレが愛しのアオイに不埒なことをしないか、心配なんだろ。素直にそういえよ、シヨウ」

「！！！！」

にやにや笑うリュオンに、完全にフリーズする様な一撃を喰らった翔だった。

「そ、そ、そんなことは・・・」
「そんなことは何だ？」

追求の手を緩めないリュオン。黙って見つめてくる葵。進退窮ま
った、と翔が脂汗を流す中、静かに夜が更けていく・・・。

SCENE | 10 に続く

STAGE 03 「開かれた、扉」 - SCENE #9 (後書き)

何時もお読み頂き、有り難うございます。次回でSTAGE 3も最終回です。話には、多少動きが出てくるでしょうか。それは、キャラクターたち次第なのですが・・・。

STAGE 03 「開かれた、扉」 - SCENE #10 (前書き)

次の手立てを話し合う三人は・・・

STAGE 03 「開かれた、扉」 - SCENE #10

■葵自宅

耳慣れない物音に、翔の意識は休息に覚睡した。

小鳥の囀りが、朝日が薄く差し込む鎧戸の向こうが聞こえてくる。

「・・・あれ？　ここって、どこだろう？」

見慣れぬ天井に、寝慣れぬベッド。暫し考えていた翔は、あつと声を挙げた。

「そうだった。昨日の晩、泊まったんだ・・・」

リュオンの挑発に乗ってしまい、優柔不断な自分らしからぬ積極的な行動を取った挙げ句、大胆にも葵に“僕も泊めて下さい”なんてほざいたのだった。昨夜の事ながら、翔はまだ顔が赤らむ思いだった。

「そうだ、こうしてはいられない。せめて、朝食の支度を手伝わないと」

慌てて起きると、手早く身支度を整えて翔は部屋を出た。

「おはよう、翔くん。早いね」

翔が泊めて貰った部屋は、二階の南東角に位置していた。

模様の彫り込まれた木の手摺りの階段を下りると、丁度キッチンから出てきた葵に出会った。葵は、クリーム色のブラウスに濃い茶色のスカートを併せ、その上に黄色のエプロンを掛けていた。手には、お盆に載せたポットとカップを持っている。

一瞬見とれていた翔だが、思い出したように慌てて朝の挨拶を口にする。

「おはようございます、神和姫先輩。無理を言って泊めて頂いて有り難うございました。おかげさまで、ゆつくりと休めました。」

丁寧にお礼を言った翔は、葵の顔に何とも言えない奇妙な表情――それは、顰めっ面とも言うが――が浮かんでいることに気が付いた。

「先輩？　どうかしましたか？」

「名前」

「え？」

「名前よ、翔くん」

「え？　え？　え？　??？」

混乱する翔に、葵の黒い双眸が僅かに狭まった。

「名前で呼んで欲しいって言うことだろ、ショウ」

「ええ！！」

なんだ、驚く様なことなのか？　と、階段を下りてきたリュオンが不思議そうに聞いた。

「アオイって呼んでやればいいだろ？　アオイも“ショウ”って呼んでるんだしな」

「でも……」

「名前で呼ぶことは信頼関係の現れだぞ？　それとも、お前達の世界ではそんな理^{ことわり}は無いのか？」

「……いえ……」

彰に聞かれたら何て言われるか――どっかずれた心配をしながらも、翔は腹を括った。

「それでは、これからは葵さん、と呼ばせて貰います」
「……いいわ」

葵の笑みが深くなる。

リュオンがにかつとわらって、早く朝食を食べようぜ、と即してくる。

そんな朝の光景を、好ましく感じる自分がいることに、翔は多少驚きを感じながら、朝食の席に着いた。

「洋食だけど……」

ちよつと躊躇いがちに葵が言った。

コーヒーか紅茶、トーストにベーコンエッグ、ヨーグルトにチーズ。所謂、コンチネンタルスタイルの朝食だ。磨き上げられたナイフやフォークが銀色の輝いている。

見事な手並みだなと思いつながらも、手伝う余地が無かったことを翔はちよつと残念に思った。明日はもつと早く起きないと……そう思った瞬間、ああ、と翔は落胆した。

“何言ってるんだ僕は……昨日の晩泊まったのだって予定外だったんだ。今日もって訳にはいかないよ”

内心の忸怩^{じくじ}たる思いが表情に出てしまったのだろうか——翔は、少し心配そうに葵が自分を見つめていることに気が付いた。

「どうしたの？」

「いえ、詰まらないことです」

「本当？」

容赦なく切り込んでくる葵。

翔は一つ判ったことがあった。葵は、自分に納得が行くまで追求する性格をしているということだ。

この場合も、お茶を濁す様なことをいえば、返って深みにはまるだろう。ここは、正直に言うしかないが、有りの儘に言うのも恥ずかしい。

「これからのことを考えていました。どういう方針で行くのか、何か起きた時の対応はどうするか、そんなことです」

少し脚色する。これなら、へんな話じゃないだろうと翔は考えた。

「難しいことを食事中に考えてると消化に悪いぞ」

混ぜっ返すリュオン。

「・・・そうね。朝食を食べた後、三人で話し合いました」

「はい。お騒がせしました」

「シヨウは生真面目だなあ」

パンを飲み込みながら、リュオンが笑って言った。

昨日出会ったとは思えないほど、この場にとけ込んでしまっている。

信頼出来る相手なのかなあ、と思いながらも、翔は朝食に専念することにした。

「さて、方針を話すでしょうか」

朝食後。居間のソファに深く腰掛けると、徐にリュオンが口火を切った。

「杯について、知っていることを離して欲しいのだけれども」

「そうだな。そいつは“バ克蘭漠羅爾の神杯”って呼ばれている。強大な魔導の力を秘めているが、単体ではあまり使い道がない」

「単体？ それじゃ、他にもこんな魔法の道具があるんですか？」

「ああ。その杯の他に“護符”が存在する。護符と一緒に使って、初めて杯はその真価を発揮するんだ」

「どんな力？」

「世界をも変えてしまう、強大な力さ。到底、人が簡単に扱えるものじゃない」

「・・・そんなものが、なんで僕たちの所に現れたんですか？」

翔は、意識的に“僕たち”と言った。実際のところ、杯は葵の所に現れたのだ。だが、そう言うと、まるで葵のみに杯が存在する責任があるように聞こえてしまうのではないか。だが、それはリュオンの次の言葉で考えすぎだと判った。

「アオイやシヨウに魔導的な力が無い以上、誰かがお前達の所に送ってきたと考えるのが道理だろうな」

「それが・・・あの少女？」

「ああ。そう考えるのが自然だ」

「金杯を送ったのが、葵先輩が声を聞いた少女だとして・・・どうしてそんなことをしたか、という疑問が残ります」

「要はその点だ。そこところが判明すれば、“破滅の騎士”（D READ KNIGHT）がこの世界に現れている事も説明するだろう」

「そうですね・・・それを調べる手立てに欠けるって思いますが？」

「オレには頼らないのかい？」

悪戯っぽくリュオンが笑っていった。

「その点は協力をお願いします」

わたしたちには無理だから、と葵が眉根を寄せて言った。

「じゃ、アオイたちはどうするんだ？」

「・・・翔くんと二人で、気がかりな点を調べます」

そう言つと、葵はADDのマニュアルを出して見せた。

STAGE # 3 . 5 に続く

STAGE 03 「開かれた、扉」 - SCENE #10 (後書き)

STAGE 3の最終回です。多少の動きは出てきたかなあ・・・
(希望的観測)。色々書かなければいけないことが多々出てきているのですが、消化するのに精一杯でなかなか先に進んでくれません。さて、次は幕間です。多少毛色の変わったものに・・・なるかな？ 何はともあれ、乞うご期待。

STAGE 3・5 「希望を、翔ばして」(前書き)

神杯を送った少女は、何を想うのか・・・

STAGE 3・5 「希望を、翔ばして」

■ 恵久美流公国／公都恵久美流／龍の館／龍の庭園

恵久美流公国。北西の海であるドラミディ大洋に面し、バクラニ漠羅爾旧王朝時代からの歴史を持つ古い国。バクラニ漠羅爾新王朝が成立し、その指導的な立場を新興の結都ケット太守領に譲ったものの、その勢力は相変わらずウエスタン、イースタン共に一目置かれる存在である。国名と同じ名を帯びる首府恵久美流は、現在では旧宗主国是居府をも凌ぐ繁栄にあった。東西の交流も活発化し、イースタンの主要国はここに大使を置く様になっていた。

恵久美流の王宮、『龍の館』は街の中心部に位置し、その背後にはバクラニ漠羅爾旧王朝の始祖龍王が作ったと言われる広大な『龍の庭園』があった。庭園の中には岩が溶けた様な構造物があるが、これは二千五百年も昔、神聖スール帝国との激しい魔導の戦いで溶けてしまった旧神殿跡と言われている。

「ふわあゝ」

おつきな欠伸あくびをすると、その小柄な少女は大きく伸びをした。夜の間、庭園に灯されていた魔法的な明かりが次々と消えていく。朝焼けに染まる靄の中、幻想的な雰囲気は辺りには漂っていた。

「朝早くって、気持ちがいいね。うるさく言う人もいないし。伸び伸びしちゃうな」

「本当に一人つきりって思ったのか？」

「え!？」

驚いて振り返ると、そこには仏頂面をした青年が一人。

「・・・全く。護衛されなきゃ危ない立場だって言うのに、ふらふらと一人で歩き回るなよ、お嬢」

「透眞！」

苦虫を噛み締めた様な顔付きに睨み付ける様な視線さえなければ、結構見られる顔なのだが――恵久美流公国エクスビル四審武官よんしんぶかんの一人である透眞トウマは、小石を敷き詰めた小道をざくざくと足音をたてながら歩いてきた。

「そんなこと、判ってる！ でも、この時間が“一番適して”るんだもの、仕方がないでしょ！」

「察して動く身にもなってくれ」

昨日の今日だから、せっかく暖かい寢床でゆっくり寝ようと思っていたのによ、とぶつくさ文句を言う。“お嬢”と呼ばれた少女は、それがポーズだと判っているのか、天真爛漫な笑みを浮かべて聞いている。

「で？ 旨く“観れた”のか？」

「うん。“杯”（CUP）は予定通り届いたわ。でもね、“護符”

（TALISMAN）がないから、旨く使えないと思うけど」

「それは仕方がないんだろ？ 二つ一緒になってしまったら、それこそ“彼奴等”の思う壺だ」

「そうなんだけどね」

お嬢は唇を噛み締めると、眉根を寄せた。

「判ってはいるんだけど・・・それでも、辛い事を押しつけなけ

ればいけないことが・・・ちょっと、ね」

透眞は無言で、頭二つくらい身長が違うお嬢の頭を軽くポンポンと叩いた。

「気に病むなよ。お嬢は、やらなきゃいけないことをやってるんだ。選択肢も無いしな」

「うん・・・ありがとう、透眞。あのね・・・」

その時背後からの殺気を感じて、透眞は咄嗟にお嬢の傍らから飛び退いた。

「な、何をする・・・って、お前達っ！」

そこには、恵久美流公国四審武官の残り三人、真砂貴^{マサキ}、華衣^{ケイ}、簾^{レン}が立っていた。ひゅんと一振りして、真砂貴が構えていた漠羅爾^{バクローン}の宝刀“彩雲”（さいうん）を鞘に収めた。

「おいおいおい！ 一体何を考えてるんだ！」

「お前が璃奈姫^{リナヒメ}に不埒な真似をしようとしているのを、真砂貴に止めて貰ったただけだ」

無言でいる真砂貴と呼ばれた青年に代わって、紅い長髪の娘が言った。

「華衣っ！ オレはだな、お嬢が一人で突っ走らない様に教訓を・・・」

「・・・教訓、欲しいのですか」

忍び寄る静けさの様な口調で言うのは、輝く様な銀色の髪を肩口

で切りそろえた娘だった。その顔にも笑みはない。

「簾、お前さんまで……」

「判決は？」

ざっと三振りの刀が引き抜かれ、地面を指し示した。

「う、わ……お、おい、お嬢！　ちよっとお前からも言っ
てくれよ！　オレはだな……」

「うゝん、どうしようかなあ……」

につこりわらうお嬢。冷や汗を流す透眞。じりじりと詰め寄る真砂貴、華衣、簾。因みに、かれらは恵久美流公国エウピルでも最も腕が立つ剣聖たちで、公主から“お嬢”こと、恵久美流公国の第一公女である璃奈姫の護衛を申しつかっていた。

「うふふゝ冗談冗談。みんなも刀を収めてね」

笑顔で言うお嬢に、三人は一礼して刀を鞘に収めた。

「みんなの力は、これから必要だから。これからが、本当に大変な事態になっていくからね……」

一転して大人びた口調で言うお嬢に、四審武官の四人はその表情を引き締めて頷いた……。

STAGE 4 / SCENE # 1 に続く

STAGE 3・5 「希望を、翔ばして」(後書き)

STAGE 3 / SCENE #3 にちらつと出てきました、“お嬢^{エクレル}”こと恵久美流公国の璃奈姫でした。葵に呼びかけてきた少女は、どうやらこの璃奈姫の様ですが、何の為に漠羅爾^{バクラニ}の神杯を葵に送ったのか、その意図とかは今後の展開で明確にされていくでしょう。あ、因みに恵久美流公国はオリエント風味の入ったアラビアンナイトの世界と思って頂ければ幸いです。名前とかに漢字を使っている点がオリエント風味ってトコですが(汗)。

それでは、次回からSTAGE 4「光と、舞と」です。光と闇は翔や葵にどんな影響を与えるのでしょうか。乞うご期待！

STAGE 04 「光と、舞と」 - SCENE #1 (前書き)

事件解明に乗り出した翔と葵は・・・

STAGE 04 「光と、舞と」 - SCENE #1

■ 葵自宅 ↓ UNO 学院

「それでだ。その書物をどうするんだ？」

葵あおいの手にあるAD & amp; Dのマニュアルを、リュオンは興味深そうに眺めた。

「何か手掛かりがないか、調べてみます」

「それは魔導書かなにかか？」

「魔導書って？」

葵とリュオンのやりとりを聞いていた翔しょうは、なんですか、それは？ とハテナマークを浮かべて尋ねた。

「ああ。魔導師が自分の研究を書き綴ったものさ。アオイもショウも魔導の力が無いのだから、漠羅爾バクラーニの神杯やオレを呼び出すきつかけになったのは、別の力が源となったと考えるのが普通だろう？」

「ああ、その前提条件ならば、確かにそう考えるのが普通ですね」

「で、どうやってそれを調べるんだ？」

「・・・学院に、行きます。」

「学院？」

耳慣れぬ言葉を聞いて、リュオンは葵を怪訝そうに見た。

「わたしたちが通っている、勉学を教える学舎まなびやです」

「なるほど。だが、そこにその書物を解析できるような設備とかがあるのか？」

「現場主義。」

「はあ？」

予期せぬ葵の言葉に、リュオンも翔もあっけにとられた。

「葵さん、それって・・・」

「全ての始まりは学院。そこに戻って、状況をもう一度詳しく調査する。どう思う？」

「い、いえ・・・手掛かりが少ない状況では、妥当な手立てかと・・・」

どうしたものか、言葉尻がビシバシ硬質化している葵に、翔は慎重な対応を試みた。

だが、無神経なもう一人の輩やかひによって、その翔の配慮も木っ端微塵に粉碎される。

「要は根拠はないが、カンって訳だな」
「・・・」

ジロリとリュオンを睨み付ける葵。

どうもこの二人、最初っから相性が悪そうだ。

普段は丁寧な葵も、リュオン相手だけは非常に不機嫌な口調で対応している。

「わたしたちの国には“急がば回れ”という格言があります」

「それを地で行くと？」

「そうです。」

葵は、これで議論は終わりとはかりにきっぱりと言いつつ、いわね、と翔に同意を求めてくる。いや、これまた選択肢のない選

沢なのだが。

「勿論です、葵さん。喜んでお供します」

速攻で頷く翔。今日、また一つ学んだことがあった。機嫌の悪い時の葵の取り扱いには慎重に——ってことだった。

「葵さん。彰^{あきら}と高国先輩^{たかくに}にも連絡しませんか？」

リュオンと別れた翔と葵は、学院に向かう路を歩いていた。先程から無言で何かを考えている葵に、翔は言葉を掛けるタイミングを量っていた。

どうも、葵の機嫌が悪い。そして、その理由が皆目見当も付かない翔には、とりあえず慎重に対応する以外に策が無かった。

「二人とも、心配していると思いますし、状況を説明した方が……」
「黙って。」

唐突にそう言うと、葵は翔の手を引っ張って人通りの多い本通から、人気のない脇の狭い路地に引き込んだ。

「あ、葵さん……」

小さく柔らかい手が翔の口を押さえた。しっ、と小さく言うと、葵は翔に角の向こうを指し示した。

“琉央^{るお}……”

翔が相手を認識したことを見取ると、葵は翔の耳元で呟いた。

「関連性がある、そんな気がするの」

確信は無いのだけど——そう付け加えた葵に、翔は黙って頷いた。いや、密着するように立つ葵の暖かみを感じて、不甲斐なくも硬直してカクカクと首を振っているだけの状態だったが。

「行きましょう」

囁くように言うと、葵は翔の手を引いて本通りにでた。そのまま、人混みの中縫って巧みに琉央を追っていく。

「あ、あ、葵さん……」

「黙って付いてきて。」

葵さんって、予想外に運動神経が良いんだ——啞然としながら手を引っ張られていく翔は、そんなとんちんかな事を思っていた。いや、翔がぼーっとしているだけで、多少の才覚が有れば、尾行も出来ることなんだろうが。

「学院に、向かってる……」

琉央の後を追って、翔と葵は駅周辺の繁華街を抜けた。周囲は住宅が多くなり、それにつれて人通りも少なくなっていく。

間違いない——琉央はUNO学院に向かっている。

住宅街が切れた先には、学院しか存在しない。それを見届けると、葵は足を止めた。

「この先は、一本道だから」

間違いようがないわ、と言う葵に、翔は小声で尋ねてみた。

「日曜なのに、学院に何か用があるんでしょうか？」

「理由はわからないけれど・・・」

口を濁す葵。だが、どこか思い詰めた様子の葵は、翔の手をぎゅっと握った。

「葵さん・・・」

品行方正・容姿端麗・頭脳明晰と欠点のない葵——たえ自分がいたとしても、実質的にはあまり役に立たなくても——大丈夫、僕が付いていますと伝えたくて。翔は自分からも、握る手にそつと力を込めた。華奢で小さな手——葵の手は、思ったよりひんやりと冷たかった。

住宅街が切れてから学院の正門までは並木道となっていた。ここは視界を遮るものが両脇の木々しかないので、少し距離を置かないと先に歩いている相手からはつきりと見られてしまう。そのため、住宅街のはずれで琉央が正門を入っていくのを見届けた後、翔と葵は学院までの最後の部分を足早に進んだ。

「まず最初に何処に行きます？」

「学部棟の、屋上」

「現場主義ってことですね、葵さん？」

そうねと、ちょっと笑って葵は答えた。その時。

「おや？ 三奈瀬君じゃないか」

「御殿山君?!」

エントランス・ホールを入ったところで、いきなり話しかけてきたのは御殿山貴人^{ごてんやまたかひと}。翔のクラスメイトだった。いつもの薄ら笑いを浮かべ、興味津々に翔と葵を見つめていた。

「へえ・・・三奈瀬君って、二年の神和姫先輩と親しかったんだ」

知らなかったなあと、とぼけた様な口調で言う。

「御殿山君。悪いけど、僕たち先を急いでるんだ。失礼するね」

行きましよう、と葵を促して立ち去ろうとしたところ、背後からたつぷりと毒を含んだ声が追っかけてきた。

「それにしても・・・三奈瀬君も気の毒だね。おかしな先輩につきまとわれて」

葵の歩みが止まると、僅かに躰を強ばらせる。それを目敏く見つけた御殿山はせせ笑った。

「おや、先輩。何か心当たりでもあるのですか?」

「御殿山君! 変な言いがかりは止めなよ!」

「言いがかり? 失礼だね三奈瀬君。大体君は、その先輩が文芸部で何をしたか知ってるのかい?」

「先輩が何をしたって言うんだよ!」

「盗作さ。」

「なっ……」

「賤しくも、物書きを目指している人が禁忌の盗作とはね。関係者一同はあきれ果ててるってさ。それに、その謝罪もしないで、逃げる様に文芸部を辞めていった——そうですよね、神和姫先輩？」

御殿山の言葉が、葵に突き刺さる。

無表情で俯いている葵を励ます様に、翔は手を強く握って言った。

「他人を讒言する様な話は聞けないよ。葵さん、行きましょう」

葵の手を引っ張ると、エントランス・ホールから歩き出した二人を、容赦ない声が追っかけてくる。

「事实は隠せないよ。三奈瀬君、僕からの忠告だよ。そんな先輩と付き合うのは止めなよ。そうじゃないと……」

一拍おいて、その致命的な言葉を投げつける。

「その、“魔女”に誑かされるよ」

何かがぶちつと翔の中で切れた。もう我慢の限界だ。拳を握りしめて振り返ると、御殿山が走ってリフトに乗るのが見えた。

「まてっ！」

「あっ、翔くん！」

葵の止める声を振り切って、翔は御殿山を追っかけた。

だが、寸前のところで御殿山の乗ったリフトの扉が閉まってしまった。

他のリフトは他の階に止まっているのか、エントランスにはいな

かった。

「くっ・・・だったら!」

猛然と、翔は脇の階段を駆け上がった。今の暴言を、絶対葵に謝罪させる――怒り心頭の翔は、それだけを思っていた・・・。

SCENE # 2 に続く

STAGE 04 「光と、舞と」 - SCENE #1 (後書き)

お待たせしました。STAGE 04の開始です。STAGE 01以来の、御殿山君の登場です。単発キャラかと思いきや、結構な悪役を張ってくれています(笑)。いきなりの自信に満ちた口調、いったいどうしたんでしょうかね? 謎の組織に改造手術でもつけたんでしょうか? その謎は・・・次回にご期待を。

STAGE 04 「光と、舞と」 - SCENE #2 (前書き)

葵の危機に、闇を切り裂いて現れたものは・・・

STAGE 04 「光と、舞と」 - SCENE #2

■ 葵自宅 ↓ UNO 学院

“ ふむ．．． ”

翔と葵と別れ、駅前の繁華街にやってきたリュオンは、何気なくブティックのショーウィンドーの前で立ち止まった。

自分の愛しの彼女にでも贈ろうかな、とでもいうように熱心に展示されている服を見ながらも、その意識は油断無く周囲に飛んでいる。

“ 付けられているか．．． ”

成る程、面白くなってきたな——そう思うと、不謹慎にも笑みが浮かびそうになる。

“ 人気の多いところでは、仕掛けては来まいが—— ”

その反面、周囲に人が多すぎるので、リュオンにも尾行してる相手が絞り込めていない。

さり気なく次の店に移りながらも、更に意識を飛ばす。
だが、相手もさるもの、なかなかしつぽを掴ませない。

“ やはり、誘い出さなければ駄目か ”

そうと決まれば躊躇する必要もない。昨日の公園、あそこがいいだろう。

彼女のプレゼントには見切りを付けたぜ、そんな風を装いながら

人の流れとは逆方向に向かう。駅前から離れる毎に人の数は減ってゆく。

“追っかけてきているか”

リュオンは、確かなプレッシャーを感じていた。
何者かは知らないが、間違いなく網に掛かった様だった。

“よし、このまま・・・”

そう思った時。不意に心に警鐘が鳴った。

相手が行動を起こしているのは、自分に対してだけなのか？

翔と葵の方は大丈夫なのか？

何か起きても、剣も魔法もからっきしの翔や葵では口くな対応も出来ない。

“止むをえないか”

悠長なことを言っていて、手遅れになったら意味がない。相手に構ってられる状況ではない。

次の瞬間、リュオンは全力で走り始めていた。目指すは、翔と葵が向かった学院だった。

「はあはあ・・・」

息が上がっている。

運動不足だと思いながら、翔は階段を駆け上がっていた。
リフトホールに入る度に御殿山が乗ったリフトの状況を確認する。

まだ、どの階にも止まっていない。

何処まで行くつもりだ？ 五階、六階、七階・・・リフトはどんどん上がっていく。

「一番上かつ!!」

十三階のリフトホールで確認した翔は、最後の階への階段を駆け上がった。

一体、御殿山は何をするつもりなのか？ そして、最上階である十四階のリフトホールに走る込むと――

「誰もいない?!」

リフトの扉は開いていたが、中には誰も乗っていなかった。

その時、ボタンと扉が閉まる音が響いてきた。

「屋上か!」

今の音は、屋上の鉄扉だった。その先は袋小路だ――息の上がる軀に鞭打って、翔は最後の階段を上って行った。

軋む音と共に、屋上に続く重い扉を開ける。強い風が髪を掻き乱していく。

果たして、御殿山は奥のフェンスの所に立っていた。大きく息を吸い込むと、翔はゆっくりと近づいていく。

「やあ、三奈瀬君。早かったね」

「・・・」

残りあと五歩のところで、翔は立ち止まった。

「御殿山君。何のつもりか知らないけれど、先程の言い方は容認できない。葵さんに謝罪して貰おう」

「謝罪だって？ どうしてだい？ 本当のことを言っ、何が悪いのかな？」

冷たい嘲笑を浮かべた御殿山は平然と言い切った。

「本当の事って何だ！」

「本当のことは本当のことさ。それに、そんなことに拘ったところで、もう手遅れだって思うけどね」

「な……んだって……」

「謝罪する相手がまだいればね、謝罪してもいいよ。フッフ、まあ見てご覧よ」

眼下を指し示す御殿山。ちらりと見下ろした翔の目に、信じられない光景が飛び込んできた。

「あ、葵さんっ！！」

フェンスを掴んで、翔は叫んでいた……。

翔が駆け上がっていった階段を黙って見つめた。

あんな中傷は、散々聞いていたものだ。悲しさを通り越して心が麻痺してしまっているのか、そんな讒言さんげんを聞いても、特に悲しみも何も感じなかった。

それでも——自分に代わって怒ってくれる翔の行動には、正直嬉しいと感じるところもあった。

黙って思いを巡らせていると、不意に一台のリフトがエントランス階に向かって下降してきているのに気が付いた。

「翔くん・・・？」

そんな訳がないと思ったが、自然と眩きが漏れていた。五階、四階、三階……。点滅するリフトの表示を見ると、なにやら胸騒ぎを覚える。

どうしてだろうか？

リフトがエントランス階に近づくにつれ、と思っていたと、鈴が鳴る様な到着音と共にリフトがエントランス階に到着した。ゆっくりと開いていく扉。そして、葵は驚きに目を見開いた。

「やあ、神和姫葵さん。このようなところで逢うとは奇遇だな」

そこに、先程からの胸騒ぎの正体が立っていた。

リフトから降りてきたのは、翔ではなかった。今最も逢いたくない人物——リフトの扉が開くと、そこには慇懃無礼な笑みを浮かべて琉央が立っていた。

「・・・」

その射るような視線を浴びて、自然と自分の躰が後ずさりするのを感じる。

躰が小刻みに震えている。

「いつもの気の強さはどうした？」

揶揄するように笑うと、一転酷薄な雰囲気纏う。

「折角呼び出した龍王と別行動を取ったのは、明らかなミスだな。
まあ、今となつてはいつでも良いことだが」

「どういう、こと」

葵は氣力を振り絞つて問い返した。

「君の存在が計画に支障を及ぼすのでね。だから、ここでその憂いを絶たせて貰う。Komme, die Geister der Finsternis・・・（闇の眷属よ来たれ）」

琉央の口から摩訶不思議な言葉が漏れ出すと共に、周囲に靄のようなものが漂い始めた。

ぞつとするような寒気に、心まで冷え込むんでいく。

「影が・・・」

葵は目を凝らした。錯覚ではない。靄の中に、何かが蠢いている。そこまで見れば十分だった。どんな愚か者でも、このままここにいたらどうなるか判るだろう。

身を翻すと、葵は走り始めた。

「逃げてても無駄だよ、神和姫葵さん。君はここで“彼ら”の贄になつて貰うのだから」

薄笑いを浮かべて、琉央は空中に不思議な印を綴ると、軽く右手を振った。それに呼応する様に、靄の中からゆらりと骸骨の群れが現れ、葵の後を追う。

「あつ・・・」

エントランス・ホールから走り出た葵は絶句した。

いつの間にか沸いてきたのだろつか——正門の方からも、そして左右からも、エントランス・ホールと同じ靄が沸き、骸骨がギクシヤクと歩きながら近づいてくる。

咄嗟に後ろを振り返るが、今出てきたエントランス・ホールからも骸骨があふれ出てくる。

左右を見るが、どちらの方向も、靄から現れてくる骸骨がいる。

“何処か、逃げるところは！”

必死で見回すが、既に完全に囲まれていた。

刃零れした剣や、折れかけた槍を手に、骸骨は無言で迫ってくる。振り返ると、エントランス・ホールの奥に冷笑を浮かべた琉央の顔が僅かに視界に入った。その時。

「アオイッ！！！」

校門の向こう、靄の彼方から、力一杯自分の名を呼ぶ声がする。

「リュオンっ！！！」

「アオイっ！　これを受け取れーっ！！！」

リュオンの叫び声と共に、靄を切り裂いて一条の閃光が葵の眼前の大地に突き刺さった！

「！！！！」

一瞬閉じていた目をそっと開いてみると——金色に輝く一本の剣が、自分の前の面に突き立っている。

「これは・・・リュオンの、剣・・・？」

何処かで見たことがある様な剣——ざわっと周囲を取り巻く骸骨に動揺が広がる。

「アオイっ！　心してその剣を取れっ！」

リュオンの言葉に促されるように、だが何かに導かれるように、葵は剣に手を掛けていた。

その途端、全身に電気が流れたような衝撃を覚える。ああ・・・と、葵は思った。この感覚は覚えている。何だったのだろう——そう、金杯が現れ、少女の声が虚空から聞こえた時に感じた衝撃に似ている——

『・・・』

何かが頭に響いてくる。激しい頭痛にも似た衝撃に視界が暗くなりながらも、必死にその言葉を聞き取ろうとする。

『・・・汝は・・・』

もう少し。もう少しで聞こえる——葵は、必死にその声に集中した。

『・・・汝は、我の主か・・・』

その言葉が認識された瞬間。葵の心の中で、今まで欠けていた何かがカチリと填る感じがした。

「然り。」

何の疑問も覚えることなく、葵はその言葉を肯定した。途端、手にした剣が目映いばかりの輝きを放った。突き動かされる衝動のまに、葵は周囲を切り裂くように剣を一閃させた。

『ドオオオオンッ！！！！！！』

凄まじいばかりの光の渦が、幾つもの輪となって周囲に広がっていく。そして、その光に触れた骸骨は、瞬時に霧散して行った。

「あ・・・」

躰から、力の悉くを吸い上げられる感じがして、葵は目の前が真っ暗になった。

最後に覚えているのは、遠くから自分の名を呼ぶ翔の声だった・・・。

「覚醒したというのか？　そうであれば、些か面倒な事になったな」

一瞬にして、呼び出した骸骨全てが浄化されるのを見た琉央は、自嘲気味に呟いた。

「いずれにせよ、今日は出直しだな。命拾いしたな、神和姫葵・・・」

「いや、楽しみが増えたと取るべきなのだろうな、と笑みを浮かべながら、琉央刃エントランス・ホールの影に消えていった・・・」

SCENE #3に続く

STAGE 04 「光と、舞と」 - SCENE #2 (後書き)

さて、今回葵が手にしたりユオンの剣は両刃の西洋式長剣（LONG SWORD）ですが、刀身の幅が普通より大分細くなっています。自重も見ただ目よりは軽めなので、打ち合うことさえなければ女性の力でも数合は振えるだろうと思います。柄は長めで、手が小さければ両手で握れそうです。末尾には大きな蒼い宝石がはめ込んでありますが、その自重から考えると、カウンターバランスの役目を果たしているかどうかは疑問です。

琉央ですが、なにげに悪役街道をまっしぐらですね。最初の現れ方からすると順当なポジションなのでしょうが（笑）。彼の、これからの活躍にも期待ですね。それでは、また次回の更新で。

STAGE 04 「光と、舞と」 - SCENE #3 (前書き)

翔とリュオンが駆けつけた時、葵は・・・

STAGE 04 「光と、舞と」 - SCENE # 3

■ UNO学院 / 正門前↓医療室

屋上からのその情景を見た時、心臓が止まる思いだった。黒い霧が校舎と正門の間に円弧状に取り巻き、その中心に葵さんあおいがいた。そして、その変な霧から先輩に向かってゆらゆらと出てくる影のよななもの——どう見ても、骸骨にしか見えなかった。

歩く骸骨？ 自分の目で見たものが信じられない。知らず知らずに、そんな訳がない、嘘だろう、と呟いていた。けれども——はっとした。そんなことをばけつと考えている時じゃない。

「葵さんっ！ 葵さんっ！！」

精一杯叫んでも、状況は刻一刻悪化していく。一刻も早く、葵さんの所に行かなければ。僕は、脱兎の如く走り始めた。

余裕も何もあったものじゃない。後ろで御殿山君が何か叫んでいたけれど、構ってなんていらなかった。屋上から走り出ると、運良くそこにいたリフトに飛び乗った。

「タルカーンっ！ 大至急エントランス・ホールへ！」

『リヨウカイイタシマシタ』

いつもは早く感じられるリフトの降下も、ひどくゆっくりに感じる。早く早く、と気ばかり焦る。

『えんとらんす・ほーるデス』

リフトの扉が開くと同時に走り出す。

校舎から走りでると、正門への通路に葵さんがいるのが見えた。

「葵さんっ！」

真っ青な顔をして、葵さんは地面に座り込んでいた。

いつもは底知れぬ深みを秘めた双眸が、虚ろに僕を見返してくる。周囲には、何も異常なものいなかった。あれほどいた骸骨を、葵さんが退治したっていうのだろうか？

「葵さん、大丈夫ですか！」

「シヨウ、慌てるな」

何時の間に来たんだろうか——リュオンが葵さんの隣に膝を付いた。

そつとその華奢な手を取ると、何かを感じ取る様にしている。

「・・・大丈夫だ。コイツを使っただけからな。力の粗方を持っていかけたんだ」

「力？ なんの事ですか？」

「力は力さ」

葵にあるとはなあ、と何気にリュオンは呟いた。その口調に、どこか引く掛かりを感じた。

「どういう事ですか？ それに、あの変な骸骨？ 骸骨でしたよね、あれは？」

「ああ。冥界からの不死者達さ。こんなところに、それも“虚無の霧”が真っ昼間に現れるとはね。相手も相当焼きが回っているのか・・・」

「冥界の死者・・・」

信じがたい事だったけれど、この目で見たのだから信じるしかない。

「驚いたか？」

「流石に・・・」

不安な思いが顔にでたのだろうか。リュオンは、ポンと僕の頭を軽く叩いた。

「心配するな。その為に、オレを呼び出したんだろ？」

「そうなんでしょうけれど・・・」

その時、葵さんが身動きした。

「葵さん、大丈夫ですか？」

「・・・翔・・・くん・・・」

「アオイ、気分はどうだ？」

「・・・リュオン・・・」

葵さんは辺りが眩しいかのように、何度も瞬きをしている。

「案ずるな、アオイ。その剣を使っただんで、ちよつと軀に負担が来てるんだ。少し休んでいれば元に戻る」

「・・・剣・・・？」

「そうだ。お前が振るって、あの骸骨どもを一掃したんだ」
「・・・」

葵さんは、また目を閉じた。
ちよつと話すだけでも、相当きついみたいだ。

「おい、シヨウ。お前達の“学舎”で、アオイを横にならせることが出来る場所があるか？」

「保健室がありますけど、開いているかどうか・・・」

「鍵でも掛かっているのか？」

「休日は、養護教諭の方がいないので、普通は閉まっています」

「鍵くらいならなんとでもなる。案内してくれ。今は、アオイを休ませることが先決だからな」

そう言つと、リュオンはそつと葵さんを抱き上げた。

こんな時なのに、“絵になるなあ”と思つた瞬間に、何故か胸がちくりと痛んだ。

「ありがとう。大分、良くなつたわ・・・」

ベッドに横になった葵さんの顔に漸く血の気が戻ってきたのを見て、漸く少し安心する。

「ゆっくり休め、アオイ。今のお前にはそれが必要だからな」

「ん・・・」

葵さんはリュオンに小さく頷くと、何か気が付いた様に周囲を見回した。

「ん・・・」

「ええ、保健室です」

先回りして言うと、葵さんは大きく目を見開いた。

「誰かに、開けて貰ったの？」

閉まっているはずだけれども——そんなアオイの疑問は、リュオンの事無げな一言によって解消された。

「鍵くらい、魔導でどうとでもなるさ。Aufschliesse
n（解錠）ってね」

「・・・魔導？」

「ああ。」

本当？ と見つめてくる葵さんに、僕は首を縦に振った。

「確かに、鍵は閉まってました。けれども、リュオンが一言何かを
唱えたら・・・」

「鍵が、開いた？」

「はい、その通りです」

そうだったの、と葵さんは小さく呟いた。

そして軽く溜息を付くと、黙って左手のひらを見つめる。

「動くか？」

リュオンの方をちらりと見ると、先輩は小さく頷いた。

二、三回手を握って見せると、不意に気が付いたように言った。

「あの剣は？」

「ここにある。」

リュオンが、ベットの傍らに立てかけていた剣を取った。
金色の鞘に収まった真っ直ぐな剣——リュオンに差し出されたそれを、葵さんは左手でゆっくりと掴んだ。

「アオイ。お前は、その剣に主として認められたんだ。魔導の力がないと、剣と“話す”事が出来ない。つまり・・・」

「・・・先輩には、その“魔導の力”があるってことですか？」

「そういうことになるな。」

「そんな・・・」

葵さんは、リュオンの言葉を黙って聞いていた。
その整った顔には、何の感情も浮かんでいない。

“葵さんはどう思っているんだろう？ 何を考えているんだろう？”

コチコチ、と壁に掛かった時計の音だけが響く。葵さんが押し黙ったままなので、リュオンも窓枠に寄りかかって、黙って外を見ていた。

「・・・あの・・・」

暫く沈黙が続いた後。漸く、葵さんが口を開いた。

「・・・主って？」

「簡単なことだ。その剣は、アオイを主と認めた。だから、その剣を振るえるのはアオイだけだ。他の誰も、もうその剣に触れられない」

「・・・どうして？」

「どうしてって言われてもなあ」

少し困ったようにリュオンは顎をさすった。

「それが運命でした・・・と言っても、納得しないだろうな？」

微妙に語尾を疑問系で言ったりリュオンに、葵さんは一回だけ首を縦に振った。何か、“早く答えなさい” って言ってる見たいに思えるのは僕だけだろうか？

「いいだろう。おれはな、ある時一つの予言を聞いた。その予言を話してくれたのは“夢見”の長だ。^{おさ}おっと、夢見って言うのは、先読みが出来る賢者だと思えばいい。」

「それで？」

「それで、だ。その賢者から、『何時か汝は必ず一振りの剣を預かる。その剣を、然るべき新しい主^{あるじ}に渡すまで、大切に持ち歩くように』ってな」

「それで、ずっと持っていたんですか？」

「ああ」

何かを思い出したのか、ちょっと嫌そうに顔を顰めるとリュオンは苦笑した。

「夢見っていうのはこええ連中でね。冗談が一切通じないのさ。おまけに、そいつ等の言葉は強制力まで持っていてやがる」

「逆らうと大変、ってことですか？」

「その通りだ、ショウ。よく判るな」

「それが判っても、余り嬉しくありませんが」

にやりと笑うと、リュオンは一転して真面目な表情で先を続けた。

「だがな、今は漸く持てるようになったただけだ。それも、一回振る

ええ、アオイの力を根こそぎ持っていく……」
「どうすれば、いいの？」

黙って聞いていた葵さんが不意に言った。

「幾つか方法がある。一つは、オレに魔導の特訓を受けることだ。
あとの一つがどうあれ、これは絶対にやって貰う」

「あとの一つは？」

「……“神”に会いに行く」

「えっ？」

これには、流石の葵さんも吃驚した。

「“神”って……」

「“神”は“神”さ。それ以上でも、それ以下でもない。それに、
逢えるか逢えないか、それも会いに行こうとする人次第だ。」

「謎掛けみたいですけども」

「似たようなもんだな。そんな時になったら、自分の目で確かめてく
れ」

これ以上の説明は無理だぞ、とリュオンは釘を刺した。

「……判ったわ。その時まで、この剣はわたしが預かるしかない
のでしょう？」

「そういうこった」

「ならば……」

止むを得ません———そう言った葵さんの表情は決意に満ちていた。

葵さんはリュオンの言う通り、暫く寝ているとまた動けるようになった。

自然に、三人で一度葵さんの家に帰ろうと言うことになった。

葵さんの駄の具合が心配なので、僕にも特に異論はない。

「ところで」

葵さんがリュオンに話しかけた。

「なんだ？」

「この剣——名前、あるの？」

「名前、か……」

ついに聞かれたか——そんな表情でリュオンは息を吐き出した。

「まあ、オレが言わなくても、何れ剣が自分で言うだろうしな」

「自分で？」

「ああ。魔導剣なんて、大体そんなものさ」

肩を竦めると。

「アオイ。その剣の名前はな……」

黙って、葵さんはリュオンの言葉を待った。そして、運命の名前が言葉にされる。

「……『FORTUNE』と言っんだ」

SCENE # 4 に続く

STAGE 04 「光と、舞と」 - SCENE #3 (後書き)

今回は初めての試みで、翔の視点から書いてみました。“初めて”と言つても、私のヘッポコ文章は一人称・二人称・三人称と入り乱れておりますので(汗)、『今更何じやい!』と言われてしまいそうです……。

葵がリュオンから渡された剣の名前が出ましたね。私の世界では、非常に有名な剣なのですが……まあ、おいおい、誰の剣か判明していくでしょう。

STAGE 04 「光と、舞と」 - SCENE #4 (前書き)

リュオンの話に、葵と翔は何を思っのか・・・

STAGE 04 「光と、舞と」 - SCENE # 4

■ UNO学院 / 医療室 ↓ 葵自宅

『FORTUNE (運命)』

その言葉を聞いた時、私の心の奥底に何かが触れたかのように感じた。

身を抱きしめて身を震わす私を見て、翔くんが心配そうに私の顔を覗き込む。

「葵さん、大丈夫ですか」

「・・・心配、ないわ」

自分でも、素っ気ない言い方だと判っている。他意は無いのだけれども——翔の隣を歩くりュオンがくっくく、と笑っている。疳に障る態度だ。

「何か？」

「なんでもないさ」

そんなに思わせぶりに笑っておいて、何でも無い訳がないでしょうが——そんな言葉を飲み込む。これが性格なのだから、ムキになっても仕方がない。今はそれよりも気に掛かることがあった。

「それよりも——“神”というのは？」

「興味があるのか？」

「・・・質問で返すのは、不作法ではなくって？」

「おっと。こいつは失礼」

仰々しく一礼する態度をあえて黙殺してあげると、リュオンは苦笑いして先を続けた。

「こつちの世界で、“神”と言う存在がどのように理解されているかは知らないが——俺が知っている“神”と言う存在は、“時の理^{ことわり}を超越した者”のことをいう」

「時間？」

「そうだ。生きとし生ける者全てに共通する絶対的な理^{ことわり}——それが“時”だ。俺の言う“神”とは、この“時の縛り”から逃れることが出来た全ての者を意味する」

「“全能の存在”という訳ではない？」

私とリュオンの会話を黙って聞いていた翔くんがぽつりと言った。

「あくまで俺の世界での理解さ。普遍的に全てがそうだと思うなよ、シヨウ」

「難しいですね」

「簡単に理解できるようだったら、世界は今頃“神”だらけになるさ」

そんな状況は願い下げだけだな、とリュオンは笑った。

この世界がそうじゃなくて良かったですよ、と翔くんも相槌を打っている。

何を二人でほのぼのとした雰囲気をつくっているのかしら。

「・・・それで？」

片眉を僅かに上げて見せると、リュオンはごほんと一つ咳払いをして本筋に戻った。

「うむ。大概の“神”は、我々“定命の者”には無関心だ。だが、中には毛色の違ったのもいる。残念ながら、そういう“存在”からの干渉は、殆どの場合干渉を受ける側にとって、不幸な結果に終わっていると言えるな」

「一切関わり合いにならないほうが、余程賢明に思えますが？」

「俺もシヨウの意見に賛成なんだが、今回はそうも言ってられん。まあ、心配するな。俺等が会おうと思っているのは、悪い相手じゃない」

「・・・心休まる説明だこと」

辛辣に聞こえるように言ってあげたのに、リュオンには堪えていないようだった。軽く肩を竦めると、だからな、と話を続ける。

「悪い相手じゃないんだが、その代わり簡単に会うことができないのさ」

「何か、会う為の条件でもあるんですか？」

「勿論さ、シヨウ。世の中には、“物事には釣り合う対価が必要とされる”^{ことわり}って言う理が存在してる。それを無視し、気にしない輩もいるにはいるが、そう言った手合いはどこかでその対価を払わされている。それも、普通払うよりも遙かに割り増しでね」

「ルールを破った場合のペナルティってどこの世界にもあるんですね」

「そうさ。だから俺等としては、きちんとその対価を払って、“会っ権利”を獲得しておく必要があるのさ」

「それは——どのような条件なの？」

返ってくるだろう答えの内容を予期しながらも、私はその問いを発していた。

「判ってるんだろっ?」

だから・・・私に、何を期待しているのか知らないけれど——その
の思わせ振りの笑みは止めなさい。私の苛ただしげな視線もなんの
その、リュオンは涼しい表情のままだった。

「はつきり言うとな——俺たちをその“神”の元に導いてくれる
のがてくれるのが、その剣だ。」

やっぱり、予期した答えが返ってきた。何かを感じさせてくれる
黄金の剣——袋に包まれて、手の中にあるそれを強く握りしめる。

「主^{あるじ}を得た今、その剣の力は解放されつつあるが、いまだ不安定だ。
剣にその力を取り戻し、この状況を打破しなければ・・・」

「・・・私たちに、未来はない——そう言う事ね」

リュオンの言葉尻を引き取ってあげる。

選択の余地がないことは、あの“金杯”が出現した時から薄々感
じていた。

いや、“既に選択は為されていた”という言い方をした方が正し
いと思う。本当の選択は、恐らく“あの時”に下されていたのだろ
うから。

「悪い。少し直接的に言い過ぎたか?」

「・・・気にしないで。その方が、迷いも消えるから」
「強いんだな。」

「凄いですね、葵さん」

「・・・」

私はそんなに強くはない。覚悟が来ている訳でもない。だから

翔くん、そんなに感心した顔で私を見ないで。私は、あなたにそう思われるような立派な人間じゃないのだから。

知らず知らずの内に、私は唇を噛んでいた。悪い癖だ。そんな私の頭を、リュオンがポンと軽く叩いた。

「あまり深刻に考えるなよ、アオイ。一人でやるって訳じゃないんだ。なあ、シヨウ？」

「勿論です！ 葵さん、微力ながら僕のことにも当てにしています。いい！」

「……でも……」

「俺のことも当てにしてくれていいぜ。大体な、今回の事が解決しないと俺は帰れないんだ。ちゃっちゃんと片付けるとしようぜ」

悩んでる暇はないぜ、と後押ししてくれるリュオン。お役に立って見せます、と励ましてくれる翔くん。私がどんなに捻くれていようとも、二人がいることがとても嬉しいという、今のこの感情は本物だった……。

SCENE #5に続く

STAGE 04 「光と、舞と」 - SCENE #4 (後書き)

前回は翔の視点からでしたので、今回は葵の視点から書いてみました。相変わらずのヘッポコ文章ですが、不出来な部分は度外視してお読み頂ければ幸いです。STAGE 4も中盤に差し掛かっています。これから、更に急展開で状況が進みます。刮目してお待ち下さい。

STAGE 04 「光と、舞と」 - SCENE #5 (前書き)

リュオンが感じた追っ手とは・・・

STAGE 04 「光と、舞と」 - SCENE # 5

■ UNO学院 / 医療室 ↓ 公園

「そのまま、話を続けて聞いていてくれ」

さり気なく言いながらも、心の中では舌打ちする。オレとしたことが、抜かってたぜ——しっかり付けられていたとはな。

おまけに、こちら辺は全く人通りがないと来ている。嬉しいこつたぜ——何時仕掛けられても可笑しくない状況じゃないか。

「二人とも、走るのは得意か？」

「僕は苦手じゃありませんけど……」

「大丈夫よ」

「そりゃ、心強いな」

「突然、どうしたんですか？」

「解説は後でな。アオイ、ここから一番近くて広い場所、知っているか？」

「……私たちが出会った公園。それが近いわ」

勘がが良いな、アオイは。皆まで言わなくても、今の状況を察してくれているみたいだ。

「そりゃ都合がいい」

アオイとは対照的に、シヨウは怪訝そうな顔をしている。まあ、シヨウは素直のところを取り柄だからなあ。

「二人とも。オレが合図したら全力で走れ。アオイ、その公園に向

かつて先導してくれ。」

「それって・・・」

「話は後でな。それっ！」

「えっ！」

オレの合図と共に、アオイが全力で走り始めた。なんだかんだ言
って、シヨウも間髪入れずに後を追って走る。それでいい。

周囲に気を配りながら、オレもアオイとシヨウを追っかけた。案
の定、先程から感じていた気配も追いかけてくる。

「シヨウ、アオイに置いていかれるぞっ」

驚いたことに、アオイは予想以上に脚が早かった。それに比べて、
シヨウはもう息が上がってしまっている。

「はあはあはあ」

「頑張れ！ もうすぐだ・・・と思う」

最後は小声で付け加えておく。土地勘がないから、おちおち気休
めも言えないぜ。気休めだから、効果も皆無——まあ、仕方がない
ことだが。

「翔くん！ 遅れないで！」

「は、はいっ！」

おお、凄いな。アオイの叱咤に、シヨウは顔を真っ赤に染めてこ
れまでの三倍のスピード（翔比）に増速したじゃないか。

人間、やればできるもんだな——って、感心している場合じゃな
かったな。

「もう少しだから！」

先頭を走るアオイも、流石に息が上がってきているようだった。先程で“力”のあらかたを持つていかれてることを考えると、華奢な軀のくせにここまで走れるアオイの潜在的体力は非常に高いものがある。

「その角を曲がれば！」

アオイ、シヨウ、そしてオレの順番で最後の角を曲がると、正面に件の公園があつた。

やれやれ、なんとか間に合ったか？

公園の入り口を通り抜け様に振り返ると、空中に“グリフ”（魔法印）を描く。少しだけ、持ってくれればいい。

「リュオン！」

「シヨウ、アオイを連れて下がっていてくれ。ちよいとお客があるからな」

「・・・手伝えることは？」

「剣を握って、待機しててくれ。すぐに出番が来る」

「わかったわ。翔くん、待ちましょう」

「は、はい」

アオイは状況が緊迫するほど、冷静になるようだ。

状況に付いていけなくて、慌て気味のシヨウを落ち着かせる手並みは大したものだ。

「来たぞ！」

ズウン、と鈍い音がして、公園全体が微動する。

即席版のグリフ（魔法印）を可能な限り強化すると、オレはアオイとシヨウウに向き直った。

「いいか、アオイ。お前だけがその剣を扱える。そして、その剣だけが『TOR』（門）を開くことが出来る」

「先程同様、力を込めればいいのね？」

「そうだ。目一杯剣に“想い”を込めてから抜いてくれ。そして、剣で“空間に門を切り開く”感じで振るうんだ」

「“想い”、ね」

「ああ、頼んだ。」

ズズウン、とまた公園全体が振動する。先程よりも揺れの度合いが大きい。

「リュオン！ 僕は何をすれば良いんですか！」

「いまのところは何も無し！」

「へ？」

「話は後だ！ 来るぞ！！」

ガギツ！ と言う嫌な軋み音を立てた後、公園入口のグリフ（魔法印）は粉みじんに消し飛んだ。

だが、既に次の一手を打っている。

「Allmaechtiger Herr（偉大なる王よ）、gib mir deine Kraft um den Boesen in distanz zu halten（邪悪を寄せ付けない力を与えたまえ）。Kreis gegen den Boesen！（破邪の円）」

光の輪が三人を取り囲む。

「アオイ、出来るか？」

「やってみる」

アオイは頷いた。剣を握る拳が込められた力に白くなっている。
流石に緊張しているんだろう。

「葵さん・・・」

心配そうなショウに一瞬笑顔を向けると、アオイはFORTUNE（命運）を引き抜いた。

SCENE # 6 に続く

STAGE 04 「光と、舞と」 - SCENE #5 (後書き)

何時もお待たせしてしまって恐縮です。今回は、リュオンからの視点となります。魔導も戦闘も全く素人の翔と葵にとって、斯様な修羅場の経験者であるリュオンの協力は欠くことが出来なくなりつつあります。不真面目そうですが、その実、非常になる兄ちゃんです（笑）。

STAGE 04 「光と、舞と」・SCENE #6 (前書き)

剣を再び手にした葵は・・・

STAGE 04 「光と、舞と」 - SCENE #6

■公園

圧倒的な力が流れ込んできた。眼前に輝く目映い光に目が焼かれる思いだった。

「アオイっ！ 気をしつかりと保て！」

リュオンが葵に叫んだ。

奥歯を噛み締めると、葵は手の中で暴れだそうとする剣の柄を、その両拳が白くなるほど力一杯握り絞めている。

「むう……」

リュオンは低く唸った。葵がリュオンに預けられた剣“Foutune”——その剣を抜くところまでは特に問題はなかった。

だが、その剣を使って“空間に扉を描く”ことを始めた瞬間、葵の手の中から剣が飛び出そうかとするように暴れ始めたのだ。

葵は必死に剣を押さえようとしているが、口々に鍛えていない非力な力では限界が訪れるのもほど遠くはない。

「予想はしてたが……」

予想以上に悪いぜ、とリュオンは呟いた。葵が押さえきれなくなったら——それは、考えたくもない結末だった。

「止むを得ないな。シヨウ！」

「は、はいっ！」

何の手出しも出来ず、ただ葵が必死に剣を押さえようとするのを見守っていた翔は、跳ね起きるようにリュオンに向き直った。

「手を貸して欲しいことがある。ちょっと、いや大分危険なんだが・
・やってくれるか？」

「葵さんを助けられるなら、なんでも！」

きっぱりと言う翔に、リュオンはにやりと笑いかけた。

「いい返事だ。アオイが剣を押さえるのを助けてやってくれ。出来るな？」

「やりますっ！」

「良い返事だ。アオイの手から、剣が飛び出さない様に押さえつけてくれ。いいか、“手の上から”だぞ。決して剣を直接触るなよ！」

「判りました！！！」

翔が葵に手を貸すのを横目で見届けると、リュオンは周囲に張った結界の強化に集中した。

先刻、公園の入り口に張った魔法印は崩壊する寸前だった。

葵と翔は、尚も剣を制御しようと必死になっている。

「今、二人の集中力が途切れたら一巻の終わりだな・・・」

魔法印も、強化したにも関わらず余り長くは持ちそうに無かった。
周囲は、既に嫌な気配に取り巻かれている——脱出など、検討すること自体が無意味だった。

「頼んだぞ、アオイ、シヨウ」

崩壊しそうになる魔法印クリフを維持しながらも、リュオンは薄く笑っていた。

その視線の先には、翔と二人で力を合わせて、アオイが剣で空中に扉の形をなぞろうとしている。

「葵さんっ!!」

「・・・翔・・・くん・・・」

蒼白な表情ながら、葵は剣を握って離さなかった。葵の手に自分の手を重ねた翔は、その手がどんどん冷たくなっていくのに戦慄した。

「くそっ!」

何とかしなければ、なんとか——空回りするだけの想いが、翔を焦らせる。遮二無二にやにや葵の手を握ってみたものの、それ以上どうしていいのか判らない。

「・・・翔・・・くん・・・力を・・・」

「力って、どうすれば良いんですか!!」

「・・・わたしを・・・想って・・・」

「想う・・・葵さんのことを想えば良いんですね!!」

辛うじて頷く葵。そんな葵を見て、いつもは優柔不断な翔も奮起した。

目を閉じると、精一杯葵の事を思い浮かべる。

無表情に近かった最初に会った頃、マニュアルを渡してくれたときの真剣な表情、少し笑ってくれる様になったこの頃、そしてリュオンとのやりとりで少し怒った様に顔を赤らめている時——色々な葵を思い浮かべている内に、心がだんだんと温かく感じる様になっ

てきた。

“ そうだ・・・ ”

感じる——冷たい、理知的な仮面の下にある、優しく暖かい心が。翔はゆつくりと目を開けた。

世界は、眩しいばかりの輝きで満ちていた。葵と翔が握る剣が白光を放っているのだ。

「行きます」

短く、しかしきつぱりと言うと、葵は一気に空間に扉の形をなぞった。そして次の瞬間。

「TOR!!!（召門）」

一瞬剣を懷に退いた後、葵は叩き付ける様に扉に向かって振るった。

『ドンッ!!!』

「でかしたっ!! 早く中へ跳び込めっ!」

「えっ?」

「・・・」

リュオンが叫んだ。空間に描かれた光の扉が一気に左右に打ち開く。公園の入り口に最後の魔法印グリフを描くと、リュオンは全力で葵と翔に走り寄ると、二人を抱え込んでその光の扉に飛び込んだ。間一髪、その後ろで空間を振るわす轟音と共に、扉が閉まった。

SCENE #7に続く

STAGE 04 「光と、舞と」 - SCENE # 6 (後書き)

リュオンは本来“戦士”なのですが、魔導も使える“魔導師”でもあります。公園の入り口と、公園の中で掛けたのは“対魔結界”(Protection Circle)で、と“聖域”(Sanctually)を併せたもので、悪意の有る相手を閉め出しますが、有る一定以上の圧力(物理的でも魔導的でも)を受けると崩壊してしまいます。リュオンが他にどんな魔導を使えるか、そして翔と葵は魔導を使えるようになるのか・・・今後ともご期待下さい。

STAGE 04 「光と、舞と」 - SCENE #7 (前書き)

琉央の甘言に操られた御殿山は、異世界への扉を開いてしまう・・・

STAGE 04 「光と、舞と」 - SCENE #7

■公園↓南の島？

「くくく・・・」

低い笑い声が漂う煙の間から聞こえてくる。乾いた靴音と共に歩いてきた琉央るおは、冷笑を浮かべると煙がまだ燻る公園を見回した。先程の轟音は、リュオンが公園の入り口に張った結界が力任せに吹き飛んだ時のものだった。

その衝撃は、公園入口から扇状に地面を灼いていた。

「旨く逃げたつもりか？　だが、それが間違いだと言うことを、じっくりと思い知らせてやるとしよう。」

光の扉が消えた空間を見据えて言うと、扉が消えた辺りの空間を手で二三度なぞる。

何も起きない。

僅かに首を傾げると、琉央は事投げに言った。

「向こう側から封印したのか？　小癪なことを・・・まあいい。手立ては幾らでもある。」

すつと手を振ると、背後から滑る様に黒衣を纏った人物が二人、滑る様に現れた。その二人に両側から抑えられているのは、ぐつたりとした御殿山ごてんやまだった。先程、学院のエントランスホールで翔に揶揄の言葉を投げかけていた御殿山が何故ここにいるのか？

ぐつたりとした御殿山の顔の前で、琉央が手をヒラヒラと振るうと、不意に目が開いた。

「こ、こは？」

「学院の近くの公園だよ、御殿山君」

「キミ、い、いや、あなたは・・・」

「二年の琉央という。よく知っているだろう？」

「は、はい」

「それはよかった。頭脳明晰で優秀な生徒である君が、友人を忘れるはずもないだろう？」

「もちろん、ですとも・・・」

にこやかに笑いかける琉央に、御殿山は引き込まれる様に頷いていた。

「優秀な君に、一つ手を貸して貰いたいことがある。一年の三奈瀬君、知っているな？」

「三奈瀬？ あ、ああ、知っています」

「君の好意を無にした、恩知らずなヤツだな？」

「そ、その通りです！ 折角、親切にもボクが翻訳ソフトを貸してやったのに・・・」

「それを無碍にも断った、許せない相手だな？」

「そ、そうです。許せないヤツだ・・・」

「君の親切心を理解しなかった三奈瀬君に、“お礼”をしてあげたいと想わないかね？」

「それができるのなら、勿論・・・」

「では、私に少し手を貸して貰えるな？」

「はい、喜んで・・・」

琉央の笑みが深くなると同時に、御殿山の目から光が失われていく。どこか恍惚とした表情を浮かた御殿山は、何時しか唯々諾々として琉央の言葉に頷いていた。

「結構だ。それでは、御殿山君。君の卓越した力を使って、この空間に存在する“門”を探し出してくれ」

「・・・門・・・？」

「そうだ、門だ。優秀な君なら簡単に出きるだろうが、手をこまねいて見ているのは如何にも友達甲斐のないことだ。そうだな、君にこの宝錫を貸してあげよう。君の卓越した才能が更に高められるぞ」

「あ、ありが、とう・・・」

既に御殿山は呂律が回っていなかった。両手で琉央に渡された鈍く光る金色の宝錫を持つと、酔ったような足取りで公園の中を彷徨って行く。そして、在る地点でピタリと止まると、眼前の空間を手にした宝錫で一突きした。

途端――

『グ・・・ワ・・・ギッ!!』

何かが裂ける様な鈍い音がすると門の片扉がへしゃげた様に開け放たれてしまっていた。

「お見事、御殿山君」

既に応える力も使い果たした御殿山は、木偶の様に地面に倒れ伏した。

そんな御殿山を一別もせず、琉央は余裕の冷笑をその端正な顔に浮かべながら、開かれた扉に近づいた。

「ここは・・・」

翔はゆっくりと目を開けた。

頭上に広がるのは真っ青な空。

目に沁みるほどの青さをぼんやりと見てみると、間断なく響く音が耳に入ってくる。

「なんだろう？」

音のする方に首を曲げてみる。痛い——寝違えでもしたのか、首を回すのがとんでもなく辛かった。それでも、漸く顔を横に向けると、真っ白い砂浜に寄せては返す波が見えた。

いや、それだけではない。波打ち際に誰から倒れていた。

誰だ？

低血圧の寝起きの様に、はつきりしない思考が結論に辿り着いた時、全身に電気が走ったかの様に飛び起きた。

「葵さんっ!!」

首が痛かろうが躰が軋もうが、翔は構っていられなかった。全力で葵の元に走り寄る。

「葵さん、葵さんっ!!」

思わず、肩に手を掛けて揺すぶってしまう。自分の乱暴な行為に、はっとして翔は手を離れた。

そんなこんなで、翔はいつの間にか葵が目覚めていることに気が付くのが遅れた。

「ああ、どうしよう! 僕が優柔不断に振る舞ったお陰で、大切な

葵さんがこんな目に！ ああ、神様仏様！ どうか、葵さんを目覚めさせて下さい！ 南無八幡麗禰大権現さまあ・・・」

どうしよう、どうしよう、どうしよう・・・と呪文の様に言う翔に、葵は不思議そうに聞いた。

「・・・何をどうするっていうの、翔くん？」

「え？」

翔は驚きのあまり、そのまま硬直した。

「翔くん、大丈夫？ どこも怪我をしていない？」

華奢な白い指先が、そつと翔の額に触れた。

その深い黒曜石のような双眸がじつと翔を見つめる。

「ひやあああつー！」

翔は飛びす去った。唐突に叫ばれて、葵は怪訝そうな表情を浮かべた。

「い、いえ、あの、あは、あははは、何でも、ええ、何でもありません、いやほんと」

「翔くん・・・？」

“び、びっくりした”

“第三种接近遭遇”を身をもって体験した翔が心を落ち着かせるまで、暫しの時間が必要だった。

「リュオンは、何処に行ったのかしら」

「一緒に“光の扉”を潜った事は覚えているんですが……」

葵は口元に手を当てると、思案顔になった。

「葵さん、何か覚えてますか？」

「……そうね。私たちを抱えて一緒に扉に入ったでしょう？ リュオンも、ここに跳ばされたと考える方が自然だわ」

「探しましょうか？」

「そうね。でも、別れて行動するのはよしておきましょう。探す効率は悪いけど、ここが何処だか検討も付かない以上、注意するに越したことはないわ」

「賛成です」

「じゃ、まずは浜辺ね。見通しの良いところから、左右を探してみよう」

「はい」

今居るところは、少し湾曲した湾の奥だった。白い砂浜の幅は比較的狭く、波打ち際から生い茂った熱帯雨林まで十メートルほどしかない。その白い砂浜を、葵と翔は連れだって歩いた。

意識的に、翔は熱帯雨林側を歩く様にしていた。気休めかも知れないかもしれないが、海側の方が安全だろうと思ったからだった。湾を半周したが、リュオンの影も形も見えない。

「いませんね」

「ええ……」

歩いてきた方を振り返ると、まっさらな白い砂浜に二人の足跡だけが残っていた。

「森に入るしかないわね」

気が進まないけれども——形の良い眉を寄せて、葵は溜息を付いた。

「置かれた状況が、皆目も見当が付かないというのは、とても不安だけれども・・・」

「そうですね。ここにいても、何の進展もないでしょうし」

「私もそう思うわ。森に入れそうな場所を探してみしよう」

踵を返すと、葵は来た路を戻り始めた。慌てて翔も後を追った。密林に切れ込みを探しながら、二人は黙って歩いた。サクサクと砂を踏む音に、寄せては返す波の音がハーモニーを奏でている。

「葵さん、その剣ですが・・・」

「どうかした？」

「いえ、重くないのかなって・・・」

翔は、葵が右手に持った長剣を見つめていった。

「重くはないわ。それに、不思議と手に馴染んでているの」

「そうなんですか？」

「ええ。まるで、この剣を昔から持っていた様にも感じるわ」

錯覚なのでしょうけれども——そう言うと葵は薄く笑った。だが、翔には葵自身も何処か確信が持てない様な、そんな響きをその口調に感じていた・・・。

SCENE # 8 に続く

STAGE 04 「光と、舞と」 - SCENE #7 (後書き)

葵と翔の二人は、葵自身が開いた“門”を通って異世界に足を踏み入れました。その“門”を開いたのは、リュオンから渡された不思議な宝剣“FOUNTUNE”です。葵自身も、この宝剣を急速に使いこなせる様になってきています。葵の身に、一体何が起きているのでしょうか？ その答えは、次回に乞うご期待！

STAGE 04 「光と、舞と」・SCENE #8 (前書き)

ここは何処だろう？ 不思議な場所で気が付いた翔と葵は・・・

STAGE 04 「光と、舞と」 - SCENE # 8

■南の島？

「葵さん、ここからなら入れるんじゃないですか？」

翔が指さす先を、葵は注意深く観察した。下生えは濃いものの、僅かに隙間があつて通れないこともなさそうだ。

「・・・そうね。入れそうだわ」

「それじゃ、僕が先に行きますね」

「えっ？」

翔は手近に落ちていた木の枝を手にとると、葵が反論する前に森に分け入ろうとしたが、葵も簡単に納得する様な性格をしていない。

「翔くん。わたしが先に行く方が良いと思うけど？」

「いいえ。現状では、僕の方が葵さんよりも対応力に劣っています。だから、僕に出来ることをやるだけです。僕に出来ること——それは、葵さんがその剣で対応する時間を稼ぐことです。その為には、葵さんは先頭に出ない方が良いと考えました」

精一杯、不敵に見える様に笑って翔は言った。本当の理由は別の所にあるのだが、それを言う訳にはいかなかった。葵は暫し眉根を寄せて翔の提案を考えていたが、やがて溜息を一つ付くと言った。

「・・・判ったわ。」

「じゃ、行きますね！」

翔は明るく聞こえる様に言うと、足下を出来るだけ掻き分ける様にしながら、森の奥へと歩き始めた。

“ふう……”

翔は葵が賛成してくれたことに、心の中で安堵の溜息を付いていた。先程は理由を付けて葵を説得したが、実際の所は女の子である葵を先に立たせることなど、翔には到底受け入れ難いことだったからだ。もつとも、気丈な葵のことだから、あからさまに“弱い者”扱いしたら、絶対に翔の提案を受け入れてはくれなかっただろうが・

暫く、無言で二人は森の中を歩いた。緑の中、時折木の間から差し込む日差しが目眩しい。

「……何か、信じられないですね」

独り言でも言う様に、翔はぼつりと呟いた。

「一昨日までのことを考えると、ここにいること自体が夢を見ている様に思えます」

「無理はないわ。こんなこと、誰が想像できて？」

「そうですね……」

翔は言葉尻を濁した。翔にとって、この事件をきっかけとして葵と親しくなれたことは嬉しいことなのだが、今陥っている状況を考えると、手放しでは喜べなかった。

「ファンタシイ小説などを読んで、“非日常”には憧れていたはずなのに……」

「そうね……」

そんな翔の心を感じ取ったのか、葵は優しく諭す様に言った。

「“非日常”というのは、別の世界に行ったり、何か不可思議なことが起きたりするだけの意味しているのではないと思うの。その人が、望む時に望む様に自由な選択出来ないという状況も、一種の“非日常”じゃないかしら」

「……自由な選択が出来ないことが……“非日常”？」

「そう。でも今の私たちには、少なくとも“選択する余地”は残されているでしょう？」

「……はい……」

「だから、私たちは“別の世界”には来ているものの、特に深刻な“非日常”に陥っている訳でもないと言えるわ」

「別世界に来ていても、ですか？」

「ええ、そうよ。」

思わず振り返って見ると、安心させる様な葵の笑みにぶつかった。葵の言う“非日常”の定義を理解するのは今一難しかったが、翔は緊張した気分が大分ほぐれる感じだった。

“そもそも葵さんは、これを意図していたのかも知れない”

再び下生えを掻き分けて進みながら、翔は小さく笑みを浮かべていた。こんな状況でも、相手の精神状態を考えて、きちんと対処してくれる——やっぱり葵さんは頼りになるなあ、と翔は思った。

それは唐突に起こった。下生えを掻き分けていく作業の繰り返しで、集中力が途切れてきたのも一つの原因だったのだろう。

「あつ！」

踏み出した先には、地面がなかった。いや、正確に言うならば、突然急な斜面となっていたのだ。翔は脚を取られて、その急斜面を滑り落ちていた。

「翔くん！」

咄嗟に、葵も翔の後を追った。無謀にも見える行動だったが、ここで翔と離ればなれになるよりはマシ、と咄嗟に判断した上での行動だった。

ザザザッと滑り降りた二人は、最後の二、三メートルを一気に転落した。

「ぐっ……」

地面に叩き付けられた翔は、息が止まる思いだった。一瞬間を置いて、隣に葵が落ちてくる。

「あ、葵さんっ！」

翔は咄嗟に手を伸ばして、葵を受け止めようとする——が、それを見るも無惨な結果に終わった。

「痛った」

幾ら葵が軽いとはいえ、勢いを付けて落ちてきた下敷きになるのは洒落にもならない。目の前に星を散らしながら、翔は暫し地面にばったりと倒れていた。

「ごめんなさい、翔くん・・・」

すぐ近くに葵の声を聞いて、とりあえず翔はそつと目を開いてみた。深い黒い双眸が、翔を心配そうに見下ろしていた。

「あ・・・おいさん、大丈夫でした？」

「ええ。幸い、翔くんが受け止めてくれたから・・・」

「葵さんが無事で良かったです」

「ごめんなさい、迷惑をかけて・・・」

「いえ、元はと言えば、僕が不注意だったせいですから」

こんな時にこそ、オトコノコにはデフォールドで備わっている“やせ我慢”の技能を活用する時だった。ご多分に漏れず、翔もその技能をフルに生かして、“ノープロブレム”とばかりに、笑みを浮かべて見せた。

「無理をしないだね」

もつとも、折角のの技能も、聡い葵には見抜かれてしまっている様だったが。誤魔化す様に咳払いをすると、翔は落ちてきた斜面を見上げた。今いる場所は、どうやら森が陥没して穴に成っている様な場所だった。

「結構、上までありますね・・・」

見上げると、陥没の上の縁までは優に二十メートル位はあった。

「登るのは、かなり大変そうね」

「そうですね・・・」

「でも、登らなくても良いかも知れないわ」

「え？」

「翔くん、あれを見て。」

翔は息を飲んだ。翔と葵が滑り落ちてきた斜面とは反対側には、崖に彫り込まれる様に埋め込まれる様にギリシャ風神殿の様な石造りの建造物が立っていたのだった・・・。

SCENE #9 に続く

STAGE 04 「光と、舞と」 - SCENE # 8 (後書き)

お待たせ致しました。 幻界創世記 4 - 8 をお送りします。 見知らぬ島で気がついた翔と葵ですが、取るも取り敢えず、周囲の探索を始めます。 一体、ここは何処なのでしょう。 また、一緒に“扉”を潜った筈のリュオンは何処に行ったのでしょうか。 その謎は・・・
乞う次回。

STAGE 04 「光と、舞と」・SCENE #9（前書き）

神殿の前に立つ翔と葵。果たして、ここに来のは必然か、否か・・・

STAGE 04 「光と、舞と」 - SCENE # 9

■南の島？

「あれは・・・何でしょうか？」

少し惚けたように言う翔に、葵は眉根を寄せて思案する。

「神殿、の様に見えなくもないわ」

「神殿？　じゃあ、ここがリュオンの言っていた、“神”に呼ばれている場所——そう取るべきですか？」

「断言はできないけれども——何事も偶然と取るか、必然と取るかで、私たちの置かれた状況も変化する・・・」

「葵さんは、どちらだと思えますか？」

「ここに来ている事が必然だと考えれば、これも必然ね。」
「・・・」

「普遍的に言くと、“神さま”は万能でしょう？」

「故にこの程度は、不思議でもない、と？」

「ええ。」

「リュオンは“時を超越した存在”と言っていましたから、僕たちの概念で言う“神”とは違うのかもしれない」

「神学的には差があるのでしようけれども、“超越している”と言う点から考えると、私たちにとっては差はないわね」

「そうですね。でも、そうであっても、現実に目の前にすると、信じがたいですけど」

如何にも年代を経たような石造りの建造物——確かに、旧時代の冒険映画で見た、中東か何処かの神殿に見えるな、と翔は思った。

「入ってみましょう。」

きっぱりと言うと、葵は一步踏み出した。いつの間にか、順序が逆転してしまっている。少し情けなく感じながらも、翔は後に続いた。

円柱の立ち並ぶ神殿正面の真ん中に、大きな入口があった。ここに入ると、両側に円柱が並ぶ大きなホールが奥へと続いている。

「薄暗いですね」

目を凝らしながら、翔は奥の方を伺った。だが、闇に包まれて杳としてしれない。

「明かりが必要ね。」

その葵の言葉に反応するかのように、葵が手にした剣——フォウチューン——が光り始めた。

「えっ？」

「葵さん、剣が光っていますよ！」

「何も、していないのだけど……」

二人の驚きを余所に、フォウチューンはその名にしよう黄金色の輝きを増していくと、程なく辺りがある程度識別できる光度となった。

「便利……と言っていいんでしょうか？」

「今は、有り難いと思いますよう」

ね、と微笑む葵に、翔も笑み浮かべて頷いた。

フォウチューンの輝きを頼りに、翔と葵はゆっくりと先に進んだ。しばらく行くと、正面に壁が見えてくる。どうやら、広大なホールもここで終わりのようだ。

「行き止まりですね」

「扉も何も、無いみたいだけれども・・・」

その葵の言葉が発されると同時に、音もなく壁の一部に黒い入口が現れた。思わず、顔を見合わせる翔と葵。

「これって・・・」

「招かれている、ようね」

でも、不思議と厭な感じは受けないから、と葵は言った。

「それなら、先に進みましょうか」

「ええ。ここまで来のなら、最後まで行ってみましょう」

明快な葵の言葉に、翔はおや、と思った。斯様な事態にあっても、葵は自分の感覚を信じて、冷静沈着に物事を進めている。ぽっかりと壁に開いた入り口は、如何にも薄気味悪く思えるのだが――葵の、剛毅とも言える行動に、翔は華奢な外見で判断してはいけないなあ、と自分の認識を改める思いだった。

入口の先は、下りの階段となっていた。緩い傾斜の石段が、地の底へと続いていく。

「どこまで深く潜るんだろう・・・」

ふと漏らした翔の呟きに、葵はちらりと肩越しに振り返った。

「・・・怖い？」

「えっ？ えっ！ いえ、怖いだなんて!!」

己が名誉の問題とあつて、翔は必死に否定しようとするのだが、葵はフッフ・・・と笑うばかりで、相手をしてくれない。

「葵さ〜ん、酷いですよオ」

「・・・」

「葵さ〜ん」

「・・・」

「葵さ・・・」

「静かに。何か聞こえるわ」

翔を制すると、葵は立ち止まって耳を澄ませた。はっとなった翔も、身動きせずに必死に音を拾おうとする。

「・・・水音？」

「・・・はい、僕にもそう聞こえます」

「先に行かなければ、判らない・・・」

「どの道、一本道です。行ってみましょう」

「そう、ね」

気を取り直して、二人はまた歩を進めた。水音は、だんだんと大きくなっていく。途中、何度か立ち止まって音を確認しながら、慎重に道を辿る。そして、更にしばし進んだ後。唐突に葵が立ち止まった。

「翔くん、先が明るいわ」

「え？ あ、本当だ」

葵がフォウチューンを鞘にしまい、その黄金の輝きが無くなると、進行方向の先の方が仄かに明るい事がはっきりと判った。

「終着点、でしょうか？」

「今はまだ、どちらとも言えないけれど・・・」

でも、用心に超した事はない、と葵は結んだ。翔に異論があるはずも無く、葵の言葉に大きく頷く。

先程以上に慎重に時間を掛けて、二人は階段を降り続けた。しばらく行くと、階段はお終いになり、その先はアーチウェイになっていた。水音と明かりは、そのアーチウェイの向こうにあった。二人は、最後の数段手前で足を止めた。静かに集中し、何かを感じ取るうとする葵を、黙って翔は見つめた。

“葵さんは、先程『厭な感じは受けない』と言ってたけど——僕には、さっぱりだなあ”

自分は徹頭徹尾一般人なのだろうと思うと、翔は安心する反面、少し悲しくも感じていた。何せ葵の場合は、いきなり無から空中に生じた金杯（リュオン曰く、漠羅爾の神杯）の上に、然るべき人からリュオンが預かっていた黄金の剣（リュオン曰く、宝剣フォウチューン）もある。その剣も、ただ持っているだけじゃない——使えてしまっているのだ！ どう考えても、今の自分は葵のお荷物かもしれない——そう思うと、がっくりくる翔であった。

「翔くん？」

はっと我に返ると、いつの間にか葵がじっと翔を見つめていた。

「・・・何か、心配事？」

「いえ、特にありません！」

本当のところが翔に言えるはずもなく、慌てて誤魔化すと逆に葵を促した。

「葵さん、先に行きましょう」

「・・・ええ」

くすりと笑みを浮かべる葵に、翔は内心を見透かされた思いで、顔が赤らむのだった。

SCENE # 10 に続く

STAGE 04 「光と、舞と」 - SCENE #10 (前書き)

神殿の奥で、翔と葵がみたものは・・・

STAGE 04 「光と、舞と」 - SCENE #10

■南の島？／神殿？

アーチウェイの向こう側は、広い空間となっていた。正面には大きな円形の泉があり、その蒼い水が光を放っている。

泉の奥は、何段もの滝となっていた。先程耳にした水音は、この滝の流れる音だった。

その泉の辺で待っていたのは、見知った人物だった。

「よう。遅かったな。」

「リュオン！」

「リュオンさん！」

驚く葵と翔に、その金の戦士はにやりと笑った。

「ま、無事にたどり着けてほっとしたぜ。何分、シヨウとアオイが来るのを手伝うのは“ルール違反”になるからな。」

「何ですか、その“ルール違反”って？」

「字面通り、ルールに違反するってことだろ？」

おいおい、子供でも判るぜ、と呆れたようにリュオンは肩を竦めた。

「そう言うことを聞いているのではないわ。」

「葵さん・・・」

眉を寄せた葵は、リュオンに鋭い眼差しを投げ掛けた。

「聞きたいのは、“誰の”、“何の”、“何時の”理に違反して
いるのか、ということよ。」

「それも話せない、と言ったら？」

「・・・帰りましょうか、翔くん。」

それならば結構です、とばかりに昂然と胸を張り、翔の手を取る
と葵は踵を返す。

やれやれ、と肩を竦めてリュオンは苦笑した。

「相変わらず短気だな、アオイは。判ったよ、ネタ晴らしをしよう。」

出番ですのをお願いします、とリュオンが宣言するように言うと、
唐突に目映いばかりの光が、上方より差し込んできた。

それは^{あたたか}恰も光で出来た柱のように、円形の泉を取り囲む。

唐突に、泉の中央が盛り上がると、凄まじい勢いの噴水が巻き起
こった。

「な、何ですか！」

葵の手を無意識に握りしめて、翔は叫んでいた。

葵も目を見開いて、驚きの表情を浮かべている。

「お出ました。」

短くりュオンが言うと同時に、噴水が花開くように七つに分かれ
ると、その勢いが弱まった。

そして、その噴水の中央に、一人の女性が静かに立っていた。長
い銀の髪は足下に広がり、その鮮やかな碧の双眸には、人知を越え
た知恵の輝きが宿る。完全な造形の完全な美——その容姿は、明ら

かに定命の者とは異なっていた。

「ようこそ、神和姫葵。

ようこそ、三奈瀬翔。

ようこそ、この世の彼方の島へ。」

天井の旋律のようなその声は、翔と葵の心の琴線を揺らした。

「あなた方を待っていました。わたくしが、知恵の女神です」

STAGE # 4 ・ 5 に続く

STAGE 4・5 「それぞれの、想い」

■ 恵久美流公国／公都恵久美流／龍の館
エクレル

『ゴオオンー!!』

壮麗な銅鑼の音共に、重々しい扉が左右に開く。爽やかな涼風と、水のせせらぎが耳に心地よい。中央の噴水の後ろには大きな絨毯がひかれており、一団高くなった奥津城に置かれた玉座には二人の人物が座っている。

「おお、姫よ」

駆け込んできた、と形容するのが相応しい速度で飛び込んできたお嬢こと璃奈^{リナ}姫に、立派な顎髭を蓄えた人物が口を開いた。風貌は厳しいものの、その両眼には優しさが溢れていた。

「おはようございます、お父さま」

「おはよう、姫よ」

多少、いや多分に親莫迦気味の恵久美流^{エクレル}宗主が笑顔で朝の挨拶をするに次いで、少し小さめの玉座に座った貴婦人が笑みを浮かべて言った。

「おはよう、璃奈」

「おはようございます、お母さま」

その貴婦人こそ、恵久美流^{シイマ・エクレル}宗主の奥方であり、「西方の至宝」と呼ばれる優しい賢夫人、詩真・恵久美流であつた。璃奈に似た、そ

れでいて落ち着きと包容力を兼ね備えた優しいな雰囲気纏っている。

「朝からどうしたのですか？」

娘の行儀に微かに顔をしかめてみせながらも、やんわりと聞く。

「お父さま、お母さま。“杯”を旨く送れました！」

「おお、そうか！」

思わず立ち上がりかけて、妻にちよいと引き戻される恵久美流宗主。ウォッホン、と取り繕うように咳払いをすると、璃奈に先を即した。

「“杯”は確かに、“向こう”に届きました。受け取った方——どうも、女性のようですが——とも、少しですが話すことが出来ました」

「そうか……。最初の段階としては成功と言う訳だな」

「はい、お父さま。けれども、これで安心は出来ません。強い……いえ、非常に強い悪意も感じました。受け取った方の安否が心配です」

「確かにな……。さすれば、どうすればよいと思う、奥よ？」

宗主は何時もの通り、傍らに座る賢夫人に尋ねる。

「璃奈が感じたことから考えると、既に相手は大きく“天秤”を傾けてしまっている状態と思っても良いかと。そうであれば、私たちも後れを取ってはなりません」

「助勢する者が必要と言うことだな？」

「“杯”には、その宿命に連なる者が憑いているとは言え、万全を

期すに越したことはございませんわ」

「我らに、是非その役目をご指示頂きたく存じます」

宗主の言葉に、静かな声で応じたのは恵久美流公国の誇る四審武官、真砂貴^{マサキ}、華衣^{ケイ}、簾^{レン}、透眞^{トウマ}であつた。四人を代表して、最も冷静な真砂貴が発言する。

「全員、と言う訳には参りませんので、我らからお選び頂き度。必ずや、その大任を果たす所存でございます」

「ふむ・・・」

思案げに唸る恵久美流宗主。

「影の回廊の力を使つても、限界があるわ。それに、辿り着けるかどうか・・・」

「無論、危険は承知の上です、姫君」

心配そうに言う璃奈に、重々しく真砂貴は言つた。残る三人も、一様に真砂貴の言葉に頷く。

「しかし、“アルカナの舞”に始まりしこの“変遷”を、座して待つ訳には参りませぬ。寧ろ^{むじろ}、介入の余地が有るだけでも、良しとしなければ」

尚も言い募ろうとする璃奈を制して、宗主が決断した。

「良かるう。我らも時を無駄にすることは出来ぬ。国の護りを弱めることになるのも止むを得ぬ」

四名の真摯な表情を一頻り見回すと、宗主は軽く嘆息して言つた。

「簾。貴公を派遣するでしょう」

「はい。謹んでお受け致します」

輝く様な銀色の髪を肩口で切りそろえた華奢な娘が頷いた。到底、過酷な任に耐えるとは思えないような外見ながら、簾はその強靱な意志の力と賢明さでは四人の中では随一だった。

「簾・・・」

「姫君、ご心配めさるな。簾は我らの中でも意志の力、賢明な知恵、剣の腕に優れております。必ずや、困難な任を果たすで有りましよう」

「そうだぜ、お嬢。人間、喰って寝られれば死にやしない。その点でも、タフな簾は打って付け・・・グワッ！！」

透眞に仕舞いまで言わせずに、簾は静かに、しかし完全にトドメを刺した。只の屍のようだ状態となった透眞に目も呉れず、真砂貴、華衣、簾の三人は宗主、奥方と姫君に深く一礼した。

STAGE 4・5 「それぞれの、想い」（後書き）

三度登場です——“お嬢”こと恵久美流公国第一公女、璃奈姫^{りなひめ}です。エルスと現世——徐々に双方が絡んできています。

次回から、第五章「聖剣の、影」がスタートします。翔、葵、リユオンはどうなるか——ご期待下さい。

STAGE 05 「聖剣の影」 - SCENE #1 (前書き)

“知恵の女神”を前にして、翔と葵は何を想うのか・・・

STAGE 05 「聖剣の、影」 - SCENE # 1

■この世の彼方の島／知恵の女神の神殿

「知恵の・・・女神・・・さま？」

惚けたように、翔はその名前を舌の上に滑らせた。

この世の者とも思えないその姿からは、深い英知と神聖が伝わってくる。

「はい」

銀鈴が鳴るような、というのはこんな声なのだろうか——漠然と翔は思った。だが、そんな惚けたような想いは、葵のキツパリした声に破られる。

「知恵の女神さま、と自ら仰いました。あなたは、私の知るどの神話の神々とも異なると思います。教えて下さい——何故に、私たちをここに呼び寄せたのでしょうか？」

真摯な問い掛けに答えたのは、さざめくような微笑みだった。

「大理”（おおいなることわり）と言うものがあります。“大いなる祖父”（おおいなるそふ）が定められ、彼の創世神でさえも無視できないものです。それが、全ての世と生きとし生けるものを定めています」

「大理”・・・」

そつとその言葉を口にする葵。

「その“大理”の礎^{いしづえ}が揺らいでいます。全てに超越した、そして超越せねばならない“大理”を、己^{おのれ}が邪^{よこしま}な利の為に歪めようとする動きがあります。“大理”が歪められると、全ての“理”（ことわり）が安定を欠き、歪みはじめます。そして、世々の垣根^{こば}が零^{こぼ}たれ、全ては原初である“混沌の海”に投げ戻されてしまいます」

「・・・」

思案顔で女神の説明を聞く葵の傍らで、翔は今聞いた話を自分の中で何とか理解しようとしていた。

“総論的なルールがあつて、それは絶対的なんだな。
そして、その総論的ルールを基盤として、各論的なルールがあるのか・・・”

あれ？ と翔は思った。さっき女神様は“大理”は創造神も無視できないって絶対的なものと言つてたけど、それを歪めるって・・・

「しかし、それならば、その“大理”を歪めようとする存在にも影響が出てしまうのではありませんか？」

思わず、翔は己の疑問を口に出していた。

女神はその視線を翔に向けると頷いた。

「本来であれば、三奈瀬翔——あなたの言う通りでしょう。しかし、如何方法かは判りませんが、その“者”はその“戒め”から逃れる術^{すべ}を見出した、と思われます」

「思われますって・・・知恵の女神さまと仰るあなたでも判らないのですか？」

「・・・だから、お前さん達が呼ばれたのさ」

恐れ多くも女神の言葉を不躰^{ぶしつけ}に引き取って、リュオンが後を続けた。

「先に言つといただろ？ お前さん達の世界の哲学者や思想家達が考える“論理上の神”とは概念が違うのさ。“神”と言っても、何でもかんでも出来る訳じゃない。ましてや、“根本たる絶対的なもの”が揺らぐくらいだ。女神様にも見通せなくてもおかしくはない」

ですよね、と振られた視線に、優しい笑みを浮かべる知恵の女神。

「“黄金の戦士”が言った通り、わたくしには出来ることと出来ないことがあります。この場所を離れられないことも、直接に物質界（Prime Material Plane）に影響を及ぼすことも出来ません。わたくしに出来ることは、あなた方に幾ばくかの助言と知恵を与えることのみ・・・」

女神の説明を聞いた二人は、顔を見合わせた。やがて、嘆息するかのように、翔が口を開いた。

「何故、僕たちなのですか？ どうして僕たちに白羽の矢が立ったのか、全く判りません。」

「そりゃそうだ。魔導も剣技も全く駄目駄目の嬢ちゃんに坊主の二人だもんなあ」

混ぜっ返すリュオンに、剣呑な視線を向ける翔。

「茶化さないで下さいよ、リュオン。女神様さえも原因が判らない事を、只の人である僕や葵さんに何が出来るって言うんですか？

それが判らないから、聞いているんです！」

翔の剣幕に、リュオンは鼻で笑って肩を竦めた。
そんな二人を仲裁するように、女神が静かに言う。

「理解が出来ないのも無理はありません。しかしながら、今ここでその事由じゆうを語るとは出来ないのです」

「・・・教えて貰うことも出来ない、と言うことですか。」

葵の口調に僅かな苛立ちが混じった。

少し顔を伏せるようにして、知恵の女神はそつと言葉を発する。

「あなた方にご迷惑を掛けるのは本当に心苦しいのですが・・・今は、まだ語る時ではありません」

「・・・」

小さく嘆息して葵は黙した。

代わって翔が、少なからぬ憤りを込めて言う。

「何も判らない、何も教えられない——でも、世界がゆがむ程の危険がある。無力な僕たちを呼び出して、一体何を期待しているのですか？！」

その言葉を聞いた知恵の女神は、その叡智の宿る表情に浮かんだ深い憂いの色を深めた。

リュオンはと言うと、腕組みをしたまま皮肉っぱく口端を曲げている。

「・・・」

葵は黙って、腰に下げた剣——『FORTUNE』（フオウチュ
ーン）を見やった。複雑な装飾を付されたその神秘的な剣は、ただ
静かに輝きを放っている。

これは、「自分の」剣だ。色々判らない事が多々あるが、少なく
ともこの剣は自分を「主」と呼んだ。この剣を、自分にもたらし
たのはリュオンだ。そうだ、リュオンは言っていたではないか——

『アオイ。お前は、その剣に主として認められたんだ。魔導の力が
ないと、剣と“話す”事が出来ない。つまり……』

『……先輩には、その“魔導の力”があるってことですか？』
『そういうことになるな。』

“……私には、魔導の力がある？”

だが、どうして自分にそんな力があるのか？ 只の一般人である
自分に、何故にその様な超常的な力が付与されているのか？

“なぜ？”

こんなこと、偶然であるはずがない。偶然では無い、と言うこと
になると、それは必然だ。必然的に、自分は剣と巡り会った。そう、
リュオンとも——そして、翔とも。

何もかも判らない中で、何処とも知れぬ場所で、想像も出来ない
ような事柄と対処しなければならない——そんな中で、安易に首を
縦に振る者は狂人だろう。ここでの蛮勇は、何ら解決にもなりはし
ない。それは、人生経験の浅い葵にも、十分判っている事だった。

だが……。

本当にそれだけで良いのだろうか。

目に見えるものだけで判断して、あとは何も知りませんし判りません、で本当に良いのだろうか。

心の何処か奥底で、それは違うと否定する自分がいる。

心の何処か奥底で、その一步を踏み出しましょう、と想う自分がいる。

葵の中で、だんだんと歯車が噛み合っていく。

「葵さん」

葵の想いは、己の名を呼ぶ翔の声に引き戻された。

何時の間にか三者とも自分に注目している。

「確かに、判らない事が多すぎて、今僕たちの陥っているこの事態は釈然としません。

けれども、考えてみれば、どうにも“非日常的”な事実も幾つかあります。

葵さんの元に顕れた“金杯”。学校に現れた“亡者達”。そして何より——僕たちを何度も危機から救ってくれたリユオンと、何処とも知れないこの島にお住まいになる女神様がいます」

「・・・全ての不可能を消去して、最後に残ったものが如何に奇妙なことであっても、それが真実となる・・・」

「シャーロック・ホームズ、ですね」

翔に頷いた葵の表情には笑みが浮かんでいた。

霧が払われるように、迷いは葵から消えていた。

「全てが荒唐無稽に思えるけれど、それは単に私たちが前後関係を知らないだけ——事実関係だけをとれば、一本筋が通っている。金

杯、黄金の戦士、聖剣、知恵の女神、世界の理・・・」

「・・・そのキーワードから導き出される帰結は、とってもヒロイックですね」

翔は少し苦笑いを浮かべて言った。

「僕たちの何処に、そんな力があるのか、到底理解出来ませんけど・・・」

「そうね。理由も何も、今は判らないけれど・・・」

翔に頷くと、葵は知恵の女神に向き直った。

女神の鮮やかな碧の双眸には、人知を越えた知恵の輝きが煌めいている。冷たいとも思えるような、造形美の極地と言えるその表情だが、その中に葵は深い慈悲の想いを感じるのだった。

そうだ・・・何が判らなくても。何が無くて。今はただ、自分の感覚に素直にあることが大切だ——そんな葵を力づけるような、翔の笑みが葵の背中を後押しする。

「女神さま。」

決意を込めて、葵ははっきりと言葉を発した。

「何をすべきなのか——どうか、私たちに助言をお願いします」

SCENE #2に続く

STAGE 05 「聖剣の、影」 - SCENE #1 (後書き)

お待たせ致しました。第五章の開始です。色々と書きたい内容は有るのですが、なかなか旨く纏まりません。必然、更新ペースが長くなりますが、宜しくお願い申し上げます。

「追記」

内容にちぐはぐな部分がありましたので、大幅改稿致しました。これで、多少は理解し易くなったと思います。亀以前の更新速度ですが、今後とも宜しくお願い申し上げます。

STAGE 05 「聖剣の影」 - SCENE #2 (前書き)

徐々に明らかになっていく事実には、翔と葵は何を想うか？

STAGE 05 「聖剣の、影」 - SCENE # 2

■この世の彼方の島／知恵の女神の神殿

『何をすべきなのか——どうか、私たちに助言をお願いします』

葵のその言葉を聞いて、知恵の女神はその端正な顔に微笑みを浮かべた。

「神和姫葵——貴女の果断な思考に、
三奈瀬翔——貴方の聡明な行動に、
わたくしは感謝と敬意を表します」
「え、と・・・」

その笑みは、恰も端麗な月光の輝きに似た透明感に満ちていた。
その声は、心地よい音楽の様な調べに聞こえる。

翔は、その輝く碧の双眸に飲まれて、急速に鼓動が高まっていくのを感じた。

葵として例外では無かったのだが、その深淵に溺れぬよう、辛うじて踏み留まっている。

無論、知恵の女神が二人を誘惑している訳ではない。

要は、だてに“女神”を名乗る訳では無い、と言うところなのだろう。

「“神杯”は持っておりますね」
「はい」

あの騒動の中でも無くさなかった学生靴をパチンと開けると、葵は鈍く光る小さな金のゴブレットを取り出した。

「よくぞ護り通しました、葵。その“神杯”がこちらに有ることで、“天秤”もわたくしたちにとって多少有利に傾いてくれるでしょう」
気を許すことは出来ませんが——と知恵の女神は結んだ。

「・・・状況が私たちに有利である内に、次の手を打っておく必要がありますね？」

考えを纏めるような疑問形での葵の問い掛けに、知恵の女神は頷いた。

「葵の言う通りです。この小さな一步を更に確実にする為に、“神杯”だけではなく、“聖符”をも手に入れる必要があります」

「“護符”？」

耳慣れぬ言葉に、翔が敏感に反応する。

「“神杯”と対になるもので、“神杯”の力を制することが出来るようになる“神遺物”（ARTEFAKTE）です」

「“神遺物”・・・」

「ええ。“神杯”だけでもそれなりの力は発揮しますが、“神杯”と“護符”の二つが揃ってこそ、本来の力を発揮します」

「早い話、“歪み”を正せる様な強大な力を、それを持つ者に与えてくれるのさ」

「・・・それって、個人が持つには大き過ぎる力なのでは？」

誤用されたらどうするんですか、とお気楽に言うリュオンに翔が突っ込みを入れる。

「大丈夫です、翔。“神杯”も“護符”も、その力を発揮する為に幾つもの条件があります。何処でも自由に力を発揮できると言う訳ではありません」

「プロテクトが掛かっている、と言うことですしょうか？」

「その理解で正しいです。もっとも、大理が影響おおいなることわりされていることで、その“保護”が何処まで保持されるかは不明です」

翔と葵は思わず顔を見合わせた。

女神の話が進む毎に、状況が厳しくなっていく。

「・・・これも、時間との勝負、と言う風に僕は理解したのですけど・・・」

「奇遇ね、翔くん。私も同じ結論に辿り着いたわ」

ちよつと溜息を付きたくなった二人に、知恵の女神はやんわりと言った。

「時間は、わたくしたちの利にもなり、害にもなります。翔、葵――あなたが“力”を振るえることに疑問を持ちませんか？」

「“力”ですか？」

葵は、自分の腰に吊った剣を見ると、はつとなる。

「もしかして・・・“歪み”が原因で、私たちにも“力”が使えるようになったと言うことですか？」

「ええ。勿論、誰にでも“力”が使えるようになる、と言う訳ではありません。素養と切っ掛けが無ければ、その者に“力”は付与されません。そして、その力は“歪み”が大きくなるにつれ、強くなつていきます」

知恵の女神の説明に、葵は脳裏に浮かんだ嫌な想像——それを恐る恐る口に出してみる。

「女神さま——その“力”と言うのは……」

葵が皆まで言う前に、知恵の女神は深刻な表情を浮かべて頷いた。

「既に“力”を持つ者にも——影響が出るでしょう」

「それが“ソイツ”の目的だろうさ。より一層の“力”を持つ——恐ろしい事態だぜ」

渋面を作ってリュオンが言う。

「良からぬ想いを持つ者が分不相応の“力”得ると、個々の世を統べる“理”（ことわり）だけではなく、“祖父”の定めた“大理”（おおいなることわり）にまで影響を及ぼす力を得るでしょう」
「そうなりや、全ては“ソイツ”の奴隷だぜ。“ソイツ”の意志が“大理”に取って代わるんだからな」

暫し、辺りを沈黙が支配した。

黙ったままで難しい表情を浮かべる葵。

顎に手をやり、聞いたことの理解に努める翔。

腕組みしながら、不敵な笑いを浮かべるリュオン。

憂いを帯びた表情の知恵の女神。

その沈黙を破ったのは、葵だった。

自分の想いを確認するかのように、ゆっくりと噛み締めるように言葉を発する。

「……新しい“絶対的存在”が生まれることを、どうしても阻止

しなければいけない……その為に選ばれたのなら——私は躊躇^{ちゅうちよ}はしない……」

「良い覚悟だ、葵」

口端に笑みを浮かべてリュオンが言った。

「僕も、葵さんと同じ想いです。概念上であるなら兎も角、本当の意味での神など要りません。……あ、っと。失礼しました」

何を口走っているのか——翔は慌てて知恵の女神に謝罪する。

「あくまでも、僕たちの世界に於いて、と言う意味です。女神様の存在を否定するものではありません」

「ふふふ、いいですよ、翔。あなた方の世界では、“神”からの干渉がほぼ皆無です。人の手に余る存在を欲さないのは、ごく自然な想いでしょう」

穏和に笑みを浮かべる女神に、翔は胸を撫で下ろした。

「よかったな、暴言を吐いた相手がやさしい女神さんで」

ニタニタ笑いながら言うのはこの人——伝説にも謳われる漠羅爾旧王朝の高祖、リュオン・バクラニ。だが、今のリュオンの姿から、誰がその様な高貴な身分を想像できるだろうか？ にやつき顔を見ている限り、只の変な兄ちゃんにしか思えない。

「女神さま」

気を取り直して、葵が聞いた。

「先程お話しされたように、“護符”を取り戻すことが先決だと思いますが、その後はどうすれば良いのでしょうか？」

「“神杯”と“護符”が揃うこと、これがまず第一の条件です。この二つを揃えた後は、この歪みの原因である“原初を中心”（Concordant opposition）に向かい、全ての歪みを正す必要があります。そこに行く為には、まずは“影の回廊”で“彼方への門”を開く必要があります」

「影の回廊か——容易ならん場所だな」

珍しく、真剣な表情でリュオンが言った。怪訝そうな表情で翔が聞く。

「それほど、なんですか？」

「ああ。今のお前さん達の実力では、仮に“神杯”と“護符”が揃っていても、影守たちに鎧袖一触がいきんごうじゅくいちふくだろうな」

「影守？」

「“影の回廊”に挑んだ連中のなれの果てさ」

「ごくり、と翔は喉を鳴らした。

「・・・それでも、行かねばならないのでしょうか？」

囁くように、そつと葵が言う。

「そうだな。だが、まだ多少の時間はある。この島の時間軸は、他の場所とは異なる。“大理”の支配するこの場所は、“大理”が許すだけ留まることが出来る。その間の時間は、原質界では止まったままだ」

「時間の外にあるというの？」

葵にリュオンは首肯する。

「もつとも、ここにどれだけ留まれるかは判らない。それは、“大理”のみが知ることだ。だから、数日以上長い計画は立てられない。最重点を一つ決め、後は日々で対応していく事が肝要だな。その範疇で、お前達を鍛えなきゃならないな」

「それには、わたくしもお手伝いできると思います」

「女神さまが？」

「はい。“大理”の許す範囲に於いて、わたくしが二人に魔導を手ほどき致しましょう」

「そりゃ心強い。それなら、オレは白兵に特化することにしよう」

不敬にも当たるようなニヤリ笑いを知恵の女神に向けるリュオンに、翔と葵は呆れたように脱力した。

SCENE #3 に続く

STAGE 05 「聖剣の、影」 - SCENE #2 (後書き)

大変お待たせ致しました。漸く、更新まで漕ぎ着けました。書いては消し。書いては消しの繰り返しで、現状でもどうかと思う出来ですが、これ以上お待たせするのも忍びなく思い、アップする事に致しました。相変わらずの亀ペースが続きますが、今後も更新して参ります。宜しくお願い申し上げます。

STAGE 05 「聖剣の、影」 - SCENE #3 (前書き)

始まった葵とリュオンの特訓。何時終わるとも知れない時間の中で、葵は十分な剣技を身につけられるのだろうか？

STAGE 05 「聖剣の、影」 - SCENE # 3

■この世の彼方の島／砂浜

「はあっ！！」

裂帛の気合いと共に、葵は己が剣を袈裟懸けに振り下ろす。その手に在るのは、時空を越える金色の聖剣「フオウチューン」である。

「おおっと」

その金の太刀筋を苦もなく躲すとリュオンはにやりと笑って言った。

「気迫は認めるがね。そんな甘い踏み込みじゃ、止まっている奴も相手にできないぞ」

「・・・」

奥歯を噛み締めると、葵は剣の柄を握る拳が白くなる程力を込めた。そして、新たな一撃に一步を踏み出す。

“体力と精神力は化け物並みだな”

幾度目になるだろうか、葵の剣撃を避けながらリュオンは思った。斯様な光景が、既に二時間は続いている。折れそうな痩身ながら、葵は泣き言も言わず、只ひたすらリュオンに打ち込みを続けている。おまけに、ここは足場が悪い砂浜だ。一層体力が削られる筈だが、今のところ葵の状態に変化はない。

“本当に根性があるお嬢さんだよ”

リュオンは、何処か葵との特訓を楽しく思う自分を感じていた。何よりも、煌めくような輝きを宿した瞳が良い。その黒い双眸は、何処までも諦めることなく、挑戦的な光を湛えている。

“それは兎も角として・・・そろそろ休息させないとな”

このままだと、それこそ葵が倒れるまで続きそうだった。流石にそれでは単なるスパルタで、特訓には成らない。リュオンは、葵の連撃を避けると、ひょいと片手を上げる。

「よし、今日はここまで！」

「・・・」

大きく息を吐き、葵はリュオンに一礼した。静かにフオウチュウンを鞘に収めると。

「えっ！！ あ、アオイ！」

がつくりと膝をつく。苦しそうに肩で息をしながらも、葵の双眸からは煌めく輝きは薄れない。

「・・・昨日より・・・持つように・・・」

「そうだな。昨日よりも今日。アオイ、毎日伸びてきてるよ」

「・・・」

微かな笑みが、葵の口元に浮かぶ。

「・・・でも、まだ一回も・・・当たらない・・・」

「おいおい、アオイ。オレはこれでも歴戦の勇士なの。こんな短期間でひよっこに追いつかれちゃ、沽券に係わるって」

「・・・ひ・・・よっこ・・・」

はあはあと苦しい息の下、リュオンを見据える葵の冷徹な視線は全く揺るがない。

「おいおい、そう睨むなよ。可愛い顔が台無しだ。そんな事だと、シヨウに愛想を尽かされるぞ」

「え・・・」

一拍おいて、急激に紅葉する葵の表情を、にやにやしなからリュオンは堪能した。

「ま、でもその心配もないか。シヨウはアオイの歩いた地面を崇拜する位だからな」

「戯れ言を・・・」

「信じていいのか？ 誰が見ても明白だろうに。そう言えば、先だつては我らが“知恵の女神様”も微笑ましって二人をご覧になっていたぞ」

「・・・」

絶句する葵。よりのよって、女神様まで・・・。

「シヨウは有望株だぞ？ この短期間で急速に魔導の力を上げてきている。もう、初級はほぼ使えるようになったって聞いた。アオイの剣技もそうだが、シヨウも魔導に非凡な才があるんだろう。この分だと、仕上がりも遠くないな」

手を差し出して、葵を引っ張って立たせると、リュオンは笑って

言った。

葵は軽く服を叩いて砂を落とすと、小気味よい音と共にフオウチ
ューンを鞘に収める。

「その剣にも慣れたな」

「ええ、手にしっくり来るわ。まるで・・・もう何年も持っていた
ように・・・」

まだ、この剣を手にして数日なのにね、と言いながらフオウチ
ューンに目をやる葵は、不思議そうな表情を浮かべた。

「それはそうさ。その剣は、お前さんとは切っては切れない縁があ
る。過去現在未来——その剣は、何時の時代でもお前さんの相棒と
して存在してきたんだからな」

「今は判るけれど——過去と、未来？ それは、私の別の生と言う
こと？」

「そうだ。その剣の持ち主を、オレは三人知っている。アオイ、お
前さんを含めてな。長い刻ときのなかで、もしかすると“もう一人の自
分”と逢う機会があるかもな」

リュオンの言葉に、葵は目を見張る。

「・・・リュオンには、そんな経験あるの？」

「ああ。いけ好かない相手だったがな。まあ、“そいつ”から貴重
な技を幾つか貰ったからな。気持ち程度の感謝はしてるがね」

二度と逢いたいとは思わないな、と締めくくったリュオンに、葵
は思わず笑みを浮かべていた。

SCENE # 4 に続く

STAGE 05 「聖剣の、影」 - SCENE #3 (後書き)

長らくお待たせしました。「幻界創世記」の続きです。公的に多忙でなかなか更新が出来ませんが、気長にお待ち頂ければ幸いです。

STAGE 05 「聖剣の、影」 - SCENE #4

■この世の彼方の島／神殿

「判りますか、シヨウ？」

「・・・はい。まだ、微かにですが・・・」

知恵の女神の神殿の奥津城^{おくつき}で、シヨウは知恵の女神直々に、魔導の修練を受けていた。何度教えて貰っても、初級を越える魔導の実現が出来ない自分に、翔はたして自分に魔導の才など有るのだろうか、と溜息を付いた。

「シヨウ、魔導は才ではありませんよ」

落ち込み気味の翔に、女神は変わらぬ優しい言葉を掛ける。

「魔導は、意志の力こそが大事です。焦らず、自分がそれを成そうという、自分の想いを感じて下さい」

「はい・・・」

語尾が濁る辺り、翔にして、まだ魔導への理解が判然としていないことが見え隠れしている。

“焦っても仕方が無いけど・・・時間がどれ位あるかも判らないし。そんなに悠長に構えていられないんだけどなあ”

心の中でばやく翔。如何せん、魔導習得は遅々として進まない。

「今日はここまでに致しましょう」

暫し、試行錯誤の時間が過ぎた後。知恵の女神が翔に言った。

「女神様、まだやれますか？」

「いいえ、直接の修行はこれまでと致しましょう。シヨウはこの後、“聖泉の座”に座って、心を無にする修行を行って貰います」

「心を無に？」

「はい。シヨウには、自分の心を力を自分で明確に感じる必要があります。“聖泉の座”は、その修行に最適です」

「その“聖泉の座”とは何処にあるのですか？」

「今、見せましょう」

知恵の女神は、円形の泉の中心を指し示した。するとそこに、泉の中から円形の台が浮かび上がって来るではないか。完全に泉の水面上に浮かび上がった台座は、不思議な事に全く塗れていなかった。

「これが・・・」

「ええ。この座の上に座って、自分の心を見つめて下さい。何かを感じるまで・・・」

「座り続けます。何かを感じる事が出来るまで。」

何処か自分に言い聞かせる様に、翔は言った。

「どうです？」

「どう、とは？」

小首を傾げて、知恵の女神はリュオンに問う。

「嫌ですね、お判りでしょうか」

「口にせねば、応えられぬ——それが理ことわりだと思つのですが？」

「はあ、女神様は相変わらずですね」

苦笑いを浮かべると、リュオンは肩を竦めた。

「シヨウの事です。アオイには本人に心配を掛けない為に、シヨウが順調だと言いましたかね」

「アオイの方は、順調なのでしょう？」

「そこそこには。しかし、あとどれ位時間があるかが計算できない以上、今の実技の上達速度では不十分ですね」

残念ながら、と珍しく真面目な表情のリュオンに、宝石の様な碧の双眸を細めて、知恵の女神が返す。

「“ここ”に居る事が出来なくなつてからでは遅すぎますね」

「然り——です。しかしながら、能動的に対応する事を考えれば、

“ここ”が最高位に近い次元に有る事が幸いです」

「修練を積む時が在り、影に邪魔をされない場所——」

「無論、どの場所が最適か、女神様はご存じですよね？」

知恵の女神は、リュオンの問いに対して、何処までも透明な笑みを浮かべた。

「ははは、愚問でした。では、早速二人を連れて行くとしましょうか——緑の魔境にね」

SCENE #5に続く

STAGE 05 「聖剣の影」 - SCENE #4 (後書き)

お待たせしました、「幻界創世記」の続きです。少しずつですが、剣技と魔導の腕を上げる葵と翔。しかし、彼らには十分な時間が残されていません。そんな中で、リュオンが打った手は？ 次回、ご期待下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5674e/>

幻界創世記

2010年11月3日04時46分発行